

# 武蔵埼玉 稲荷山古墳

史跡埼玉古墳群 稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書



2007

埼玉県教育委員会

# 武蔵埼玉 稲荷山古墳

史跡埼玉古墳群 稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書

2007

埼玉県教育委員会

# 武蔵埼玉 稲荷山古墳

史跡埼玉古墳群 稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書

2007

埼玉県教育委員会

巻頭カラー



稲荷山古墳現況 H19.2.2撮影

# 序

稲荷山古墳の所在する行田市埼玉は、古代武蔵國の中心として栄え、埼玉県名発祥の地とされました。当地には現在8基の大型前方後円墳と1基の大型円墳からなる古墳群が、密集築造されており、全国的にも希有な例として国史跡「埼玉古墳群」に指定されております。

埼玉県では昭和42年度から全国に先駆けて、古墳群一帯を「さきたま風土記の丘」として史跡環境の整備を推進してまいりました。稲荷山古墳はこの整備計画に基づき昭和43年8月に墳丘の発掘調査が行われ、後円部から礫槨と粘土槨の2基の埋葬施設が検出されました。

そして、10年後の昭和53年には礫槨から出土した鉄製品の保存修理中に、一振りの鉄剣から115文字の金象嵌銘文が発見され「100年に一度の大発見」と大きなニュースになりました。その内容は日本古代国家成立の解明に貴重な手掛かりとなる第一級資料であり、昭和58年、出土品は国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」に指定されました。

この間、昭和48年には周堀の範囲確認調査を実施して、前方部、周堀、造出しなどの諸施設の形態が明らかになり、昭和52年度には水堀の復原が行われました。

「さきたま風土記の丘」は金錯銘鉄剣の発見に伴い全国からの見学者が増大し、稲荷山古墳のさらなる整備の必要性が高まりました。そこで新たに「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を設置し、平成9年度から前方部の復原と周堀表示のための発掘調査及び、復原工事に着手しました。

当初は5か年計画でスタートした事業でしたが、最終的には10年の歳月を経て平成18年度をもってひとまずの終了を見ました。ここに稲荷山古墳は1500年前の築造された当時の姿によみがえりました。古代のロマンに満ちた「さきたま風土記の丘」の主役として、古墳公園を訪れる多くの人々に郷土の歴史に親しんでいただければと期待しております。

本書は稲荷山古墳のこれまでの発掘調査の結果と復原整備工事の内容を『史跡武蔵埼玉稲荷山古墳一埼玉古墳群発掘調査・史跡整備事業報告書一』として刊行するものです。本書が埼玉古墳群の保護及び教育、学術の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力をいただいた文化庁及び埼玉古墳群整備協議会をはじめ、関係する多くの方々に心から厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

埼玉県教育委員会教育長  
島村和男

# 目 次

巻頭図版

序

例言

目次

## 第1部 発掘調査とその成果

第1章 稲荷山古墳の発掘調査とその経過	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過と調査の組織	1
第2節 発掘の経過－発掘調査日誌抄－	3
第3節 稲荷山古墳の立地と環境	7
第4節 過去に行われた発掘調査の概要	10
第5節 平成9・10・11年度発掘調査の概要	16
第2章 墳丘・周堀・中堤の発掘調査	20
第1節 平成9年度の調査	20
第2節 平成10年度の調査	40
第3節 平成11年度の調査	50
第4節 平成13年度の調査	69
第5節 円筒埴輪	71
第6節 形象埴輪	131
第7節 土製品・石製品	141
第8節 土師器・須恵器	143
第9節 その他の遺物	146
第10節 埴輪の胎土分析	147
第3章 発掘調査のまとめ	157
第1節 稲荷山古墳の墳丘・周堀・造出しについて	157
第2節 稲荷山古墳の埴輪と提起される諸問題	159
第3節 土師器・須恵器の様相と年代比定	182

## 第2部 保存整備工事

第1章 前回の保存整備工事とその後の経過	188
第2章 事業計画の策定と協議の経過	192
第1節 保存・整備事業の組織	192
第2節 史跡埼玉古墳群保存整備協議会の運営	192
第3章 基本計画	197
第4章 基本方針・実施設計	198
第1節 基本方針の背景と前提	198
第2節 実施設計	199
第3節 実施計画	203
第5章 保存整備事業の経過	204
第1節 事業の概要と経過	204
第2節 年度別事業内容	206

# 例 言

- 1 本書は埼玉県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、実施した行田市埼玉97番地ほかに所在する、埼玉古墳群稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業の報告書である。
- 2 事業の期間は平成9年度から平成18年度までの10か年間である。  
なお、稲荷山古墳の発掘調査は昭和43年度に主体部と後円部墳丘を対象とした第1次調査、昭和48年度に周堀を対象とした第2次調査が行われており、全体の経過が理解できるように、これらの調査概要も収録した。
- 3 史跡保存整備事業は「埼玉古墳群保存整備協議会」の指導のもとに、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県立さきたま史跡の博物館（旧さきたま資料館）が実施機関としてこれに当たった。
- 4 事業の組織は別表に掲げるとおりである。
- 5 発掘調査は墳丘・周堀・造出し・中堤・外堤の確認を目的として平成9年度から11年度の3年次計画で実施し、平成9年度は宮昌之、平成10年度は西口正純、平成11年度は中山浩彦が担当した。
- 6 遺構の写真撮影は各調査担当者が、遺物については杉崎茂樹と若松良一が行った。また工事写真については担当者のほか、一部施工業者の撮影によるものを使用した。
- 7 出土品の整理は若松良一が担当して平成17年度に復原作業と実測を行い、平成18年度に測量図の編集・製図と報告書の作成を行った。
- 8 実測図の作製は須恵器・土師器を杉崎茂樹が、埴輪を若松良一が、その他の遺物を井上尚明が行い、埴輪の一部について長谷尾篤の協力を得た。
- 9 本書の執筆分担は下記のとおりであるが、第2部第7章に柳田敏司・大塚初重の両委員から寄稿を得た。また埴輪の胎土分析報告は株式会社パレオ・ラボに委託した。  
第1部第1章第1・4節（駒宮史朗）  
第1部第1章第3節・第2章第8節・第3章第3節・第2部第1章（杉崎茂樹）  
第1部第2章第9節・第2部第6章第5節（井上尚明）  
第2部第2章～第6章（石坂俊郎）  
第1部第1章第2・5節・第2章第1～7節・第3章第1・2節（若松良一）
- 10 本書の編集は若松良一が行い、駒宮史朗が監修した。
- 11 整備事業に当たっては文化庁文化財保護部記念物課の本中真・小野健吉両氏のご指導を頂いた。
- 12 設計図、設計書の検討及び各過程において埼玉県行田県土整備事務所の協力を得た。
- 13 発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間に下記の方々と機関からご指導、ご協力を賜った。

文化庁・宮内庁書陵部・行田市教育委員会

新井 端・磯崎 一・市川康弘・越前谷 理・江原昌俊・大谷 徹・加藤一郎・金井塚良一・加部二生・河内一浩・川西宏幸・君島利行・車崎正彦・剣持和夫・近藤義郎・酒井清治・坂本和俊・澤田秀実・島田孝雄・城倉正祥・杉山晋作・清喜裕二・関本寿雄・高橋一夫・塚田良道・辻川哲朗・長井正欣・中川晶・中島利治・中島洋一・中村倉司・新山保和・日高 慎・本間岳史・森田克行・山崎 武・山田俊輔・弓 明義・横澤真一・若狭 徹

第6章 保存整備工事の内容	211
第1節 墳丘復原工事	211
第2節 内堀修景工事	217
第3節 園路設置工事	222
第4節 解説版製作	225
第5節 稲荷山古墳復原完了出来高測量図の作成	228
第7章 考察	
第1節 風土記の丘造成余話	229
第2節 埼玉県稲荷山古墳の重要性	233

## 挿図目次

第1図 稲荷山古墳と周辺の遺跡分布図	8	第36図 平成11年度6～10区平面図	67
第2図 昭和43年後円部調査区配置図	11	第37図 平成11年度土層断面図(5)	68
第3図 礫槲と金錯銘鉄剣	12	第38図 平成11年度西側内堀・中堤遺物出土位置図	70
第4図 稲荷山古墳第2次調査発掘調査区位置図	14	第39図 稲荷山古墳出土埴輪重量図	72
第5図 稲荷山古墳第2次調査主要遺物図	15	第40図 円筒埴輪形態分類図	74
第6図 稲荷山古墳調査区全体測量図(1/800)	17・18	第41図 円筒埴輪口縁部形態分類模式図	74
第7図 平成9年度1区平面図	21	第42図 円筒埴輪凸帯分類模式図	74
第8図 平成9年度1区内堀遺物接合関係図	22	第43図 稲荷山古墳出土円筒埴輪分類図(1)	77
第9図 平成9年度2～4区平面図	23	第44図 稲荷山古墳出土円筒埴輪分類図(2)	82
第10図 平成9年度土層断面図(1)	24	第45図 円筒埴輪実測図(1)	87
第11図 平成9年度土層断面図(2)	25	第46図 円筒埴輪実測図(2)	88
第12図 平成9年度土層断面図(3)	26	第47図 円筒埴輪実測図(3)	89
第13図 平成9年度2区内堀遺物接合関係図	28	第48図 円筒埴輪実測図(4)	90
第14図 平成9年度2区外堀遺物接合関係図	30	第49図 円筒埴輪実測図(5)	91
第15図 平成9年度4区石材出土状態図	34	第50図 円筒埴輪実測図(6)	92
第16図 稲荷山古墳出土石材分布図	36	第51図 円筒埴輪実測図(7)	93
第17図 平成9年度5区平面図	38	第52図 円筒埴輪実測図(8)	94
第18図 平成9年度土層断面図(4)	39	第53図 円筒埴輪実測図(9)	95
第19図 平成9年度5区①遺物接合関係図	41	第54図 円筒埴輪実測図(10)・底面拓影図	96
第20図 平成9年度5区遺物接合関係図	42	第55図 円筒埴輪拓影図(1)	101
第21図 平成10年度1・2区平面図	44	第56図 円筒埴輪拓影図(2)	102
第22図 平成10年度土層断面図(1)	45	第57図 円筒埴輪拓影図(3)	103
第23図 平成10年度3区平面図	48	第58図 円筒埴輪拓影図(4)	104
第24図 平成10年度土層断面図(2)	49	第59図 円筒埴輪拓影図(5)	105
第25図 平成11年度1区平面図	51	第60図 円筒埴輪拓影図(6)	106
第26図 平成11年度土層断面図(1)	52	第61図 円筒埴輪拓影図(7)	107
第27図 平成11年度1区遺物接合関係図	54	第62図 円筒埴輪拓影図(8)	108
第28図 平成11年度2区平面図	56	第63図 円筒埴輪拓影図(9)	109
第29図 平成11年度土層断面図(2)	57	第64図 円筒埴輪拓影図(10)	110
第30図 平成11年度3区平面図	59	第65図 円筒埴輪拓影図(11)	111
第31図 平成11年度土層断面図(3)	60	第66図 円筒埴輪拓影図(12)	112
第32図 平成11年度3区遺物出土位置図	61	第67図 円筒埴輪拓影図(13)	113
第33図 平成11年度4・5区平面図	63	第68図 円筒埴輪拓影図(14)	114
第34図 平成11年度土層断面図(4)	64	第69図 円筒埴輪拓影図(15)	115
第35図 平成11年度4区遺物接合関係図	65	第70図 円筒埴輪拓影図(16)	116

第71図	円筒埴輪拓影図(17)	117	第91図	階段の設置工事	191
第72図	円筒埴輪拓影図(18)	118	第92図	現況図(右)・復原プラン図(左)(1/1000)	200
第73図	円筒埴輪拓影図(19)	119	第93図	復原プラン・現況地形重ね図(1/600)	201
第74図	円筒埴輪拓影図(20)	120	第94図	墳丘復原工事年度別工区配置図	211
第75図	円筒埴輪ヘラ記号拓影図	121	第95図	墳丘復原盛土計画図(1/600)	213
第76図	形象埴輪実測図(1)	132	第96図	墳丘しがら柵配置図(1/600)	215
第77図	形象埴輪実測図(2)	134	第97図	しがら柵詳細図(上 1/40)・同配置 断面図(下 1/600)	216
第78図	形象埴輪実測図(3)	136	第98図	墳丘排水施設配置図(1/600)	218
第79図	土製品・石製品実測図	142	第99図	排水路施設詳細図①(1/20・1/40)	219
第80図	土器実測図・拓影図	145	第100図	排水路施設②周堀修景詳細図(1/20・1/40)	220
第81図	その他の遺物実測図	147	第101図	周堀排水施設配置図(1/1000)	221
第82図	胎土分析資料実測図	153	第102図	周堀修景・園路詳細図 (1/20・1/40)	223
第83図	稲荷山古墳復原模式図	158	第103図	園路階段詳細図(1/40・1/60)	224
第84図	稲荷山古墳円筒埴輪A類参考資料集成	162	第104図	解説板設計図(立面1/30 断面1/10)	226
第85図	時間差配置の実例図	174	第105図	解説表示板図	227
第86図	稲荷山古墳と共通する遺物実測図	176	第106図	埼玉稲荷山古墳と同時期の古墳主体部実測図	235
第87図	稲荷山古墳への埴輪供給地推定図	177	第107図	稲荷山古墳と同時期の古墳から出土した 副葬品	237
第88図	出土土師器の比較検討資料	186			
第89図	出土須恵器の比較検討資料	187			
第90図	埋葬主体部の保存と活用	190			

## 表目次

第1表	石材の種類別重量統計表	35	第7表	稲荷山古墳出土埴輪(拓影図)割合表	86
第2表	稲荷山古墳調査区別出土埴輪重量表	71	第8表	稲荷山古墳出土円筒埴輪(実測図) 観察表	97
第3表	稲荷山古墳円筒埴輪分類基準表	75	第9表	稲荷山古墳出土円筒埴輪(拓影図)観察表	122
第4表	稲荷山古墳円筒埴輪分類表	85	第10表	埼玉古墳群円筒埴輪系統別編年表	166
第5表	稲荷山古墳出土円筒埴輪の分類別 諸要素比較表	86	第11表	埼玉古墳群を中心とする朝顔形円 筒埴輪の編年チェックリスト	170
第6表	稲荷山古墳出土埴輪(実測図)割合表	86			

## 写真図版目次

図版1	241	図版20	260	図版39	279
図版2	242	図版21	261	図版40	280
図版3	243	図版22	262	図版41	281
図版4	244	図版23	263	図版42	282
図版5	245	図版24	264	図版43	283
図版6	246	図版25	265	図版44	284
図版7	247	図版26	266	図版45	285
図版8	248	図版27	267	図版46	286
図版9	249	図版28	268	図版47	287
図版10	250	図版29	269	図版48	288
図版11	251	図版30	270	図版49	289
図版12	252	図版31	271	図版50	290
図版13	253	図版32	272	図版51	291
図版14	254	図版33	273	図版52	292
図版15	255	図版34	274	図版53	293
図版16	256	図版35	275	図版54	294
図版17	257	図版36	276	図版55	295
図版18	258	図版37	277	図版56	296
図版19	259	図版38	278		

# 第1部 発掘調査とその成果

## 第1章 稲荷山古墳の発掘調査とその経過

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過と調査の組織

稲荷山古墳は昭和12年に前方部が削平され、その後放置されたままの状態であった。「さきたま風土記の丘」建設では、昭和43年に後円部の埋葬施設確認調査が行われた。昭和48年度には前方部と周堀の確認調査が行われ、調査結果を基に昭和51年に内堀の一部と前方部の平面プランが復原された。そして昭和53年には金錯銘鉄剣が発見され、にわかに稲荷山古墳が注目を浴びるところとなった。

古墳群を訪れた多くの見学者から、古墳のイメージがより具体的にとらえられ、正しく理解できるように築造当初の姿に復原してほしい。という要望が数多く寄せられた。

こうした利用者の意見に応え、新たな稲荷山古墳の保存と活用を図るべく平成9年度から国庫補助を得て「史跡埼玉古墳群保存整備事業」を実施した。

事業を実施するに当たって、学識経験者を中心にした「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を設置し、埼玉県教育委員会を主体に以下のように組織した。

#### 史跡埼玉古墳群保存整備協議会

##### 委 員

- 柳田敏司 (埼玉県文化財保護審議会会長・埼玉県文化財保護協会会長 平成9年～18年度)  
大塚初重 (明治大学名誉教授 平成9年～18年度)  
岩崎卓也 (千葉県松戸市立博物館長 平成9年～18年度)  
亀井正道 (元日本大学教授 平成9年～10年度)  
竹井雄次郎 (埼玉地区連合自治会長 平成9年～17年度)  
今村満里子 (行田市自治会婦人部連合会会長 平成9年～12年度)  
萩原純夫 (埼玉県北部公園建設事務所長 平成9年～10年度)  
三輪嘉六 (独立行政法人九州国立博物館長 平成11年～18年度)  
戸張善雄 (埼玉県北部公園建設事務所長 平成11年～12年度)  
伊藤正博 (埼玉県北部公園建設事務所長 平成13年～14年度)  
星野 修 (埼玉県行田県土整備事務所長 平成15年)  
内野陽三 (埼玉県行田県土整備事務所長 平成16年～17年度)  
並木孝之 (埼玉県行田県土整備事務所長 平成18年度)  
大沢由子 (元行田市社会教育委員 平成13年～18年度)  
青木繁夫 (独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長 平成18年度)  
梶島邦江 (埼玉大学教授 平成18年度)  
横川好富 (埼玉県文化財保護審議会副会長 平成18年度)  
吉野悠一郎 (埼玉県東松山県土整備事務所副所長 平成18年度)  
諸貫貞雄 (元荒川上流土地改良区管理者 平成18年度)

## 事務局

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 桐川 卓雄（平成9年～13年度） 稲葉 善徳（平成14年～17年度）  
島村 和男（平成18年度）

事務局（企画・調整） 埼玉県教育局文化財保護課・埼玉県教育局生涯学習文化財課

参事兼課長 矢部 保雄（平成17年度）

課長 塩野 博（平成9年～11年度） 林 宏一（平成12年～14年度）  
高橋 一夫（平成15年度） 藤野 龍宏（平成16年度）  
錢場 正人（平成18年度）

副課長 水村 孝之（平成15年度～16年度） 宮崎 朝男（平成17年度～18年度）

主幹 柿沼 幹夫（平成13年～14年度）

民俗文化財・記念物係長 柳 正博（平成9年度）

民俗文化財・記念物担当主幹 飯塚 好（平成13年～15年度）

同 井上 尚明（平成15年度）

記念物担当主幹 井上 尚明（平成16年度） 井上 肇（平成17～18年度）

記念物担当専門調査員 斉藤 修平（平成10年～12年度）

民俗文化財・記念物担当専門調査員 杉崎 茂樹（平成13～14年度）

主任 田中 正夫（平成8年～10年度）

事務局（発掘調査・整理・報告） 埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立さきたま史跡の博物館

参事兼館長 横川 好富（平成9年度）

館長 小川 良祐（平成10年～12年度） 矢澤 孝（平成13～14年度）  
大友 努（平成15年～17年度） 山形 邦彦（平成18年度）

副館長 高橋 一夫（平成9～10年度） 小久保 徹（平成11～12年度）

今泉 泰之（平成13年～15年度） 駒宮 史朗（平成16年～18年度）

総務・管理担当担当部長 根本 勝（平成18年度）

庶務課長 増田 洋（平成9年度） 高野 寛（平成10年～13年度）

安藤 伊知郎（平成14～15年度） 依田 透（平成16年度）

浮ヶ谷 守央（平成17年度）

担当課長 須藤 好晴（平成18年度）

専門調査員兼学芸課長 斎藤 修平（平成9年度） 田中 英司（平成12年度）

大和 修（平成13～14年度）

主任学芸員兼学芸課長 柳 正博（平成10～11年度）

資料・展示、史跡整備担当学芸主幹 石岡 憲雄（平成18年度）

学芸主幹 杉崎 茂樹（平成15年～17年度） 井上 尚明（平成18年度）  
若松 良一（平成18年度）  
主任学芸員 西口 正純（平成11年度） 利根川 章彦（平成15～16年度）  
村田 章人（平成17年度） 若松 良一（平成17年度）  
石坂 俊郎（平成18年度）  
学芸員 宮 昌之（平成9年度） 西口 正純（平成10年度）  
中山 浩彦（平成11年～14年度）

#### 発掘・整理参加者

##### ○発掘調査

安生素明、池尻篤、市川康弘、飯塚光生、伊藤真美子、梅澤亜希子、大久保淳、大越 優、大澤洋子、岡野邦子、岡部一男、奥野朋美、加藤隆則、上村努、金子公久、川口貴明、川崎良一、菊池吉栄、木地谷了一、木村アサ、清岡淳一、鯨井とく、小林孝秀、釘宮佐江子、酒井菊枝、坂下貴則、坂本英治、坂本雄偉、佐藤大樹、篠原幸子、嶋崎光雄、清水専市、菅野修弘、鈴木育子、鈴木寿美江、須長ふさ、関口信行、関口陽子、高坂秋次郎、高坂ちよ子、高沢喜一、高沢ナオ、高島裕之、高橋宇多、田島俊夫、田島元治、多田増子、田中梅子、中川和昭、中村賢太郎、中村実男、西 秀子、南條徳男、橋本キクヨ、畑中美恵、服部よし子、初見富夫、平塚幸一、平野寛之、平山俊介、藤山恵水、星野好子、細村昭一、本間千絵、三浦武司、右田文代、三国敬介、武笠はつ、森 愛、森 昌寛、山本 茜、横須賀米蔵、吉田静子、吉田泰子、吉野トミ、渡邊麻美子、渡辺祐司

##### ○資料整理

越前谷理、大沢洋子、鈴木須美江、中村恵子、浜村紀子、星野好子

##### ○図面整理

飯塚光生、市川康弘

##### ○報告書作成

菅谷 操、原園さち子、木島芳江、天沼由起子、鈴木美幸、尾畑宜成、長谷尾 篤

## 第2節 発掘の経過－発掘調査日誌抄－

### 平成9年度

- 6月27日 調査開始。調査区を設定して重機による表土剥ぎを開始する。
- 7月25日 後円部東側D地区の外堀部に設けたトレンチの第1回遺物検出面の精査を行い遺物出土状況写真撮影を行う。
- 8月25日 後円部東側D地区の外堀部に設けたトレンチの掘り下げが進んだので、第2回遺物出土状況写真撮影を行う。堀底付近から円筒埴輪片が散漫な出土状況を示していた。中堤寄りに遺物が集中していた。
- 9月3日 後円部東側D地区の墳丘から内堀に向かって設けたトレンチの遺物出土状況写真撮影。墳丘裾付近には同一個体の大型破片が存在していた。また、内堀底部から少し浮いて転倒した円筒埴輪底部の出土あり。

- 10月1日 D地区内堀から墳丘までの遺物検出・清掃作業が終了したので写真撮影を行い、引き続きドット図作製と遺物取上げを開始した。埴輪片は内堀の中央部にはほとんどなく、墳丘寄りの中堤寄りに分かれていた。中堤斜面上にも小破片が張り付くように出土しているの、中堤上に立てた円筒埴輪列が内堀内に転落したことが明らかである。墳丘上ではH-12グリッドから三環鈴形土製品が10数cm浮いた状態で出土した。墳頂部から転落したものかもしれない。
- 10月20日 くびれ部東側の内堀から外堀に向かって設定したトレンチのプラン確認作業が終了したので写真撮影を行った。10cmほど下げただけで中堤と外堀の境界ライン及び外堀と外堤との境界ラインは明瞭となった。中堤の外側には平行して新しい小溝が掘り込まれていた。なお、各境界部にはサブトレンチを設けて立ち上がり部の検出を行った。
- 10月24日 西側くびれ部から造出しにかけて設けた調査区で第1回目の遺物出土状況写真撮影を行う。旧見学路の下なので堅くて掘削に苦勞した。遺物はまばらであった。
- 10月31日 西側造り出し付近のL-15グリッドで円筒埴輪が立った状態で出土した。しかし掘り据えたものでなく、転落したものようであった。
- 11月5日 西側くびれ部付近を掘り下げの過程で墳丘に接する内堀部分から埴輪片に混じって須恵器坏蓋と土師器坏が出土したので精査して写真撮影を行った。
- 11月12日 造出し西側のM-14グリッドでは造出し部から転落した供献土器などの出土が予想されるため、手掘りで慎重に掘り下げた。その結果、斜面部から埴輪片に混じって土器片が出土した。また、隣接するK-15グリッド（くびれ部）からは完形品の有蓋脚付短頸壺が出土した。
- 12月1日 第4区の外堀外堤側立ちあがり部の堀底から長さ1m余りの片岩大型石材が出土した。周辺には小型の薄片も多数散布している。第3の主体部に係る情報と考え、調査員一同が緊張する。実測、写真撮影の上、取り上げを行う。
- 12月17日 造出し西側M-14グリッドの掘りさげを進め、第2回目の遺物出土状況写真を撮影した。造出しから転落した状態で円筒埴輪の大型破片が検出された。
- 12月26日 後円部東側に設定した内堀コーナー部のE-8グリッドからは土師器坏と高坏がまとめて出土し、祭祀行為のあったことが推定された。写真撮影・実測・取り上げを行う。
- 1月8日 内堀コーナー部のE-8グリッド・造出し部完掘。写真撮影後、遺構実測開始。
- 2月1日 くびれ部K-15グリッド完掘。写真撮影後、遺構実測開始。なお、墳丘裾付近には鋤と推定される掘削具の痕跡が明瞭に残っていた。
- 2月27日～3月31日 調査を終了し、遺構を砂で保護してから埋め戻す。また、器材の撤去、清掃、収納を行った。引き続き出土品の洗浄と注記を行うと共に実績報告書を作成する。

#### 平成10年度

- 10月9日 調査初日。発掘器材の搬入、ポンプの準備、委託業者によるグリッド杭打ち完了。
- 10月12日 プレハブ搬入。前方部前端墳丘部の保存状態を確認するためにI・J-21グリッドの掘りさげを開始する。
- 10月26日 10月16日の大雨後、連日排水作業に追われていたが、ようやく水も引いたので、本日

- より調査を再開する。I・J-21グリッドの掘りさげ。21ラインから南に6.9mの位置に前方部先端部を検出した。復原した内堀境よりも2m内側に入り込んでいる。
- 10月28日 バックホーを使用して前方部のプラン確認を行った。復原ラインから1.5ないし2m内側で周堀の覆土が確認された。
- 10月30日 前方部前端ラインの掘り下げ作業を行う。西側隅角付近M-21グリッドで滑石製模造品（有孔円盤）を発見。写真撮影。またI・J21グリッドの内堀覆土から出土した遺物を平板で記録し、取り上げる。
- 11月2日 東側くびれ部G-15・H-16グリッド掘り下げ。大きな攪乱がありプラン確認できない部分がある。
- 11月6日 東側くびれ部墳丘断面を精査する。前方部東側墳裾と内堀の境界を確認するためにG-18・F-21グリッドを掘り下げる。担当者所見では周堀は荒掘りの後、ロームブロック混じりの土で補修している可能性がある。また、くびれ部はいったん掘削した後にロームブロックを含む土を張り足して緩やかなカーブとなるように整形しているようだ。
- 11月24日 東側くびれ部平面図作製・墳丘断面写真撮影。完掘状況写真撮影。
- 12月2日 前方部墳丘ライン各グリッド掘り下げ。土層断面図作製。本日は第2回保存整備協議会の開催日で委員に現場説明を行い、指導を受けた。
- 12月25日 現場事務所撤収。各トレンチの埋め戻しを開始する。
- 2月22日～3月31日 図面整理と遺物注記・接合を行い、図面台帳を作製した。

## 平成11年度

- 8月18日 プレハブ設置。発掘器材の搬入を行う。
- 8月19日～24日 バックホーによって発掘の障害となる樹木の移植を行う。また、4吋ポンプ3台を投入して内堀の水抜きを行う。
- 8月24日～26日 囲柵を設置し、その内側に調査区（前方部南側の墳丘主軸線上となる内堀から外堀範囲に設けた2区と前方部内堀西側隅角から外堀隅角に設けた3区）を設定して、バックホーによる表土除去を行う。
- 8月30日 2区のプラン確認で26列の南約2mに外堀の外縁プランを確認。3区掘り下げ開始。覆土に埴輪片を多く含む。中堤寄りに特に多い。
- 9月1日 2区内堀の南側に検出された溝は覆土の色調やビニールの出土から近代のものと思われる。
- 9月8日 2区外堀の掘り下げを行い、遺物出土状況図を作製。3区表土（厚さ約1m）除去終了。外堀の一部プランが確認できたが、コーナー部分は不明瞭。
- 9月10日 2区外堀遺物出土状況図作製。すべて円筒埴輪で形象埴輪は含んでいない。外堀の底面は遺構確認面からの深さ10～20cmである。
- 9月21日 2区写真撮影のため精査。
- 9月24日 3区表土中より形象埴輪片（人物腕部）出土。
- 9月30日 切り合い関係の有無を確認する目的で丸墓山古墳に向けて幅2mのトレンチを設定する。

- 10月4日 3区外堀の東寄りから人物埴輪頭部片が出土。
- 10月12日 3区外堀コーナー部の北側に地山の掘り残し（陸橋状遺構）を確認した。
- 10月15日 3区外堀の掘り下げ。外堀の内側コーナー部分から形象埴輪片が出土。なお、陸橋部は昭和48年のトレンチ調査によって大部分が破壊されていた。
- 10月19日 3区外堀外側コーナー部付近から餅形土製品がまとまって5点出土した。
- 10月22日 3区遺構の新旧関係は（新）SK-1→SD-5→外堀（古）と決定する。
- 10月25日 1区外堀外縁およびコーナープランは水田耕作面によって削られており、検出できない。
- 11月4日 3区外堀内に検出したSK-1は井戸跡であることが判明した。時期は不明である。
- 11月9日 明日の空撮にそなえて1～3区の精査を行う。なお、1区内堀の出土遺物はすべて円筒埴輪であった。
- 11月11日 1区掘り下げ。1区外堀の攪乱土中から丸玉状の埴輪が出土。馬形埴輪の馬鈴であろう。
- 11月15日 雨天。図面整理の結果、3区中堤外側コーナー部は昭和48年確認済みの場所でのよいらしい。断面図と距離や深さが一致するためである。
- 11月18日 1区外堀遺物取り上げ。D-24グリッドでは円筒以外に朝顔形円筒、須恵器片がわずかに出土している。
- 11月24日 4区造出し東側掘り下げ。円筒埴輪がまとまって出土する。
- 12月9日 1区外堀の掘り下げ。1区土層断面ではF. A. は明瞭に確認できない。
- 12月15日 前方部南側に2箇所（1T・2T）、西側に1箇所（3T）の補足調査用トレンチを設定する。
- 12月17日 4区くびれ部遺物出土状況図作製。円筒埴輪片のほかに須恵器甕破片2点が出土。
- 12月20日～1月11日 土工を投入して5区～8区を掘削、精査する。7区から形象埴輪片が出土。5区では内堀、6・7区では外堀のプランを検出した。既調査区のプランと合わせて復原すると直線的であり剣菱形とはならない。
- 12月24日 4区では造出しは保存状態が良好でないがブラックバンド以下では原形を保っている。
- 1月18日 造出しはくびれ部側ではプランが明瞭に確認できるが、先端から西側にかけてはかなり削り込まれている。
- 1月21日 4区掘り下げ、5・7区精査。8区墳裾部分の確認調査。4区くびれ部から朝顔形埴輪の頸部から胴部上半部が出土した。
- 1月25日 5区覆土中から黒曜石製の石鏃1点出土。
- 2月9日～2月26日 図化と写真撮影を完了したので調査区を砂で保護してから埋め戻す。また、囲柵を撤去し、園路や植栽の復旧を行う。
- 2月28日～3月31日 図面・写真整理と出土遺物の洗浄・注記を行う。また実績報告書を作成する。

### 第3節 稲荷山古墳の立地と環境

**地理的立地** 埼玉県の西半分は秩父山地とその東に広がる丘陵・台地地帯が占めている。丘陵と台地は北から松久丘陵・神流川扇状地の本庄台地、荒川が平地部に達して形成した櫛引台地と荒川扇状地、その南には江南台地、比企丘陵と松山・坂戸台地、さらに南には入間丘陵が連なる。東半分は、いわゆる関東平野で北から東に利根川系河川の形成する妻沼・加須・中川の各低地が形成され、荒川の南流により荒川低地とさらに下流に川口低地が形成されている。そして、これらの低地に囲まれるように大宮台地が所在している。大宮台地はもともとは群馬県館林付近の台地地形と連続していたとされているが、妻沼・加須低地付近を中心に地盤が沈降する「関東造盆地運動」や利根川・荒川の浸食と河川土砂の堆積作用で、その北部では低地面との比高差がほとんどなくなり、行田市付近では低地の水田下に埋没している部分が多く、高い部分は低地の上に低い島状に浮かんでいるような状況となっている。

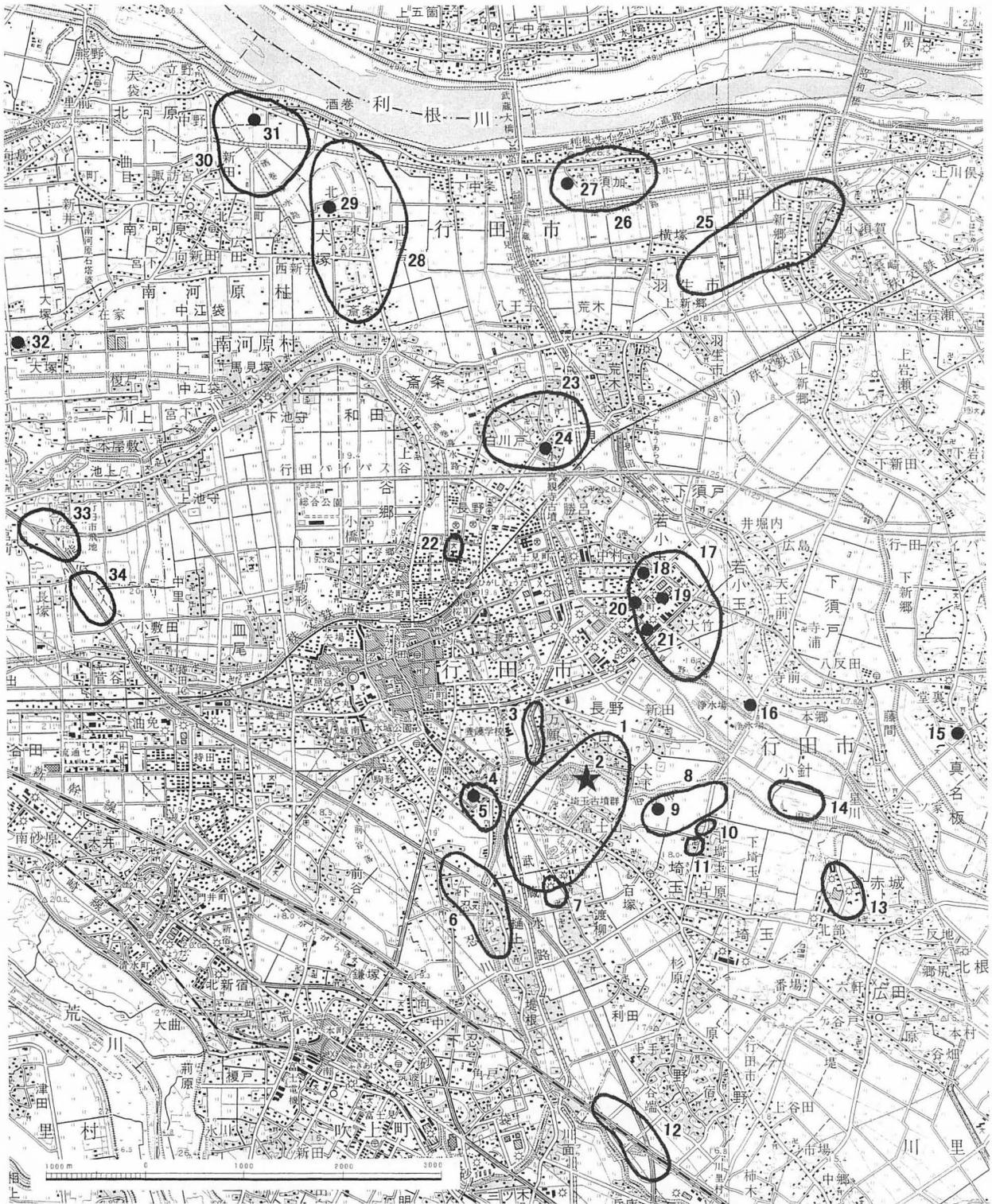
この台地の上面は関東ローム層が覆っていて、行田市埼玉に所在する埼玉古墳群はその上に構築されている。現在では周囲の低地との比高差は1メートル前後だが、関東造盆地運動による年毎の沈降速度は1～2mm程度とされており、埼玉古墳群の築造された1500年前は単純計算で、現在より1.5～3m程度高い、はっきりした台地だった可能性がある。

**旧石器～弥生時代の遺跡** 旧石器の出土は行田市内・長野中学校校庭遺跡で知られ、続く縄文時代では古墳群内の渡柳陣場遺跡で早期・押型土器が出土している。前述の長野中学校校庭遺跡からは前期・関山式土器が出土しており、中期では古墳群内の瓦塚古墳周辺で加曾利E式の埋甕が出土し、下埼玉通遺跡で同じく加曾利E式期の住居跡が発見されていて、埼玉古墳群の所在する低台地上に中期頃の集落の存在が予想される。後・晩期では古墳群東約3kmのところには鴻巣市赤城遺跡が所在している。

弥生時代では古墳群北西6kmに中期・須和田式期の環濠集落・池上遺跡、その南に池上遺跡の墓域とされる小敷田遺跡で方形周溝墓が発見されている。また、近年、池上遺跡北西約2kmの北島遺跡で中期の集落跡が水路や水田跡とともに発見されている。

**古墳時代の遺跡・古墳群出現まで** 埼玉古墳群内・近接地域の古墳時代中期までの遺構は古墳群南に隣接する渡柳陣場遺跡で前期の方形周溝墓と6世紀代の住居跡が、古墳群北西500m付近に所在する長野神明遺跡では5世紀代の住居跡が発見されている。古墳群東約2kmの小針遺跡遺跡では前期の住居と方形周溝墓、それに6世紀代の住居跡が多数発見されているほか、近年発見された古墳群南東約3.5kmに所在する築道下遺跡では6世紀初頭以降の住居跡が多数調査されており、埼玉古墳群の築造に関与した集落の可能性が高い。南西約1kmの鴻池・武良内・高畑遺跡は4世紀代の方形周溝墓とされていた遺構が住居または住居に関連する遺構である可能性が高まり、後続する5～6世紀代の住居跡も所在していることから、埼玉古墳群の首長たちの居住候補地となっはいるが、大規模な居館跡は未発見である。古墳群の域内では古墳時代前・中期を通じ住居の発見が無いので、非居住域を墓域として確保して1世紀以上にわたり、古墳群を築造していったことになる。

**埼玉古墳群と周辺の古墳の築造状況** 埼玉古墳群の範囲は稲荷山古墳や二子山古墳、鉄砲山古墳などが所在する旧埼玉村大字埼玉地区西部と、中の山古墳や奥の山古墳など大字渡柳地区西部の古墳、



- 1 埼玉古墳群 2 稲荷山古墳 3 長野神明遺跡 4 佐間古墳群 5 大日塚古墳 6 鴻池・武良内・高畑遺跡
- 7 渡柳陣場遺跡 8 若王子古墳群 9 若王子古墳 10 下埼玉通遺跡 11 旧盛徳寺跡 12 築道下遺跡
- 13 赤城遺跡 14 小針遺跡 15 真名板高山古墳 16 小針鎧塚古墳 17 若小玉古墳群 18 地藏塚古墳
- 19 三方塚古墳 20 愛宕山古墳 21 八幡山古墳 22 長野中学校校庭遺跡 23 小見古墳群
- 24 小見真観寺古墳 25 新郷古墳群 26 大稲荷古墳群 27 大稲荷1号墳 28 斎条古墳群
- 29 とやま古墳 30 酒巻古墳群 31 酒巻14号墳 32 大塚古墳 33 池上遺跡 34 小敷田遺跡

第1図 稲荷山古墳と周辺の遺跡分布図

それに稲荷山古墳北側を流れる旧忍川対岸に所在する数基の古墳もその距離的近接性から、古墳群に含めて扱われている。古墳群に属する前方後円墳は主軸長の順に、二子山（138m・6世紀前半）、稲荷山（120m・5世紀末）、鉄砲山（109m・6世紀後半）、將軍山（90m・6世紀後半）、中の山（79m・6世紀末）、瓦塚（73m・6世紀前半）、奥の山（70m・6世紀後半）、最小が愛宕山（53m・6世紀前半）で、湮滅した<sup>うし</sup>大人塚（約50m・6世紀後半）を含めて総数は9基である。円墳では丸墓山古墳（径105m・6世紀前半）、白山（径50m・7世紀前半）、浅間塚（50m）のほか、航空写真や地籍図から約35基が推定されている。また、戸場口山古墳は近年の調査で方墳（一辺約40m）と判明している。以上約45基と復原できる埼玉古墳群だが、最古の古墳は現在のところ金錯名鉄剣を出土した稲荷山古墳で5世紀末、最後の古墳は戸場口山古墳や白山古墳で7世紀の前半ころと推定される。また、埋葬施設が判明しているのは稲荷山古墳以外では横穴式石室の將軍山古墳のみである。上記の推定年代の根拠の多くは周堀出土の須恵器や埴輪片によっている。

周辺古墳群としては、5世紀後半の、箱式石棺と粘土槨を主体部に持つ大日塚古墳（円墳・径22m）を含む佐間古墳群が西方に隣接して所在し、巨大な横穴式石室を持ち、出土須恵器より6世紀後半と推定される若王子古墳（前方後円墳・主軸長約100m）を盟主墳とする若王子古墳群が東方に隣接しており、これらは同じ台地上の古墳群である。

次に少し距離をおく古墳では、北に約1.5km付近の若小玉古墳群には6世紀代の前方後円墳・三方塚古墳（主軸長約60m）が近年の発掘調査で発見され、愛宕山古墳（同約70m）がかつて所在していたとされる。7世紀代になると埼玉古墳群の首長間で継承された武蔵域の最高首長権がこちらの首長たちに移動したことが推定されるような、巨石横穴式石室の八幡山古墳（円墳・径約70m）や線刻壁画のある横穴式石室の地蔵塚古墳（方墳・28m）が築かれている。さらに若小玉古墳群北1kmにも6世紀末の築造が推定される、緑泥片岩の横穴式石室と石槨を持ち、頭椎大刀や銅鏡を出土した小見真観寺古墳（前方後円墳・102m）を盟主墳とする小見古墳群が所在している。古墳群東方約1.5km、埼玉沼のあった低湿地を挟んだ対岸には6世紀後半の石棺を持つ横穴式石室の小針鎧塚古墳、そしてさらに1.5km東方には全長104mの前方後円墳、真名板高山古墳が位置している。行田市街地の北に広がる水田地帯は埋没台地が散在しており、5世紀末～6世紀初頭段階で、箱式石棺を主体部とする可能性のある大稲荷1号墳（円墳・径26m）や礫槨の可能性のある同2号墳（円墳）、とやま古墳（前方後円墳・全長69m）などが築造されているが、6世紀後半の酒巻14号墳（円墳・42m）からは韓風衣装の人物埴輪や力士埴輪、旗差金物（蛇行状鉄器）を着装した馬形埴輪が出土して注目されている。

以上、埼玉古墳群周辺では6世紀後半以降は造墓活動の活発化が見て取れるが、埼玉古墳群を出現させた首長層の権勢の低下を指摘してよいのかも知れない。

**歴史時代** 埼玉古墳群は7世紀後半には古墳が造られなくなったものと考えられる。それ以降は周辺地域で住居跡の発見例が増加するとともに、古墳群の縁辺でも住居跡の発見があり、徐々に居住域として利用が進められていったものと思われる。古墳群東に9世紀初頭の大同年間の創建といわれる盛徳寺があるが、律令制下に国府は別の場所におかれていて、政治中枢は北武蔵には所在せず、埼玉古墳群の隆盛を引き継いで出現した可能性は低い。

（紙面の関係で参考文献は省略させていただきました。）

## 第4節 過去に行われた発掘調査の概要

### 1 昭和43年度の調査概要

#### (1) 二子山古墳の調査

埼玉古墳群の整備は文化庁の史跡等環境整備の新規事業「風土記の丘建設」として昭和42年度、43年度の2か年継続で実施された。さきたま風土記の丘建設事業は国庫補助事業でその内容は、環境整備・復原整備・遠路造成・園地工事・資料館建設・展示資料・用地の買収などを含む大がかりな事業であった。

昭和42年度の事業は、昭和43年2月に二子山古墳の周堀確認調査が行われた。当時の二子山古墳は後円部の主体部付近に盗掘坑の跡が見られるものの、墳丘自体は比較的良好な形状を留めていたが、周堀の痕跡や範囲を明瞭に遺構として視認できる状況にはなかった。こうした状況は二子山古墳のみならず、埼玉古墳群全体のそれぞれの古墳にも共通する状況であり、文化3年（1806）の埼玉古墳群が描かれている『五街道分間延絵図』や、文政12年（1810）に編纂された『新編武蔵風土記稿』、また明治10年代に陸軍参謀本部により制作された迅速図においても、周堀とおぼしき表現は見あたらない。

このような状況から周堀は早くから埋没が始まったと思われ、利根川の氾濫によって行田市酒巻古墳群や、羽生市小松神社古墳等多くの埋没古墳の例が存在する当地域では、埼玉古墳群も氾濫の影響を受けていることも大きな原因と考えられる。そのため二子山古墳の調査では、墳丘から放射状にトレンチを設定し、内堀、外堀の二重の周堀と中堤の位置を正確に確認した。

二子山古墳の内堀については深く掘削し、用水の水を引き込んで水堀に復原し、外堀については菖蒲田として整備した。また、中堤帯に園路を設け、水堀との境界に生け垣を植栽した。

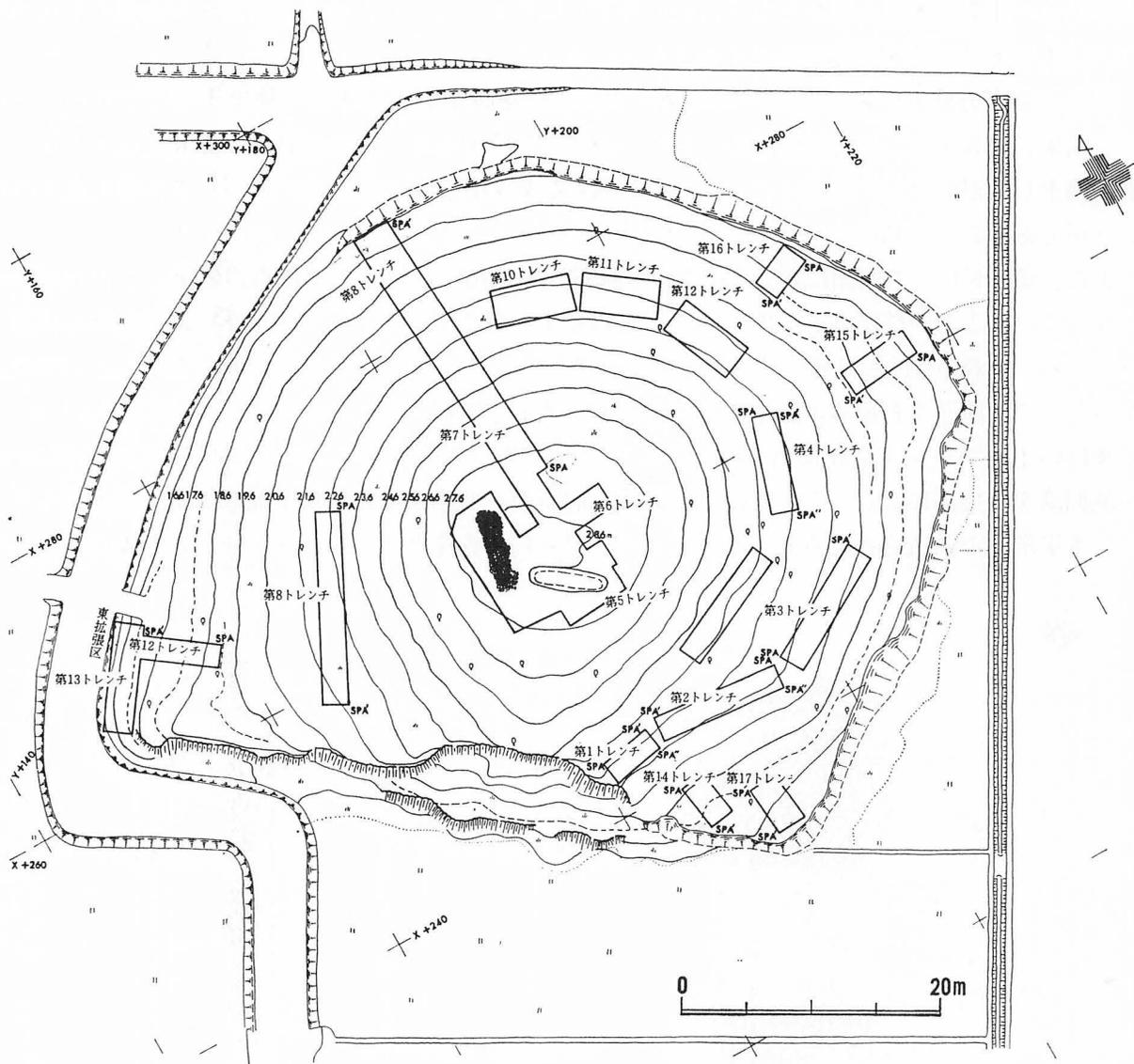
#### (2) 稲荷山古墳墳丘の整備

昭和43年度の整備計画では手頃な石室を発掘調査し、その内部を見学出来るようにする。また、出土遺物は資料館で展示公開するという計画であった。当初、調査対象古墳として予定されていたのは資料館に近く、古墳群の中で最も規模の小さい全長53mの愛宕山古墳であった。ところが調査計画を策定する段階で慎重な再検討が行われ、調査古墳の第1候補として稲荷山古墳が選定されたのである。

その理由として、①調査によって敢えて完全な古墳の原型を損なうことはない。②稲荷山古墳は前方部が削平されているが、後円部が残存しているので主体部は残存していると思われる。③稲荷山古墳は大型古墳であるため主体部（横穴式石室を想定していた）も当然大型であり、見学に供するには好都合である。等の事由からであった。

昭和43年7月18日で文化庁長官あて「さきたま風土記の丘古墳発掘、石室整備事業」として稲荷山古墳発掘計画書を提出した。調査は埼玉県教育委員会が主体となり埼玉県遺跡調査会に委託して行われた。調査指導者として斉藤忠東京大学教授、三友国五郎埼玉大学教授、小沢国平県文化財保護審議委員を顧問に迎え、調査全般を柳田敏司、現場の指揮を栗原文藏が執り、遺跡調査会からは増田逸朗が調査員としてこれに当たった。また國學院大學、埼玉大学等の学生と、埼玉考古学会会員諸氏多数の参加協力を得た。

かくして式内前玉神社宮司が祭主となり、厳粛なうちに地鎮祭を行い炎天下の8月1日から稲荷山古墳の調査を開始し、8月24日に無事終了した。なお発掘調査経費は150万円であった。



第2図 昭和43年度後円部調査区配置図

調査前における埼玉古墳群の情報は極めて少なかった。古墳の年代を推定する資料は、明治27年（1894）に発掘された將軍山古墳の横穴式石室からの出土品、昭和12年に稲荷山古墳の前方部削平時に発見された須恵器などが、数少ない手掛かりであった。

特にその中の銅鏡や須恵器の存在から、埼玉古墳群の築造年代は全体的に新しく、埋葬施設は横穴式石室であろうという想定のもとで調査を開始したのである。風土記の丘構想における史跡保存整備では、石室の公開が第一義にあり、まずは横穴式石室の探索に調査の主力を傾注した。

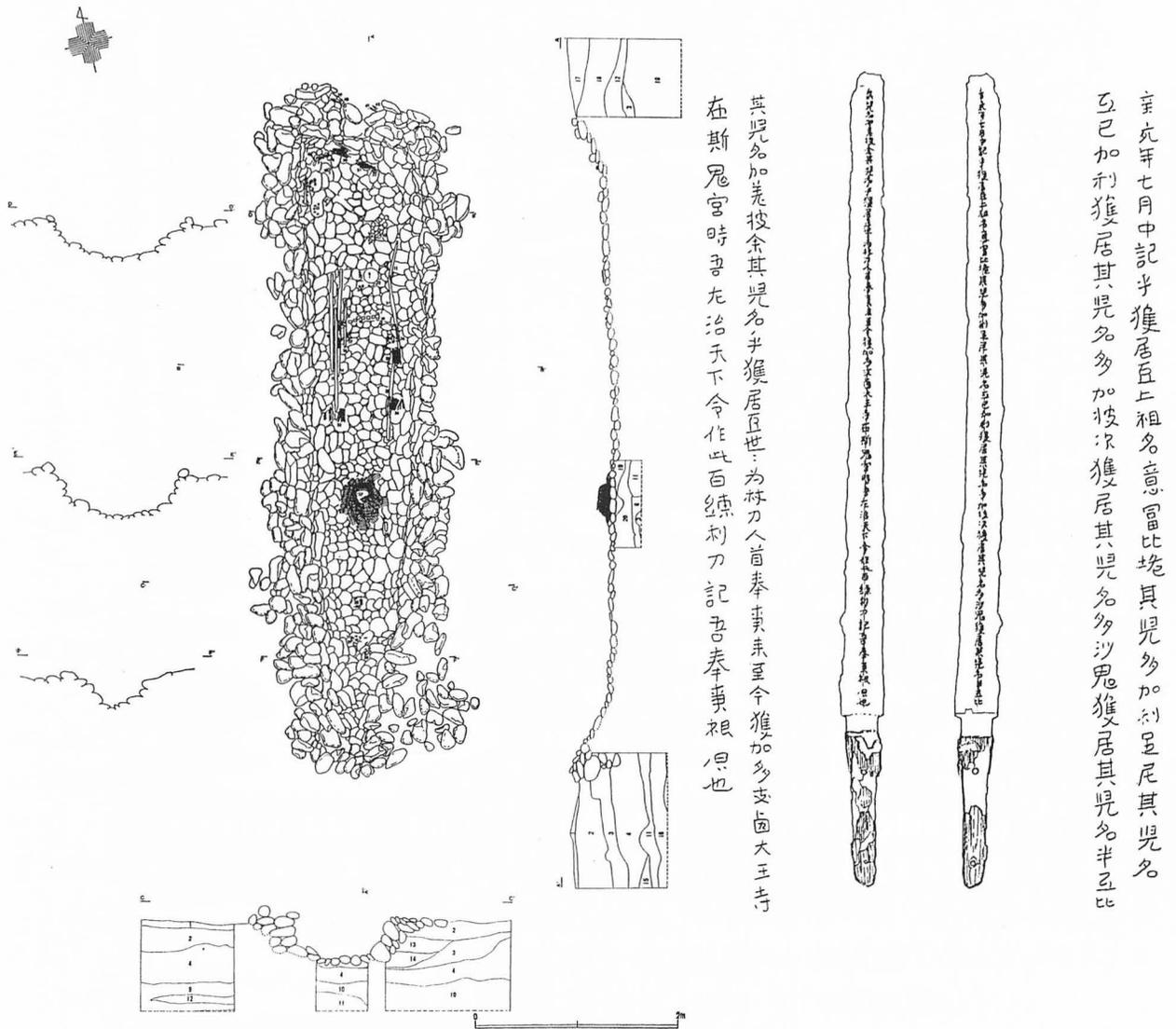
石室の開口部が予想される南側のくびれ部を中心とした範囲に、第1～4トレンチを集中的に設定し深く掘り下げた。しかし石室らしき遺構は検出されず、さらにトレンチの範囲を墳丘東側まで拡大設定した。最も可能性のある第2トレンチは4m以上も掘り下げたが石室の発見には至らず、他のトレンチでも同様の結果であった。各トレンチ内からは円筒、家形、人物埴輪等の破片が出土したが、原位置を保つものはなかった。それらの埴輪について特徴を仔細に検討すると、これまでに確認されている二子山古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳の埴輪に比べて、凸帯が高く中央が窪み、器

径が大きく寸胴な器形を呈するなど古式の様相が伺えた。こうした埴輪の特徴から古墳の年代は遡り、主体部も竖穴系の埋葬施設が予測されるに至った。

早速、調査方法の転換を図り、墳頂部にトレンチを設定し、主体部の検出作業にとりかかった。その結果、第5トレンチを40cm掘り下げた地点で、挂甲小札、柳葉形鉄鏃、第6トレンチから刀子が出土したが、著しい攪乱を受けていた。後に、この位置は盗掘を受けた第2主体部の直上の攪乱土層であることが判明した。

また、第6トレンチ西側において4個の河原石列を検出。ボーリング探査の結果、この石はさらに続いていることが確認され、明らかな土層の変化も視認できた。トレンチを拡げて石列を追求したところ、約6mの長さで続いていることが判明し、この石組は竖穴系の石室であることが確実となった。この段階で石組みの礫層を第1主体部、攪乱されている粘土層を第2主体部と命名した。

礫層の上面プランを全面検出したところで、齊藤忠先生の指揮により、主軸に直交する幅50cmの試掘溝を中央部に設定した。この試掘溝の土層断面を観察すると礫層上面には木炭が堆積しており、木炭層的な構造も考えらるることとなった。さらに調査を進め、礫層を覆っていた土を徐々に取



第3図 礫層と金錯銘鉄剣

り除くと、次々と副葬品が露出した。北側から鏡、その上に翡翠製の勾玉、銀環、金銅装帯金具、直刀、剣、刀子、鈴杏葉、轡、壺鐙、鞍、三環鈴、雲珠、辻金具、鉾、挂甲等棺内から多彩な副葬品が姿を現した。我々の予想を遙かに上回る豊富な出土遺物に、その取上げにも慎重を期し細心の注意が払われた。このほか、礫塚北側隅から棺外埋葬品として鉄斧、鉄鉗、鉄鑊子が出土した。

完掘の結果、礫塚は舟形となり、全長5.7m、最大幅1.6m、深さ40cmで断面は緩いU字形を呈し、南に舳先を向けていた。

一方の粘土塚は攪乱を受けており、遺存状態は良好ではなかった。全体的に粘土の使用量は少なく、ブロック状の塊が所々にまとまって検出されたほかは、覆土中に霜降り状に混入した粒子が見られるだけであった。粘土塚と言うよりも土壌を掘り下げて、少量の粘土を用いて、棺を固定する程度のものであった可能性も否定できない。盗掘を受けながらも副葬品としては、直刀、鉄鏃、浮いた状態で挂甲小札、鎌、辻金具、轡、鉸具などが破片となって出土した。

粘土塚の規模は全長6.5m前後、最大幅1.9m、深さ50cmであった。調査後に、この粘土塚は埋め戻したが、保存状態の良い礫塚には覆屋を設けて、いつでも見学が出来るように、園路、階段、説明板などの設置工事を直ちに実施した。

なお調査から10年が経過した昭和53年に出土鉄製品の保存修理を実施したところ、礫塚副葬品の鉄剣から115文字の金象嵌銘文が発見された。銘文は日本古代国家成立の解明に貴重な手掛かりとなる第1級資料であり、昭和58年に「武蔵稻荷山古墳出土品」として一括国宝に指定された。

## 2 昭和48年度の調査概要

さきたま資料館が開館して5年を経過した。「さきたま風土記の丘」の名も徐々に定着し来館者も増加してきた。この頃、国内では高松塚古墳の発掘や、また中国長沙の馬王堆墓の発掘などのニュースもあり、県民の古墳文化に対する関心が高まりつつあった。こうした中で失われた稻荷山古墳前方部の範囲を明確にし、見学者に対し古墳の規模を視覚的に理解出来るようにするため、前方部と周堀の確認を主眼に調査を実施した。さらに、丸墓山古墳との位置関係、周堀の切り合い関係を検証するため、両古墳間にトレンチを設定した。

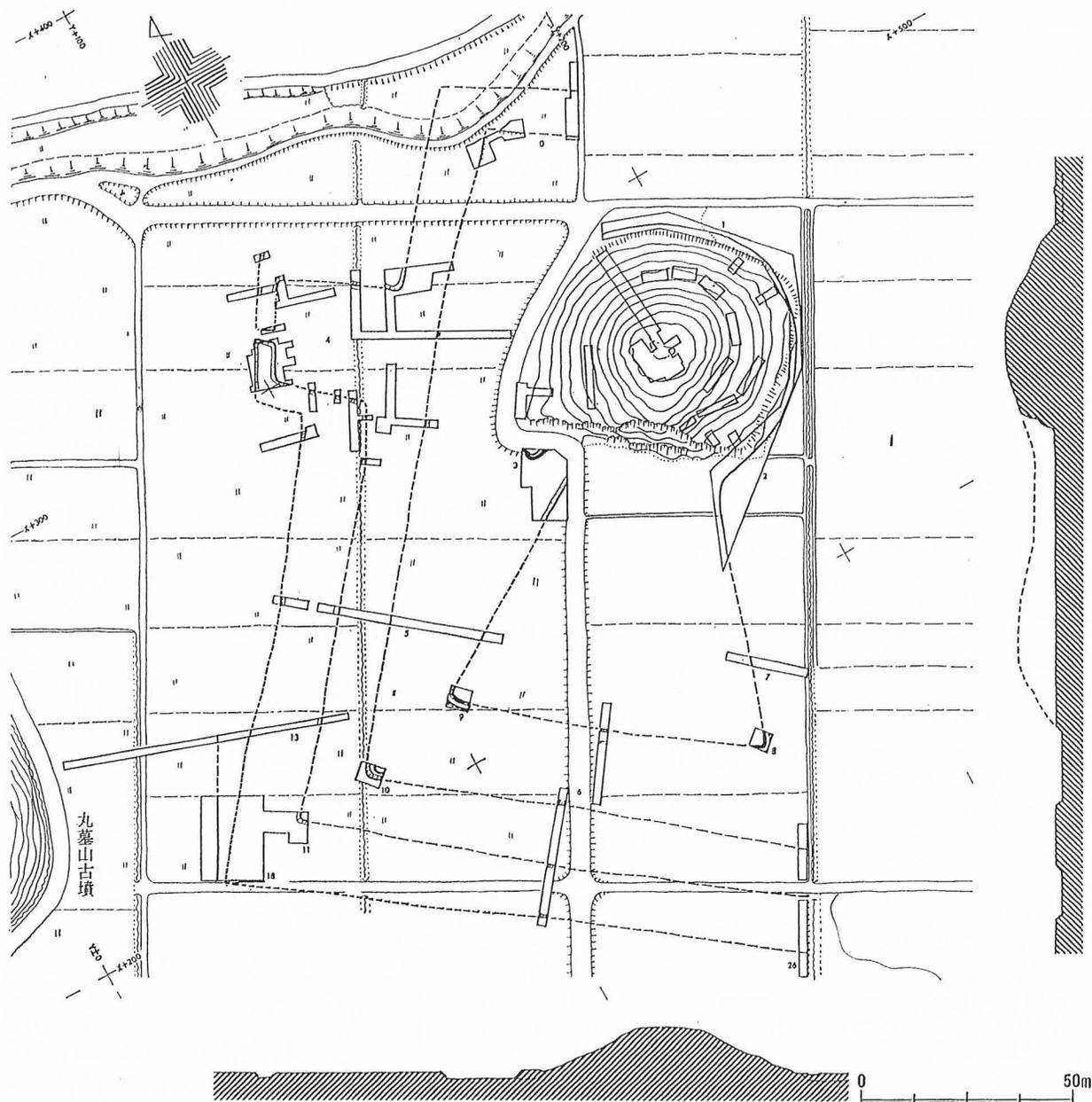
稻荷山古墳は昭和10年に後藤守一・三木文雄両氏が作成した実測図によると、前方後方墳ではないかと推定されていたが、今回は航空写真のデータなども参考とした。

周堀の調査は古墳群周辺の稲刈りが終了し、水田から完全に水が引く時期を待ち、昭和48年11月から翌年の昭和49年2月24日の間に行なった。調査の主眼は失われた前方部を中心とする墳丘と周堀の形状確認であった。古墳の東側は未買収地であるため調査範囲は限定されたが、トレンチは前方部周辺から西側くびれ部にかけて集中的に設定した。また、航空写真に映し出されたソイルマークを参考に古墳の重要なポイントとなる前方部コーナー、くびれ部、周堀帯付設の造出し等の効果的な位置にトレンチを設定した。墳形確認のトレンチは第1～3、8・9トレンチで、第1・第2トレンチは後円部墳丘立ち上がりの確認のため、北側から東側くびれ部にかけて半周する形で設定された。トレンチ内は湧水のため堀底面まで掘り下げることには困難を極めたが、ようやく第2トレンチの一部で堀底まで掘り下げることが出来た。基盤のローム層から底面までの深さは1.4mであった。後円部墳丘の立ち上がりは東側で現状の墳丘から約2.1m内側にあり、土層内に天明期の火山灰が厚さ4cmで層状に堆積している事が確認され、北東部の墳丘裾の広がりには天明期以前の攪乱であることが判明した。

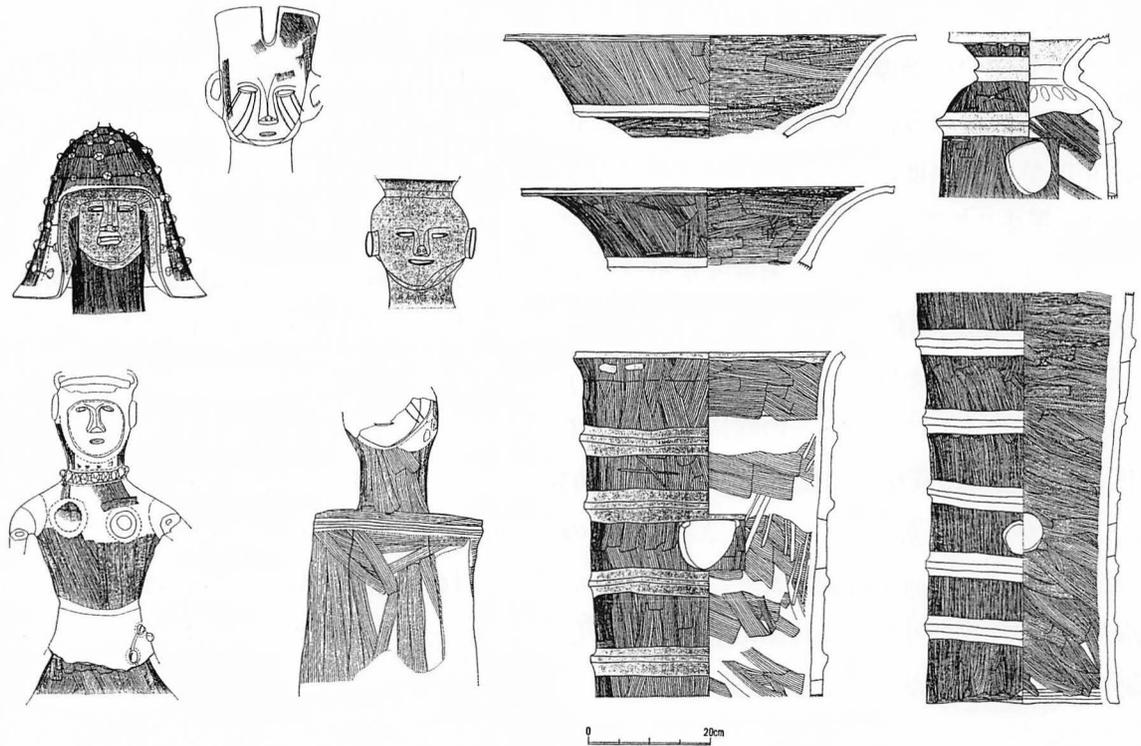
くびれ部は表土を剥がすと直ぐに基盤のローム層が現れ、墳丘の立ち上がりが確認された。また墳丘の西側くびれ部に設けた第3トレンチ内では、後円部に造出しの一部が検出されたが、残念ながら造出しの大部分は道路下に延びて既に削平されているため、盛り土の有無は不明であった。造出しから堀底へは幅1m、深さ40cmの段を形成して移行し、約1.4mで堀底に達する。

前方部コーナー東の第8トレンチ、西の第9トレンチでは基盤ローム面を幅1m、深さ20～30cm程削り出して墳丘が形成されていることが確認された。

内堀の調査は湧水が激しく土層の把握及び堀底の検出に困難を極めた。そのためボーリング探査によって深さを測定したが、堀底まではローム面から約1.4mを測り、各トレンチにおいても同様な数値が得られるので、堀の深さはほぼ一定していると見られる。



第4図 稻荷山古墳第2次調査発掘調査区位置図



第5図 稲荷山古墳第2次調査主要遺物図

中堤帯は二子山古墳の例から盛り土されていたと考えられるが、その痕跡は土層断面では確認できなかった。中堤帯は内堀に沿って方形に巡り、航空写真に現れた通り平面プランは長方形となる。中堤帯の幅は第6トレンチで14m、第5トレンチで12.5m、第0トレンチで11mを測り、前方部が最も幅を増していた。中堤帯の外側には、ちょうど後円部の西に位置する場所に造出しが付設されていた。造出しは方形を呈し、外堀を渡る幅2.7mの陸橋で外部と繋がっている。大きさは長さ27m、幅26.5mであった。

造出し部の基盤はローム層で、造り出し周囲の外堀に堆積する黒色土層中から大量の埴輪が出土した。その種類は円筒・人物（巫女・眉庇付冑をつけた武人・盾を持つ武人）・家・盾などであった。これらの埴輪群は造出し部に樹立されたものが、外堀中に倒れ込んだものである。この付近の堀底までの深さは1m前後であった。

外堀の調査範囲は西側と南側に限定して行った。その形状は中堤帯に沿って一周するもので、造出し部分が突出する形状は二子山古墳と共通していた。外堀の堀底の深さは部分的に異なりばらつきが認められ、中堤造出し部で85～95cm、西側コーナー付近で60cm、南側で66～86cmと一様ではなかった。

稲荷山古墳の周囲は土取りや耕地整理によって地表がすべて掘り下げられており、墳丘内と外周部では外周部が0.2～0.5mほど低くなっている事が確認された。この結果から古墳平面形は築造当時のプランと同一視することは出来ない。調査の所見を総合すると稲荷山古墳の規模は全長120m、後円部経62m、前方部幅74mとなる。

なお、周堀の復原工事を直ちに実施し、水路の水を引き込んで水堀とし、堀の外周に柳の植栽を行った。

## 第5節 平成9・10・11年度発掘調査の概要

保存整備協議会の指導と文化庁との協議によって、稲荷山古墳の前方部の盛土復原と内堀の立体表示整備の前提となる古墳の形状把握のために必要最小限でかつ有効な調査を実施することになり、平成9年度から11年度の継続する3年次の調査を行った。以下にその概要を記す。

### 1 平成9年度

平成9年度は1区から5区の5調査区を設けて調査を行った。調査面積は合計1,850m<sup>2</sup>である。

1区は中堤の右奥隅角部と外堀の隅角部そして内堀の隅角部を含む広い調査区である。外堀はプランの確認を行っただけで、覆土の掘り下げは行っていないが、内堀は調査範囲が狭いので覆土の掘り下げを行うことにした。その際に土師器高坏と土師器坏がまとまって出土した。

2区は墳丘主軸に直交して後円部右側（以下方位ではなく主軸を基準に述べる）にトレンチを設定し、墳丘から中堤立ち上がり部までと外堀部の2箇所掘り下げを行った。墳丘では中段のテラスと推定される平坦面が確認された。墳丘覆土からは少量の形象埴輪片が出土した。また、内堀と外堀の中堤より及び外堀の外縁部に埴輪が集中していたことから、中堤上の両側と外堀外側に円筒埴輪列が存在していたことが推測された。

3区はくびれ部右側の墳丘から離れた位置にトレンチを設定して内堀の中堤より部分から中堤を経て外堀部に至る範囲をプラン確認調査した。それぞれ2区の延長線上にプランが確認された。

4区は墳丘主軸上の後円部墳丘から外堀に至る範囲にトレンチを設定して掘り下げ調査を行った。後円部墳丘では中段に幅約2mの平坦面を持つことが確認された。墳丘覆土からは甲冑形埴輪片・人物埴輪片・家形埴輪片・三環鈴形土製品の破片が、内堀と外堀からは円筒埴輪片が出土した。

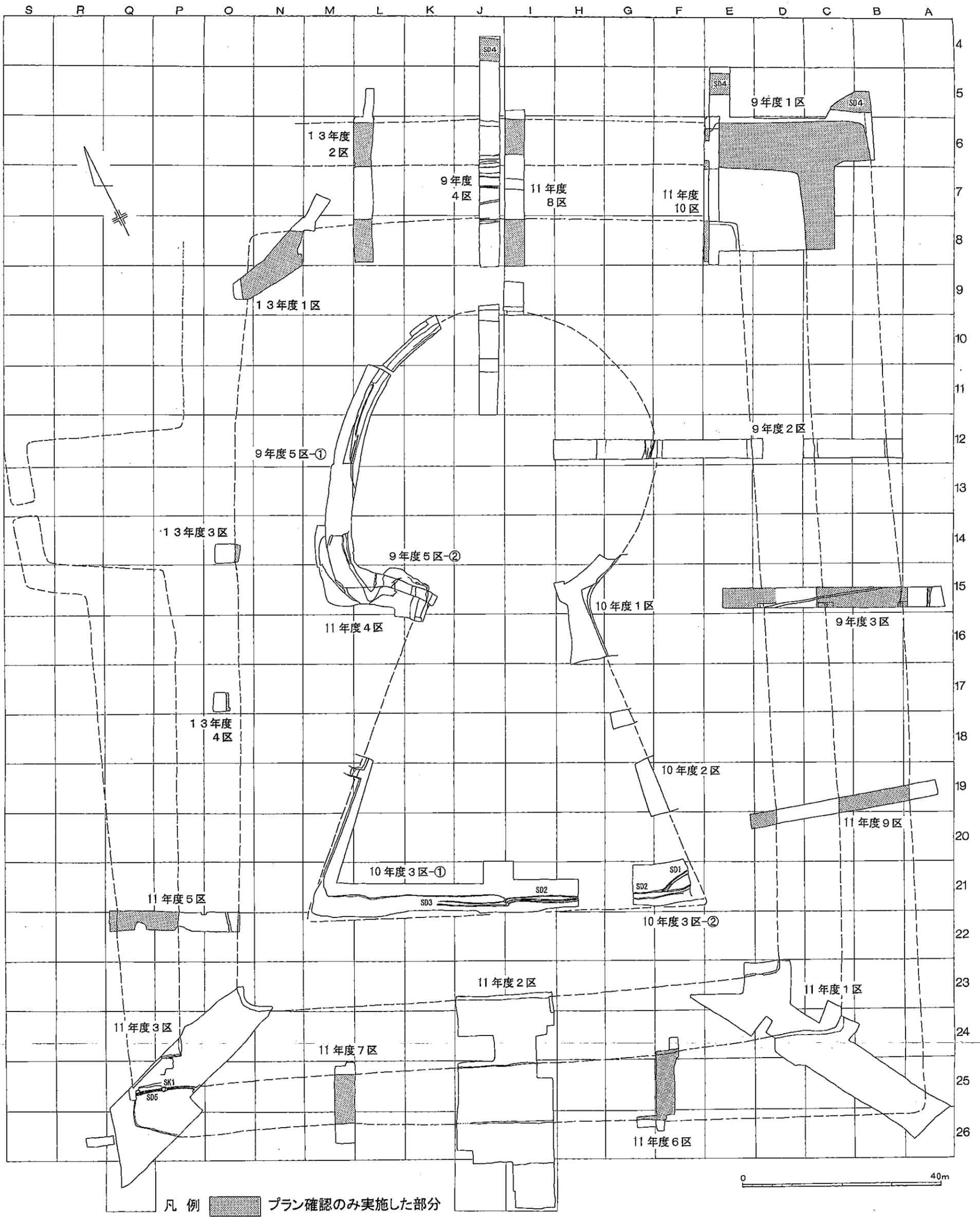
5区は後円部の西側墳裾から造出しを経て、くびれ部に至る調査区で、造出しとくびれ部に挟まれる地点を②地点、それ以外を①地点と呼ぶことにした。この部分には稲荷山古墳の見学路が設けられていたが、今回、堅く締まった道路敷きを重機で剥いでから、人力による掘り下げを行った結果、後円部の墳裾を検出することができた。出土遺物として円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪の破片がある。

造出し部は北側の側辺と上面を調査した。くびれ部では立ち上がり面に掘削時に付いたと推定される工具痕が残っていた。ほとんど時間を置かずにこの面に盛り土を行ってくびれ部の曲線部を造成したために保存されたのであろう。造出し部とくびれ部の間（②地点）からは円筒埴輪片・土師器坏・土師器高坏・須恵器有蓋脚付短頸壺が出土した。土器類は造出し上に据えてあったものが転落した可能性がある。

### 2 平成10年度

平成10年度は右側くびれ部から前方部の墳裾ラインを確認することを主目的として1区から3区の3つの調査区を設けて調査を行った。調査面積は合計850m<sup>2</sup>である。

1区は右側くびれ部に設けた調査区で、昭和48年度にも調査が行われているため出土遺物はごく僅かであった。しかし、緩やかにカーブを描くくびれ部プランの内側に前方部から直線的に後円部に取り付く掘り方が存在することが確認できた。また、後円部墳丘の断ち割りによって地山のローム層・旧表土・盛土版築層が確認されたが、肉眼観察の範囲では榛名山二ッ岳噴出火山灰（F. A.）



第6図 稻荷山古墳調査区全体測量図

は確認されなかった。

2区は前方部右側面に設定した2箇所の調査区から成る。墳裾はくびれ部の延長線上に直線的に検出された。

3区は前方部前端から左側側面にかけての墳裾推定部に設けた調査区で、右側隅角部の調査区を②地点、それ以外を①地点と区別する。②地点では隅角部が昭和48年度の調査でいったん確認されていたが、今回の調査では確認できなかった。昭和51年度の内堀復原工事の際に失われたものであろう。遺構を切り込む状態で2条の溝状遺構が検出された。①地点では昭和51年度に復原した内堀の立ち上がり部より2mほど内側に前方部前端のプランがかろうじて確認できた。それは直線的でなく、波を打っており、水田耕作によって削り込まれた結果であることが判明した。また、②地点から伸びる2号溝と別の3号溝とが検出された。左側隅角部から前方部左側面部でも耕作による墳裾部分の開墾が進んでいて、内堀の覆土は残存していなかった。調査区北端では墳裾付近に地山が掘り残された部分があった。古墳築造時の作業用スロープであった可能性がある。

### 3 平成11年度

3年次計画の最終年度に当たるため、2年間で調査が及ばなかった部分を中心に、補足調査として実施した。具体的には前方部前方の中堤と外堀・造出し先端部・後円部奥の内堀から外堀に及ぶ部分、それにトレンチ間隔の広い部分への追加調査を行った。調査区は1区から9区までで、調査面積は合計2,280m<sup>2</sup>である。

1区は前方部右隅角に対応する中堤と外堀の隅角部の検出を目的として設定した。掘り下げ調査の結果、内堀外側隅角部、中堤外側隅角部と外堀が検出された。外堀外側の隅角部は攪乱によって破壊されていた。

2区は前方部前面の主軸線上に当たる中堤と外堀の検出を目的として設定した。掘り下げ調査の結果、これらは予想通り直線的に遺存していることが確認された。

3区は前方部左隅角に対応する中堤と外堀の隅角部の検出を目的として設定した。掘り下げ調査の結果、内堀外側隅角部、外堀隅角部とが検出された。外堀には幅3.0mの土橋状の掘り残しがあり、中堤と繋がっていた。土橋の外側は丸墓山古墳の周堀と最も接近しているため、その周堀外側立ち上がり部の位置を確認する調査を行ったところ、両者に重複のないことが確認された。稲荷山古墳の調査区からは円筒埴輪のほかに人物埴輪の頭頂部が出土した。また、外堀隅角付近からは餅形土製品がまとまって出土した。

4区は造出し先端部とくびれ部付近の追加調査を行った。造出し先端部は溝などの後世の遺構によって破壊されていて形状が不明瞭であった。いっぽう、くびれ部では右側くびれ部同様に掘方に付加して盛土整形が行われていることが確認できた。くびれ部付近の内堀からは円筒埴輪のほかに須恵器坏・甕の破片が出土した。

5区から9区はおもに調査区間の間隔が広い部分に追加して設けた補足調査のトレンチで、プラン確認調査のみを行った。その結果、それぞれのトレンチではほぼ予想通り遺構プランが確認できた。

## 第2章 墳丘・周堀・中堤の発掘調査

### 第1節 平成9年度の調査

#### 1 第1区 (第7・8・10図)

1区は中堤の東側隅角部と外堀の隅角部そして内堀の隅角部を含む広い調査区である。外堀はプランの確認を行っただけで、覆土の掘り下げは行っていないが、内堀は調査範囲が狭いので覆土の掘り下げを行った。

外堀のプラン確認調査は検出面を中堤上面のローム土層上面が顕れるまで下げて行った。外堀の覆土は黒っぽいために明瞭にそのプランを把握することができた。内外ともに直角に近い屈曲を示すが、内角は98度、外角は100度をなしている。隅角は尖らず丸く収められている。また中堤側・外側ともに直線的に掘り込まれている。幅は北辺で最大幅が10mあるが、左方に行くに従って幅を減じ、9mとなる。さらに調査範囲枠に近い西端では外側がくびれて幅は7mとなる。東辺では幅が北辺よりも広く14.4mある。プラン確認作業中に甲冑形埴輪の草摺部破片(18)1点が出土した。

中堤の幅は上面の計測値で北辺は11m、東辺は13mある。中堤上からは埴輪片が少数出土したが、原位置を留めるものではなかった。

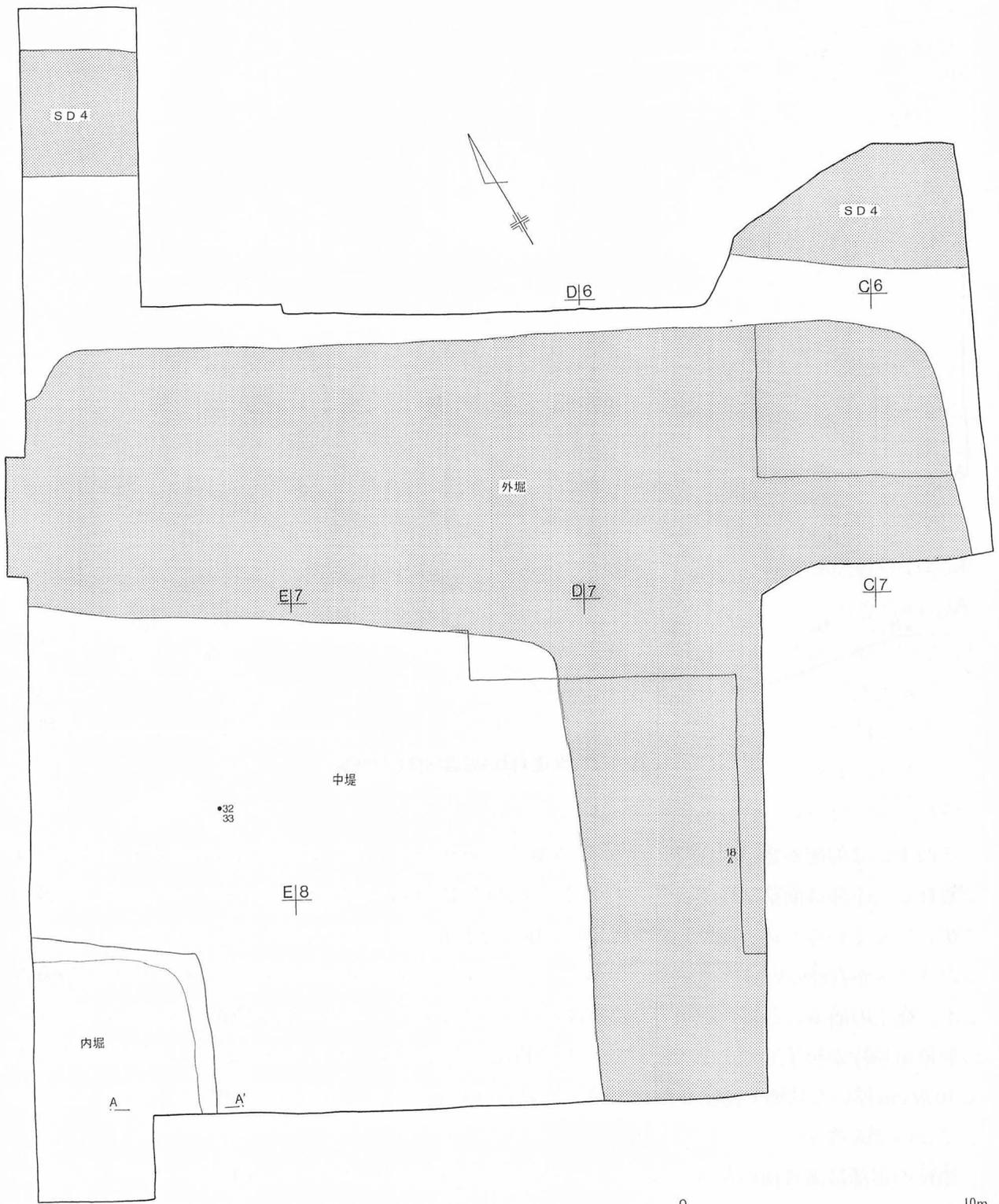
内堀もプランが北辺・東辺とも直線的で、隅角部は115度をなしている。堀底は平坦で標高は15.6m前後である。60度の傾斜で立ち上がり、中堤上面からの深さは現状では0.6mである。堆積土は中堤上から流れ込んだ状態で、最初に地山のブロックを含む暗褐色土が、続いて暗灰褐色土、鈍い黄褐色土が堆積し、最上部には天明3年の浅間山火山灰を大量に含む灰黄褐色土が中堤と内堀にまたがる状態で水平に堆積していた。下位の覆土中からは埴輪片に混じって土師器坏と土師器高坏がまとまって出土した。土師器の出土位置は隅角から1.4m南側の壁際で、1mの範囲に高坏5点と坏1点が比較的原形を保った状態で出土した(第8図参照)。遺物の立面分布からすると、中堤上から流れ込んだ状態が確認でき、堀底から20ないし40cm浮いた状態であった。古墳築造から一定期間が経過した段階で、中堤の隅角部付近において供物を供える祭祀行為が行われたことが推測できる。

なお、プラン確認によって外堀の北側には1条の溝(SD4)が検出された。上幅は4.2m、確認した延長距離は32mある。方向は外堀北辺に斜行していて、東側では2m、西側では6mを隔てている。掘り下げ調査を行っていないので、出土遺物はなく、時期不詳である。

#### 2 第2区 (第9～10図)

##### 墳丘部

2区は墳丘主軸に直交して後円部右側に設定したトレンチで、墳丘から内堀部の平面延長42.3mと外堀部の20.4mとに区切って調査を行った。墳丘は葺石を全く伴っておらず、盛土表面が流れている部分があったが、上部で平均勾配32度、下部で33度を測る。中位の標高21.2m地点には傾斜が8度となる部分があり、水平距離で2.2mを測る。

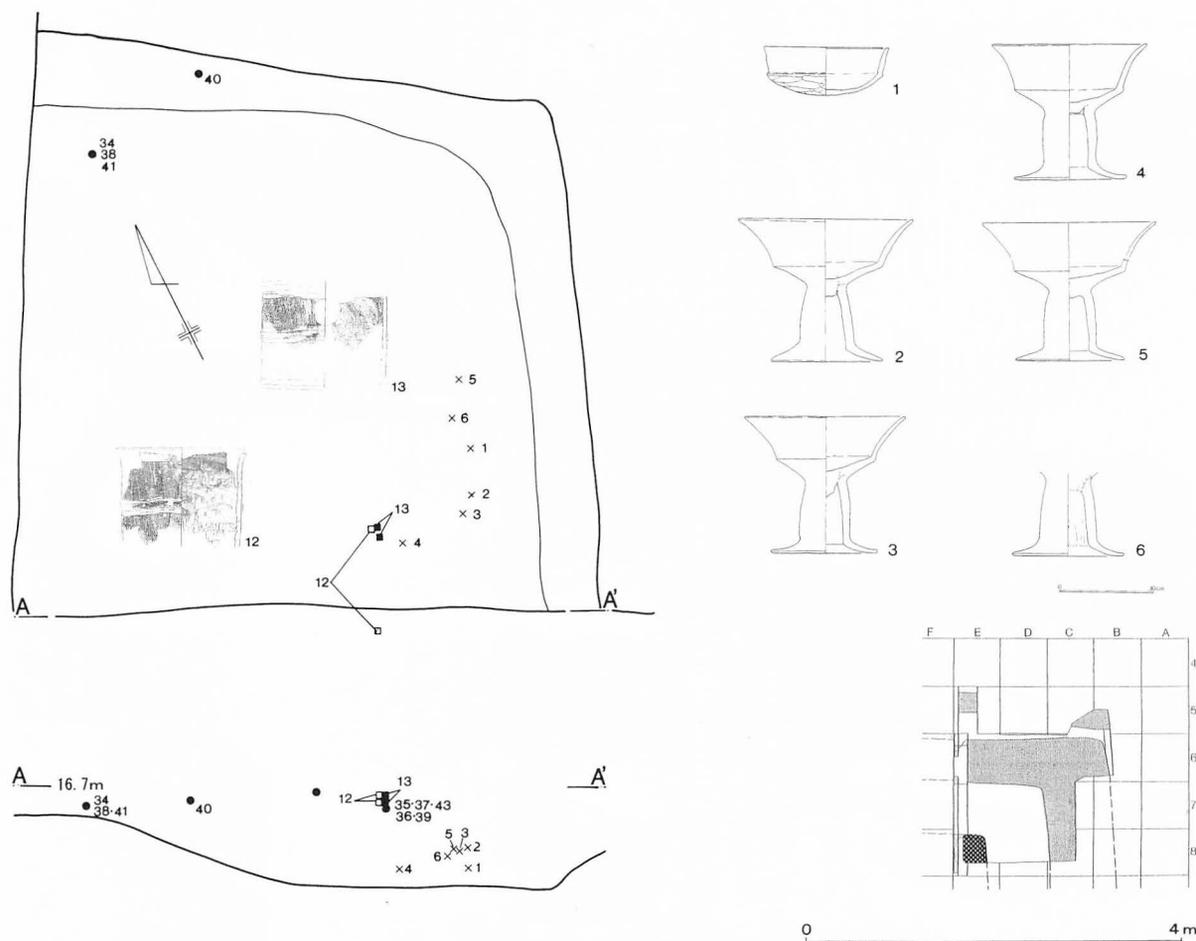


※アミはプラン確認のみ実施した部分

記号凡例

A ... ▲	C ... ■	形象 ... △	須恵 ... ◎	土製品 ... ★
B ... ○	D ... □	拓本 ... ●	土師 ... ×	三環鈴 ... ☆

第7図 平成9年度1区平面図

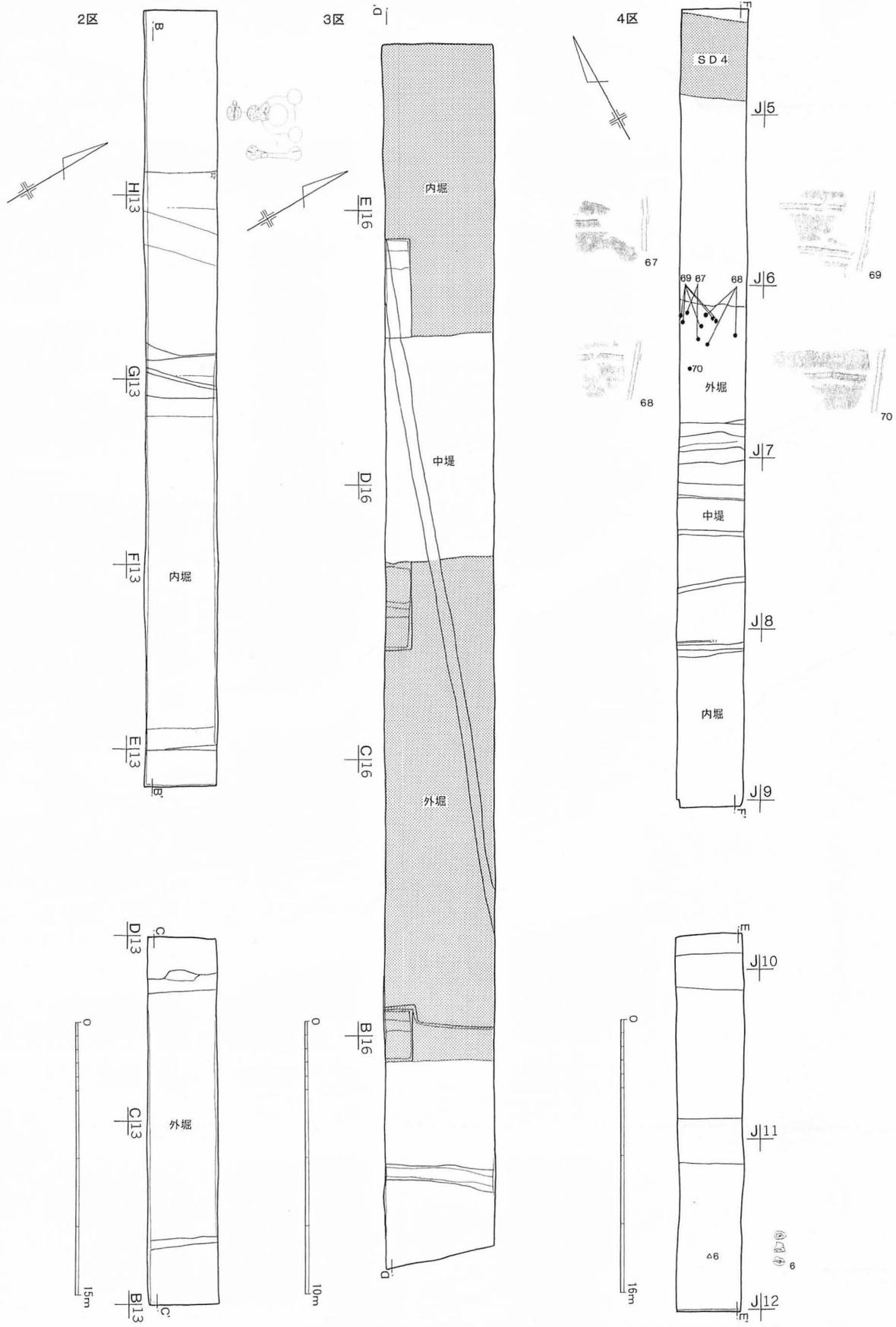


第8図 平成9年度1区内堀遺物接合関係図

その下には勾配が23度の緩斜面が水平距離で4.6m続いている。2段築成の中段テラス部が上部で残存し、下部は崩落したことが窺われる。下部には昭和43年度の第3トレンチが3m以上の深さで切り込んでいるため、8度を保つ部分の正確な延長距離は測定できないが、幅2.2m以上6.8m以下のテラスが存在したことは確かであろう。ここには円筒埴輪列が設置されていたことが推定されるが、盛土の崩落とともに転落した可能性が高く、現存していなかった。墳丘の覆土中からは少量の形象埴輪片が出土した。また、遺物として特記されるのは、テラスから2.7m上部となる上段部で10数cm浮いた状態で出土した三環鈴形土製品の破片である。墳丘頂部平坦面から流れたものとしてよいであろう。

墳丘の裾部は調査前の現況では高さ1mほどの低い崖状をなして、削り取られていることが見て取れたが、土層の観察によれば、ここには上幅で5.9m、深さ最大0.9mの大規模な掘り込みがあり、その外側の立ち上がり部が内堀覆土の全部を切っていた。また覆土の最下層はロームブロックを大量に含む埋め戻し土であり、近代以降の攪乱と推定された。この攪乱のために墳丘の立ち上がり位置や基段部の有無は不明とせざるを得ない。

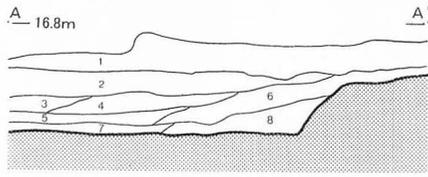
ところで、土層断面図B-B'にテラス状に描かれている部分とその外側の暗渠までの区間(8層の下部)は後の精査によって多量の埴輪片が含まれ、掘れることが判明した。前記した大規模な掘



※アミはプラン確認のみ実施した部分

第9図 平成9年度2～4区平面図

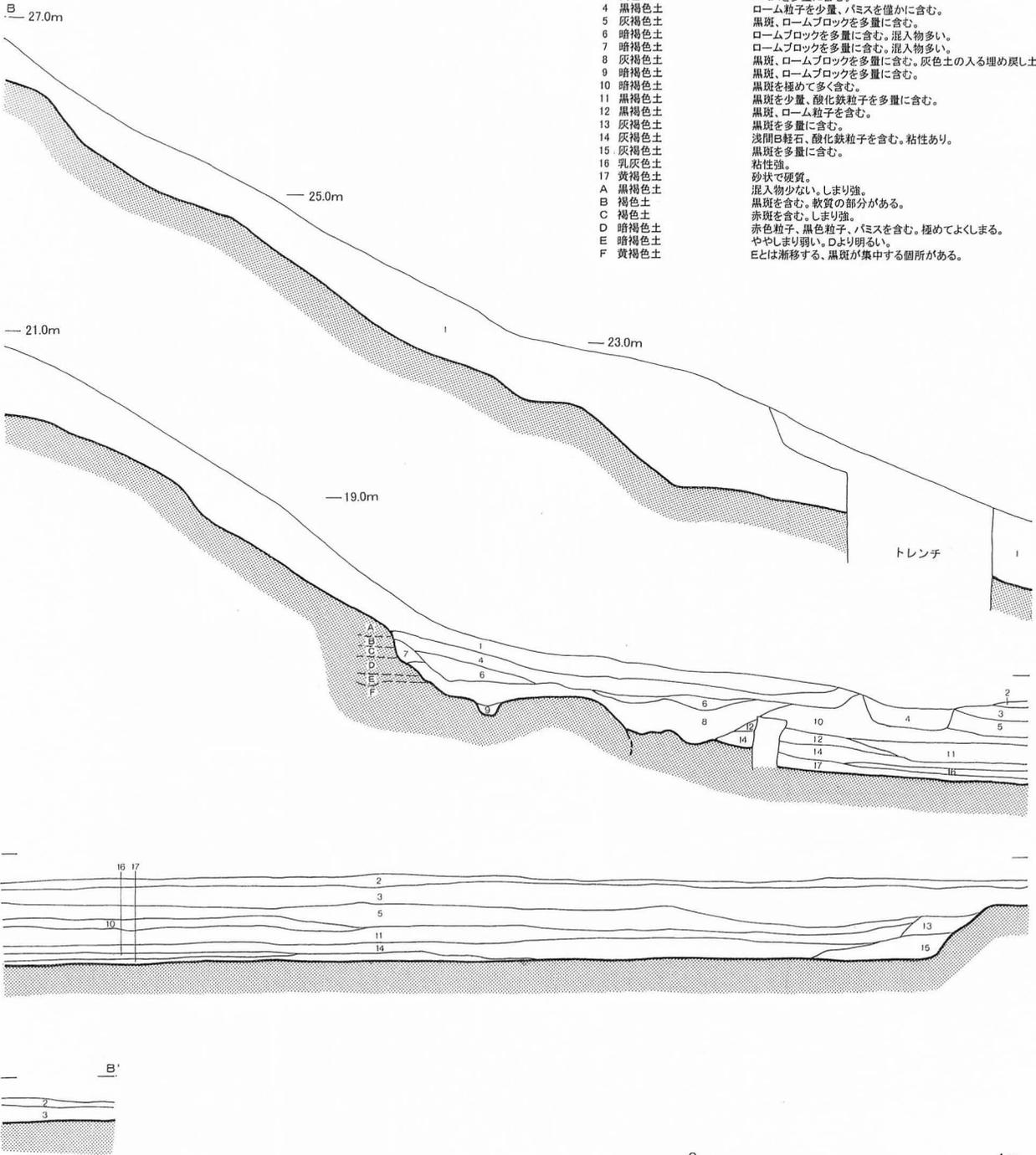
平成9年度稲荷山古墳土層断面図



9 A-A'土層説明

- 1 灰黄褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗灰黄色土
- 4 黒褐色土
- 5 灰黄褐色土
- 6 にふい黄褐色
- 7 黄灰色土
- 8 暗褐色土

浅間軽石火山灰を大量に含む。植物遺存体多量。火山灰は層の下部に多い。しまり強。植物遺存体少量。火山灰ほとんどなし。黄褐色土ブロックを少量。植物遺存体、黒斑を多量に含む。灰色土がしみ状に入る。植物遺存体少量。2より粘性強。1よりやや明るい。酸化鉄粒子を多量に含む。粘性あり。植物遺存体を中量含む。粘性極めて強(ほとんど粘土)。酸化鉄粒子、黒斑を少量含む。粘性極めて強(ほとんど粘土)。粘性少なく粒子粗い。ややざらざらしている。地山ブロックを少量含む。

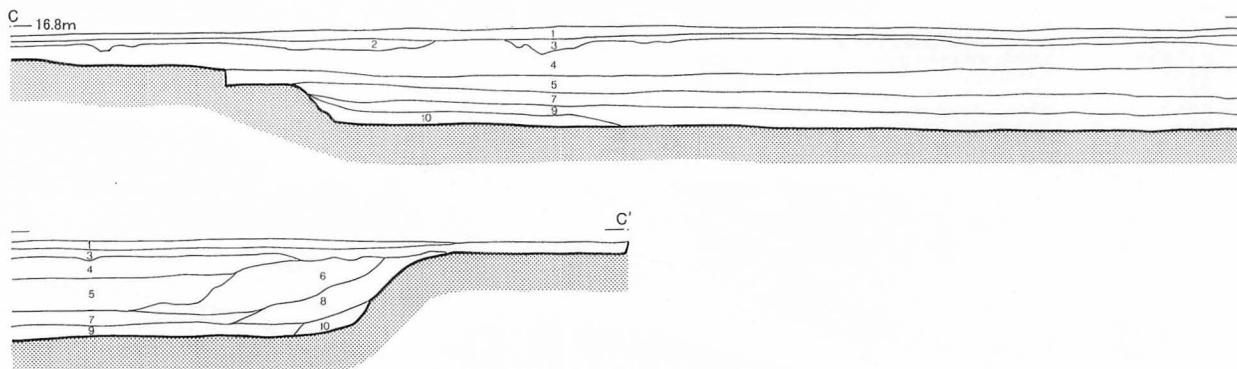


9 B-B'土層説明

- 1 褐色土
- 2 褐色土
- 3 褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 灰褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 黒褐色土
- 12 黒褐色土
- 13 灰褐色土
- 14 灰褐色土
- 15 灰褐色土
- 16 乳灰色土
- 17 黄褐色土

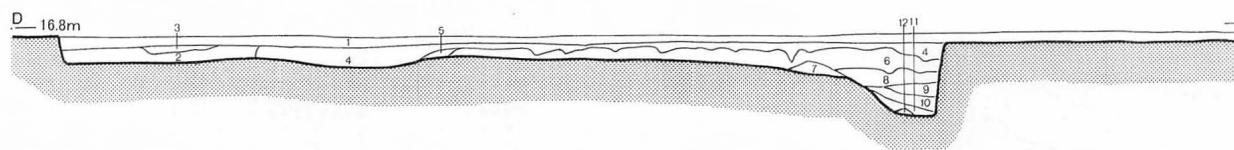
黒斑、パミスを含む。混入物多い。酸化鉄粒子を含む。パミスを多量に含む。ローム粒子を少量、パミスを僅かに含む。黒斑、ロームブロックを多量に含む。ロームブロックを多量に含む。混入物多い。ロームブロックを多量に含む。混入物多い。黒斑、ロームブロックを多量に含む。灰色土の入る埋め戻し土。黒斑、ロームブロックを多量に含む。黒斑を極めて多く含む。黒斑を少量、酸化鉄粒子を多量に含む。黒斑、ローム粒子を含む。黒斑を多量に含む。浅間B軽石、酸化鉄粒子を含む。粘性あり。黒斑を多量に含む。粘性強。砂状で硬質。混入物少ない。しまり強。黒斑を含む。軟質の部分がある。褐色土。赤色粒子、黒色粒子、パミスを含む。極めてよくしまる。ややしまり弱い。Dより明るい。Eとは漸移する、黒斑が集中する箇所がある。

第10図 平成9年度土層断面図(1)



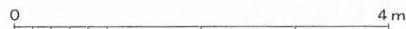
9 C-C'土層説明

- |           |  |
|-----------|--|
| 1 暗灰黄色土   | 表土。ローム粒子、天然(白色)バミスを含む。しまり強く粘性あり。                                   |
| 2 暗灰黄色土   | ローム粒子を少量、黒褐色ブロックを多量に含む。また白色バミスを少量含む。しまり1より強い。粘性1より強い。1より明るい。       |
| 3 暗灰黄色土   | ローム粒子を少量、黒褐色ブロックを多量に含む。また白色バミスを少量含む。しまり1より強い。粘性1より強い。2より明るい。       |
| 4 灰黄褐色土   | ローム粒子をやや多く含む。また炭化物粒子をまばらに含む。また黒褐色ブロックを多量に含む。また、焼土を含む。しまりやや強く、粘性あり。 |
| 5 灰黄褐色土   | 4に比べてローム粒子少ない。4はバミスを含む。(特に上位)                                      |
| 6 黒色土     | 黒褐色ブロックを多量に含む。粘性やや強い。しまり強。   |
| 7 黒褐色土    | 全体的に白色バミスを多量に含む。また、酸化鉄粒子、ロームブロックをまばらに含む。粘性強くしまり弱い。                 |
| 8 オリーブ黒色土 | ロームブロック、酸化鉄粒子を含む。しまり6より強い。粘性6より弱い。                                 |
| 9 暗褐色土    | 部分的に乳白色のしみが入る。粘性あり。  |
| 10 褐色土    | ローム粒子、同ブロックを多量、黒斑を中量含む。硬質。   |



9 D-D'土層説明

- |           |  |
|-----------|--|
| 1 暗灰黄色土   | 表土。ローム粒子を含む。しまりやや強。粘性極めて弱。                             |
| 2 黒褐色土    | ローム粒子を含む。また白色バミスを少量含む。(ほりがある)しまり弱。粘性極めて弱。              |
| 3 暗灰黄色土   | ローム粒子を含む。また、黒褐色ブロックを少量含む。しまりあり。粘性あり。                   |
| 4 黒褐色土    | ローム粒子、黒褐色土を含む。また、白色バミスを少量含む。しまりあり。粘性あり。                |
| 5 黒褐色土    | ローム粒子を少量、黒褐色ブロックを多量に含む。しまり弱。粘性弱。                       |
| 6 黒褐色土    | ローム粒子を含む。また、黒褐色ブロックをやや多く、白色バミス、焼土粒子を少量含む。しまりあり。粘性あり。   |
| 7 黒褐色土    | ロームブロックを多量、黒褐色ブロックを含む。また白色バミス、焼土粒子を少量含む。しまり弱。粘性強。6と同色。 |
| 8 灰黄褐色土   | ローム粒子をやや多く、黒褐色ブロックをまばらに、焼土粒子を少量含む。しまり弱。粘性あり。           |
| 9 黒褐色土    | ローム粒子を少量、酸化鉄粒子を含む。しまり8より弱い。粘性やや強。                      |
| 10 黒褐色土   | ローム粒子、黒褐色粒子、酸化鉄粒子を含む。また所々に黒色砂質ブロックあり。しまり欠く。粘性強。        |
| 11 黒褐色土   | ローム粒子、黒色砂質ブロックを多量に含む。しまり欠く。粘性強。10と同色。                  |
| 12 黒色土    | ローム粒子を含む。また、黒褐色ブロックを多量に含む(11より多い)。しまり欠く。粘性強。           |
| 13 灰黄褐色土  | ローム粒子、黒褐色ブロック、酸化鉄粒子、焼土粒子を少量含む。しまり弱。粘性強。7と同色。           |
| 14 黒褐色土   | ローム粒子、黒褐色ブロック、酸化鉄粒子を含む。また焼土粒子を少量含む。しまり弱。粘性強。4と同色。      |
| 15 黄灰色土   | ローム粒子、黒褐色粒子、酸化鉄粒子を含む。また焼土粒子を少量含む。しまり欠く。粘性強。            |
| 16 灰黄褐色土  | 攪乱。ローム粒子、黒褐色粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。しまり弱。粘性あり。8と同色。           |
| 17 にぶい黄色土 | 攪乱。ローム粒子、黒褐色粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。しまり弱。(16より弱い)粘性強。         |

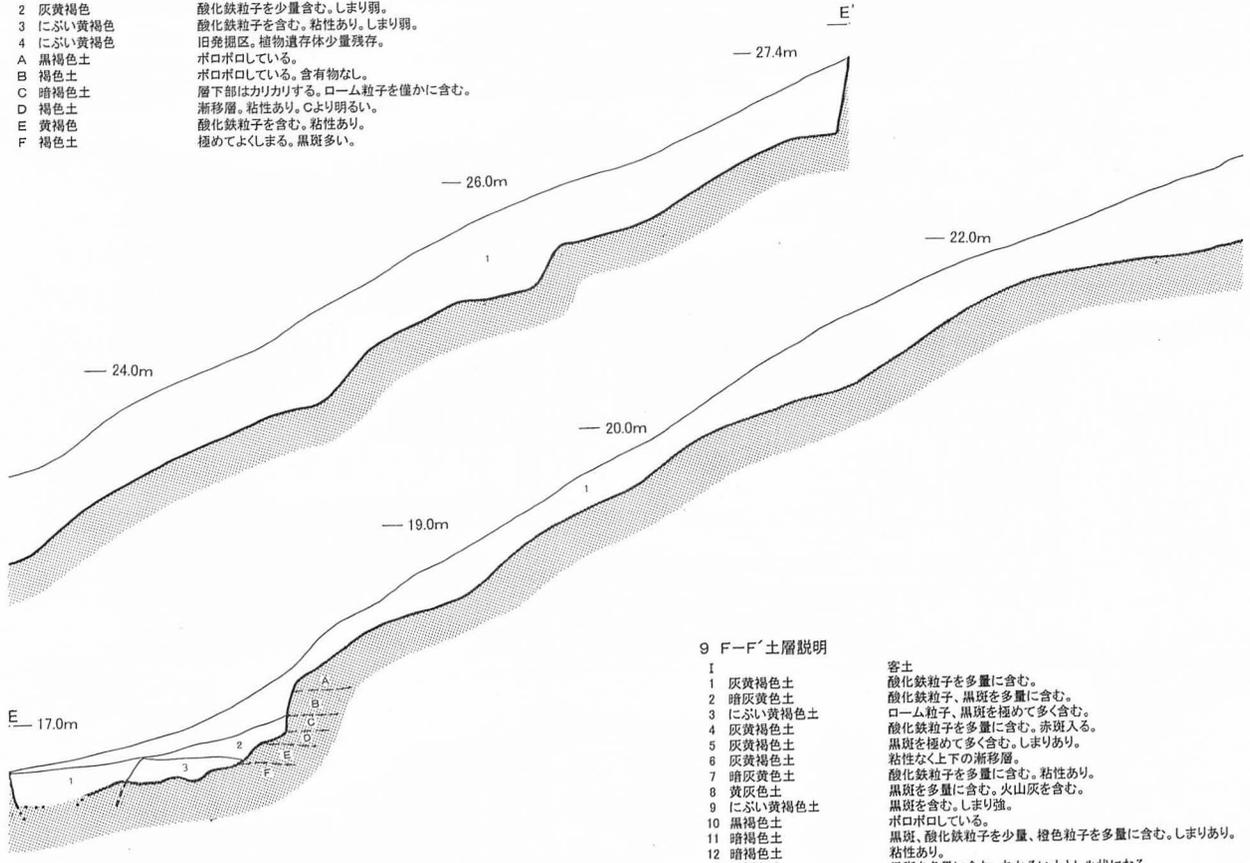


第11図 平成9年度土層断面図(2)

9 E-E' 土層説明

- 1 褐色土
- 2 灰黄褐色
- 3 にぶい黄褐色
- 4 にぶい黄褐色
- A 黒褐色土
- B 褐色土
- C 暗褐色土
- D 褐色土
- E 黄褐色
- F 褐色土

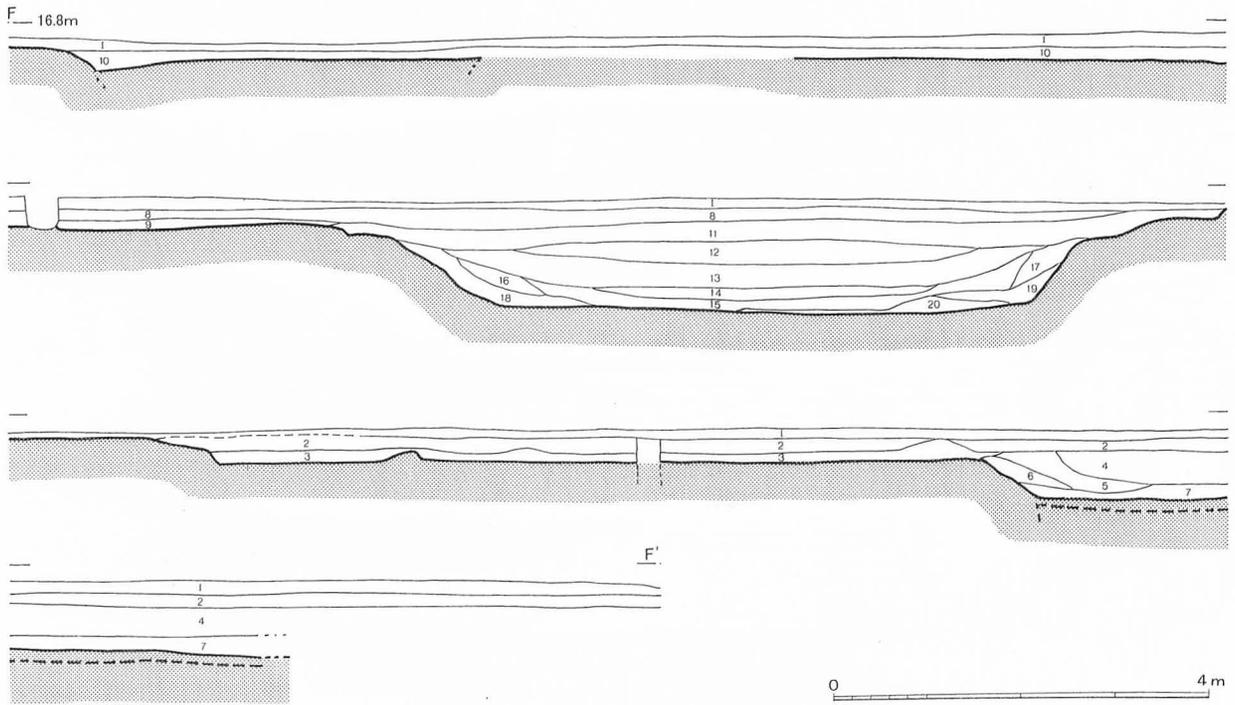
しまり欠く。  
 酸化鉄粒子を少量含む。しまり弱。  
 酸化鉄粒子を含む。粘性あり。しまり弱。  
 旧発掘区。植物遺存体少量残存。  
 ポロポロしている。含有物なし。  
 ポロポロしている。含有物なし。  
 層下部はかりかりする。ローム粒子を僅かに含む。  
 漸移層。粘性あり。○より明るい。  
 酸化鉄粒子を含む。粘性あり。  
 極めてよくなる。黒斑多い。



9 F-F' 土層説明

- I 灰黄褐色土
- 2 暗灰黄色土
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 灰黄褐色土
- 5 灰黄褐色土
- 6 灰黄褐色土
- 7 暗灰黄色土
- 8 黄灰色土
- 9 にぶい黄褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 褐色土
- 12 暗褐色土
- 13 黒褐色土
- 14 黒褐色土
- 15 黒褐色土
- 16 黒褐色土
- 17 黒褐色土
- 18 暗褐色土
- 19 黒褐色土
- 20 灰褐色土

客土  
 酸化鉄粒子を多量に含む。  
 酸化鉄粒子、黒斑を多量に含む。  
 ローム粒子、黒斑を極めて多く含む。  
 酸化鉄粒子を多量に含む。赤斑入る。  
 黒斑を極めて多く含む。しまりあり。  
 粘性なく上下の漸移層。  
 酸化鉄粒子を多量に含む。粘性あり。  
 黒斑を多量に含む。火山灰を含む。  
 黒斑を含む。しまり強。  
 ポロポロしている。  
 黒斑、酸化鉄粒子を少量、橙色粒子を多量に含む。しまりあり。  
 粘性あり。  
 黒斑を多量に含む。あかるい土としみ状になる。  
 13より明るい。  
 粘性弱。  
 酸化鉄粒子を中量、黒斑を多量に含む。粘性弱。  
 橙色粒子を多量に含む。粗い土質。  
 酸化鉄粒子を中量含む。粘性弱。  
 酸化鉄粒子を中量含む。粘性あり。



第12図 平成9年度土層断面図(3)

り込みの底部がここに達していて、墳丘裾部は完全に破壊されていた。

なお、破壊された墳丘の立ち上がり部を断ち割ったところ、6層に分層でき、下位からローム層・ブラックバンド・ローム層が存在し、最上部のよく締まった黒褐色土は旧表土となる可能性が高い。上面の標高は17.24mを測る。

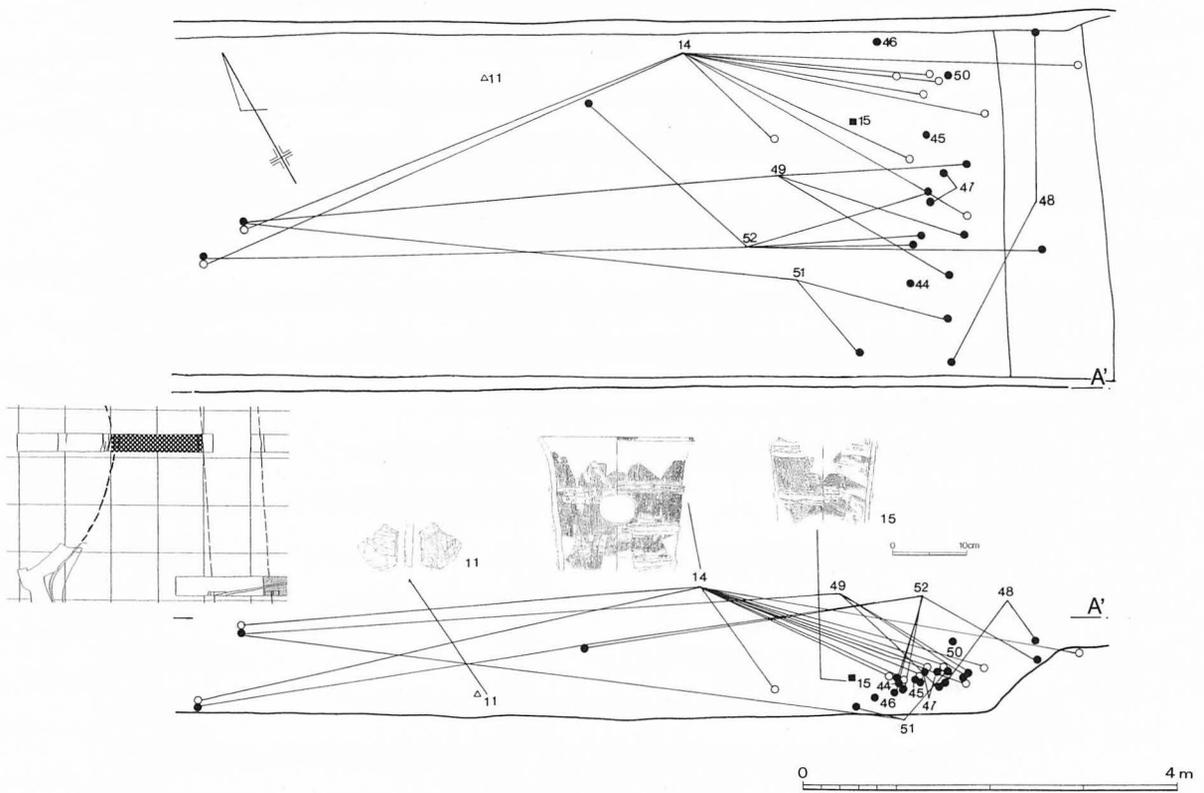
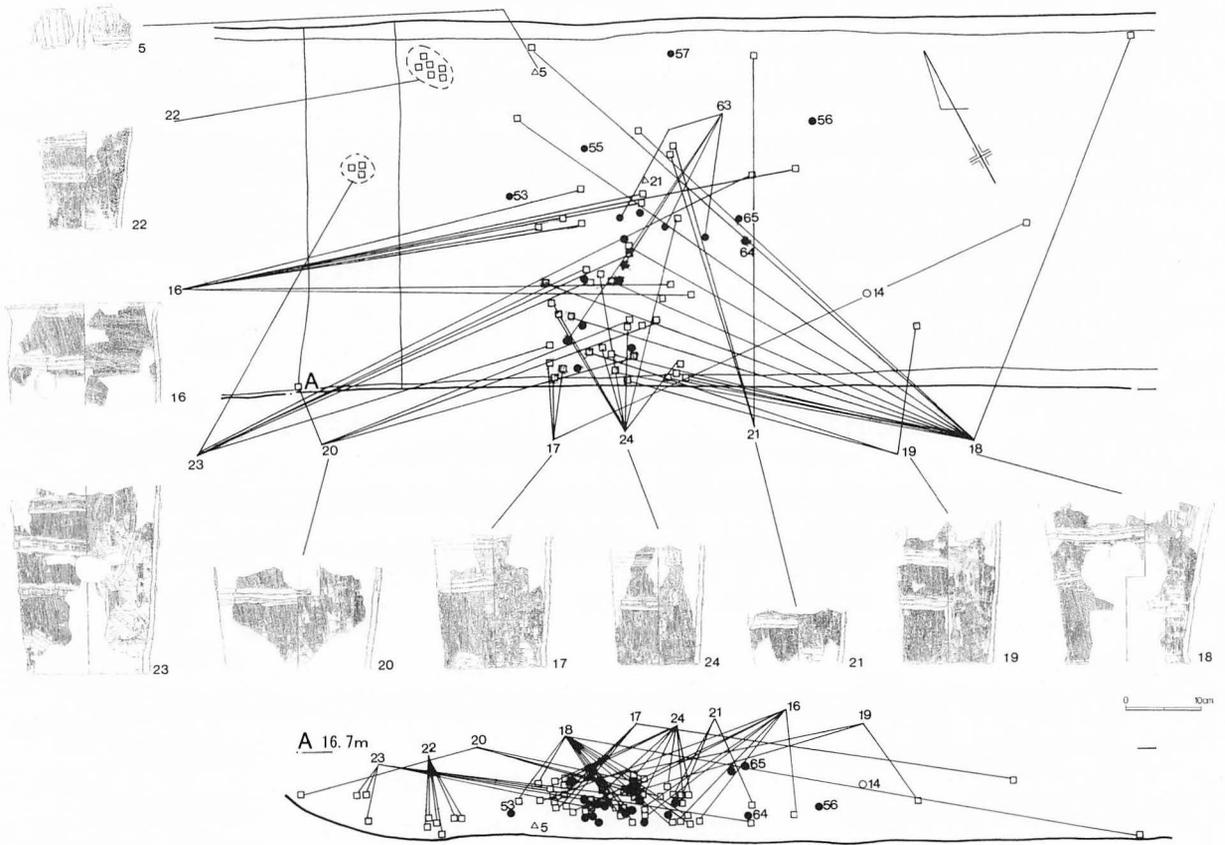
### 内堀部

内堀は前述したように墳丘側の立ち上がり部が攪乱によって破壊されていたが、中堤側の立ち上がり部は保存状態がよく、42度の勾配で直線的に立ち上がっていることが確認できた。堀幅は下幅の現存値で15.8mを測る。堀底は平坦で標高は15.3m前後である。深さは現地表面からの計測で約1.0mだが、前述した推定旧表土上面からは2.1mあり、これが本来の深さだった可能性が高い。また中堤は上面の標高が16.2m前後だが、やはり旧表土面が当初の上面であったとすれば、1.2mほど削平されていることになる。覆土は最下層がさらさらした黄褐色土で、その上が乳灰褐色粘土、さらに上が白色の浅間B軽石を含むとする灰褐色粘性土となる。この推定が正しければ、12世紀初頭までに僅か0.3mしか堀底が埋まっていなかったことになる。しかし、中堤よりでは堀底の第1層となり、間層がないことには問題が残る。浅間B軽石の降下は行田市周辺でも確認されているが、その程度はあまり顕著でない上に、B軽石は黒っぽい色調を示す砂状の軽石である（注1）から浅間B軽石とすることは難しい。これらのことを踏まえた上で、平成11年度3区の所見を参考にして、榛名山二ッ岳火山灰（F.A.）の誤認と判断する。なお、土層注は混乱を避けるために訂正は行わないことにする。その上層が黒褐色土で、円筒埴輪片の大半がこの層に包含されていた。また、中堤際の立ち上がり部には灰褐色土の三角堆積が早い時期に形成されており、中堤上にローム土と異なる盛土があった可能性を示唆している。

なお、表層から2番目にはパミスを多量に含む灰褐色土が内堀から中堤上にかけて水平堆積している。浅間A軽石である可能性が高いので、中堤を含めた墳丘の周辺部は、その降下時期である18世紀末にはすでに削平されていた可能性が考えられる。

### 内堀部の遺物出土状況（第13図）

内堀内の遺物分布はその両端部に稠密で、中央部に希薄であった。このことは墳丘よりの分布は墳丘から転落した埴輪であり、中堤よりの分布は中堤上から転落した埴輪であることを示している。墳丘よりで出土した埴輪のうち復原の上、実測図を作製できたものは9個体あり、すべてD類の円筒埴輪であった。このうち大型品で4条凸帯と推定されるD1類が4個体（16・18・20・23※実測図番号）同じくD2類が1個体（17）、小型品で3条凸帯と推定されるD3類が4個体（19・21・22・24）となる。これらは堀底から0.2～0.8m（平均0.5m）浮いた状態でバラバラに破片となって散布していたものが接合されている。垂直分布図と土層断面図を重ねた場合、18と16の一部破片が榛名山二ッ岳火山灰（F.A.）と推定される火山灰を含む（注2）14層中から出土しているが、大多数はこれより上層の12層・11層・10層から出土している。また、14層より下層となるのは16層と17層であるが、両層からは埴輪は出土していない。さらに、23と22は前記した墳裾の大規模な掘り込み中から出土したものである。これらのことから、2区の墳丘裾部では埴輪はF.A.降下以降に墳丘から転落したと判断される。



第13図 平成9年度2区内堀遺物接合関係図

くわえるに、分布の中核範囲が墳裾から外側に向かって5m余りあることは、墳丘から転落した際の滑りの強さを示すものであろう。形象埴輪片は2点出土していて、5の人物埴輪腰部と21の器財埴輪であった。5は堀底から僅か数cm浮いて14層より下位から出土した。最も早く墳丘から転落した埴輪の一つである。A類に属す。

いっぽう内堀の中堤よりで出土した埴輪のうち実測個体は2個体で6条凸帯と推定されるB2類(14)と5条凸帯のC2類(15)の円筒埴輪であった。他にD類の破片が9片ある。15層の三角堆積が形成された後に、中堤から流れ込んだ状態で、直近のわずか1.3mの範囲に0.4m程浮いて出土したものが多い。垂直分布からの検討では、土層断面図と重ねた場合、推定F.A. 包含層である14層から出土したものは14(B2類)の一部・052(D2類)の一部・11の家形埴輪片(A類)など少数で、ほとんどが上層の13層、11層および5層からの出土である。形象埴輪片は11の家形埴輪屋根部が1点だけであるが、中堤からは5m以上離れており、内堀の中間部となる位置である。墳丘から転落した可能性が高い。また、外堀の外堤付近から出土した円筒埴輪(14・52)に8mも離れて接合した破片が各1片あったが、二次的な移動が考えられる。

なお、2区の内堀では推定F.A. を包含する層位が堀底に密着する部分があった。これは他の調査区では認められなかった事実である。この層位は堀底から0.3ないし0.7m浮いて層序的には3番目の堆積となるのが通則である。

後円部東側に大規模な墳丘崩落の痕跡があることから推測すると、地滑りがF.A. 降下前に発生して応急の復旧工事が行われ、墳丘埴輪列の再設置と内堀の堀底浚いが行われた可能性がある。また、中堤上にはその後、B・C・D類の円筒埴輪が混在したとみられるのに、墳丘裾付近に転落した円筒埴輪がすべてD類であったことは、墳丘の地滑りがその後もとまらずに、埴輪列の再々設置が行われた可能性を示唆している。このことはD類が最も新しいことを示している可能性がある。

### 中堤部

中堤は内外の堀と接する部分のみの調査しか行っていないので、全体については明らかにすることができない。しかし、立ち上がり部の両側が検出されているため、中堤の規模は上幅12.38m、下幅14.4mであることを知ることができる。上面の標高は内堀よりで16.1m、外堀から3.2m内側に入った地点で16.4mを測る。その上面から外堀上にかけて炭化物・焼土・浅間A軽石と推測されるパミスを含み耕作土の可能性の考えられる灰黄褐色土が水平に堆積している。このことは墳丘の周囲が後世の開発によって広範囲にわたって削平されていることを示しており、中堤上面はその際に失われたと推測される。また、この灰黄褐色土の下層である第5層は外堀側の中堤立ち上がり部を破壊しており、階段状に変形した部分がある。

### 外堀部

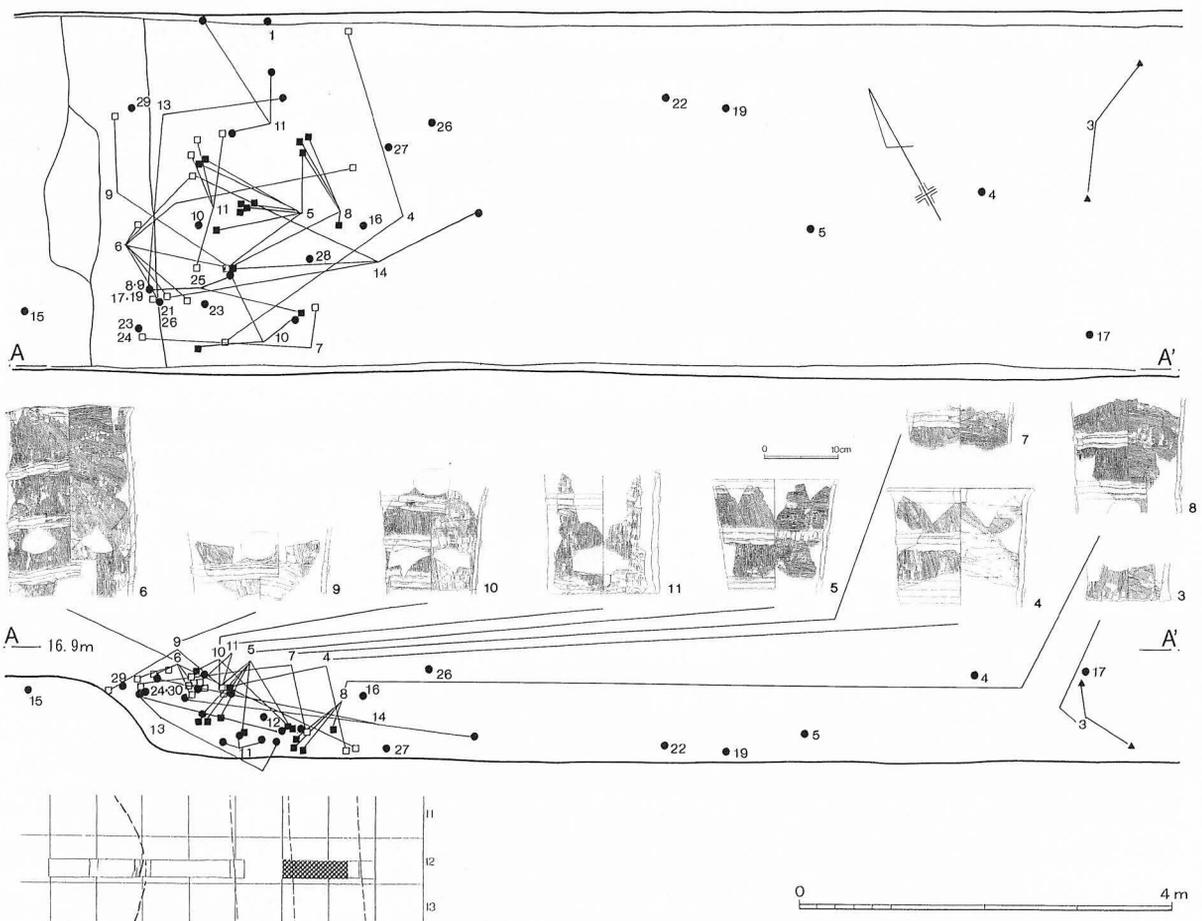
上幅13.5m、下幅14.85mを測る。堀底は中央部で僅かに深くなり、標高15.6m、両端では15.8m前後となる。中堤側立ち上がり部付近にはロームブロックと黒色土ブロックを含む褐色土が最初に堆積しており、中堤の上部が崩落したと推測されるが、その量は多くはない。これに対して外側の立ち上がり部では3層から成る大量の三角堆積が認められ、これらにはロームブロックと黒褐色土

ブロックを多量に含んでいるので、外堤が存在していて、その盛土が崩落した可能性が考えられる。その3回目の堆積は白色パミス（推定F.A.）を多量に含む黒褐色土層（7層）の上に乗っている。堀底の覆土最下層は粘性のある暗褐色土が厚さ0.2mで堆積し、その上位が7層である。

なお、外堀の外堤側立ち上がり部は50度の傾斜で立ち上がるが、残存する上場は崩落して角が取れた状態であった。外堤部の現存する上面の標高は16.7mである。

#### 外堀部の遺物出土状況（第14図）

外堀内の遺物分布は中堤よりに稠密で、中央部と外堤よりに希薄であった。中堤よりから出土した埴輪は中堤から転落したとみて誤りないであろう。復原の上、実測図を作製できたものは8個体あり、C類とD類の円筒埴輪およびA類の形象埴輪であった。このうち大型品で4条凸帯と推定されるD1類が2個体（4・9）同じくD2類が2個体（6・11）、小型品で3条凸帯と推定されるD3類が1個体（7）、5条凸帯の大型品であるC2類が3個体（5・8・10）となる。これらは中堤側立ち上がり部に沿った約2.0mの間に集中しており、垂直分布の中心軸は37度の傾斜を示している。堀底から0.1～0.9m浮いた状態でバラバラに破片となって散布していたものが接合されており、最初の転落破片は9層に少数包含されているが、最上層までの全部の層位に包含されている。上部の4層は耕作土の可能性が強く、下部から鋤・鍬によって上部に移動したものを含む可能性がある。全体としては白色パミス（推定F.A.）を含む7層とその上下2層に包含されるものが多数を占めている



第14図 平成9年度2区外堀遺物接合関係図

る。堀底第1層序となる暗褐色土（9層）には部分的に乳白色のしみが入っており、F.A.の水性堆積ブロックの可能性も考慮される。この9層はF.A.を含むとされる平成11年度A-A'土層断面の3層と色調や粘性が共通している。このことは前記した内堀の状況と似ており、堀底浚いがF.A.降下前に行われた可能性を示している。後円部の地滑りの規模は内堀を埋めるほどの規模で、さらに墳丘から落下した円筒埴輪が中堤上の埴輪列をなぎ倒してしまったために、外堀内まで被害が及んだことが想定される。

なお、3は形象埴輪の器台部でA類に属すが、外堀の中央部より外堤よりの出土であり、外堤から転落したと推測される。

### 3 第3区（第9・11図）

3区はくびれ部右側の中堤と外堀のプラン確認を目的として設定した幅4.0m、長さ44.6mの調査区である。外堀はプランの確認を行っただけで、覆土の掘り下げは行っていないが、外堀の内外2箇所の上立ち上がり部と内堀の中堤側立ち上がり部の合計3箇所についてはサブトレンチを設けて掘り下げを行い、外堤部と中堤部についても掘り下げ調査を行った。

#### 外堀部と外堤部

外堀のプラン確認調査は検出面を中堤と外堤の上面であるローム土層が顕れるまで下げて行った。外堀の覆土は黒っぽいために明瞭にそのプランを把握することができた。検出面での外堀の幅は18.2mあった。しかしサブトレンチを設けて立ち上がり部を検出した上で計測した結果、その上幅は15.8mであることが確認された。このことは外堤・中堤ともに全くの平坦面ではなく、外堀に向かって緩やかな傾斜面を形成していることが原因であった。下幅は14.2mを測り、外堤側の立ち上がり部は42度、中堤側の立ち上がり部は45度の勾配で直線的に立ち上がっていた。ともに堀底の標高は15.8mを測る。内堀の覆土は両立ち上がり部付近に三角堆積を伴っている。

また、外堤部の断面観察によれば、黒褐色土ブロックを多量に含み、粘性が高くしまりの強い黒色土層（6層）がローム層の上に遺存しており、盛土となる可能性がある。上面は耕作によって波打っており、本来の高さを保っていないと見られる。また、この土は取り崩されて外堀の上に平らに敷きならされている。上面の標高は16.56mで、厚さは0.15m前後である。第2区の墳裾断ち割り調査による旧表土の上面の標高値17.24mに照らすと、0.68m低い。このことから外堀の外側はいったん標高16.5m前後のローム土層まで削平され、墳丘の盛土等に転用された後に、外堤部に改めて盛土と版築整形が行われたと推定できる。外堤は外側を後世の溝によって破壊されており、遺存する幅は4.56mを測る。この外堤の外堀側上場には黒褐色土を堤防状に配置しており、反対側は灰黄褐色土で押さえられている。外堤の盛土工法的一端を示すものであろう。

#### 中堤部

中堤部も両端部にサブトレンチを設け、上面の掘り下げ調査を行った。上面はローム土層面で、中間部はほぼ平坦である。標高は16.6mを測る。上幅は12.1m、下幅は13.0mある。両端部は緩斜面をなしている。内堀側ではこの上位に黒褐色土があり、しまりを有し、かつ内堀の覆土とは截然と分層できたことから、中堤盛土の可能性が高い。4層・16層間の垂直線からすると、中堤の内堀

側には幅0.8mのテラスがあり、その内側に盛土が施されていたようである。

#### 4 第4区 (第9・12図)

4区は墳丘主軸上の後円部から外堀に向けて設定した幅4mのトレンチで、墳丘部の平面延長22.2mと内堀の一部から外堀部にわたる46.4mとに区切って調査を行った。

##### 墳丘部

墳丘は葺石を全く伴っておらず、盛土表面も少し流れている部分があったが、上部で平均勾配28度、下部で30度を測る。中位の標高21.64m地点から上に傾斜が11度となる部分があり、水平距離で2.2mを測る。上部墳丘勾配は標高22.0mから始まるので、この傾斜変換点付近に2段築成の中段テラス部存在していた可能性がある。ただし、この付近には昭和43年度に行われた第1次調査時のトレンチが配置されているので、若干の変更があったことを考慮しなければならない。ここには円筒埴輪列が設置されていたことが推定されるが、盛土の崩落とともに転落した可能性が高く、現存していなかった。墳丘の覆土である灰黄褐色土は厚さ0.4～1.0mで、少量の埴輪片を含んでいた。重量合計は11.1kgである。墳丘上段部で標高25.6mとなる位置からは人物埴輪の手(6)が出土している。その位置から見て墳頂平坦面に設置されていた人物埴輪が壊れてその一部が転落したと見てよいであろう。

墳丘の裾部は調査前の現況では標高17.6m以下が低い崖状をなしていて、削り取られていることが見て取れたが、土層の観察によれば、ここには上幅1.49mで後世の溝が切り込んでいた。その墳丘側は幅1.8mの緩斜面をなしてから垂直に立ち上がっていたが、遺物が少ない点や覆土の状態から後世の変更によるものと推測された。ただし、この部分に墳丘基壇部が存在していた可能性を否定するものではない。この緩斜面上に乗る3層はローム粒子を大量に含むにぶい黄褐色土であり、基壇部テラス面を水平に仕上げるための盛土となる可能性がある。

なお、墳丘の立ち上がり部を断ち割ったところ、6層に分層でき、その最上部の黒褐色土は旧表土となる可能性が高い。上面は明確でないが、下面の標高は17.32mを測る。

##### 内堀部

内堀は中堤よりの一部を掘り下げて調査を行った。立ち上がり部は保存状態がよく、35度の勾配で直線的に立ち上がっていた。堀底は平坦で標高は15.1m前後である。調査所見では堀底はロームブロックを敷きならしてあり、掘方は0.1mほど下がると推定している。覆土は最下層が暗灰褐色粘性土で、次に立ち上がり部付近に三角堆積が形成され、さらに灰黄褐色土となる。黒色系の腐植土が形成されていないことが注意される。表面の1～2層は水田耕作土と見られ、内堀の覆土を水平に切って堆積している。全覆土中から重量合計8.89kgの埴輪片が出土した。中堤からの転落品と見られるが、量は少ない。

##### 中堤部

中堤は上幅11.9m、下幅13.1mあり、ローム土層面となる上面の標高は最も保存状態のよい場所で16.6mを測る。内堀よりの8.0mは開田され、一段低く、標高16.1m前後の平坦面となっていて暗渠跡や畝が残存していた。また、外堀側の肩部は3段の階段状の段を持って傾斜しているが、当

初のものであるのか後世の変形なのか不明である。中堤上からは合計1.8kgの埴輪片が出土したが、原位置を留めるものはなかった。

### 外堀部

外堀は保存状態がよかった。上幅7.4m、下幅5.2を測る。堀底は中央部より少し中堤よりの位置で僅かに深くなり、標高15.4m、両端では15.5～15.6m前後となる。立ち上がり方は中堤側と外堤側とで少し異なっていた。中堤側では53度の急勾配で立ち上がるのに対して、外堤側では33度の緩傾斜であった。覆土の観察では、両立ち上がり部付近に粘性の弱い黒褐色土を主体とする多量の三角堆積が最初に堆積しており、それぞれ中堤と外堤の盛土が崩落したと推測される。中央部にはこれと近似した土が両側から3次にわたって流入堆積しており、厚さは0.5mある。その上位には粘性のある暗褐色土がレンズ状の堆積を形成していた。

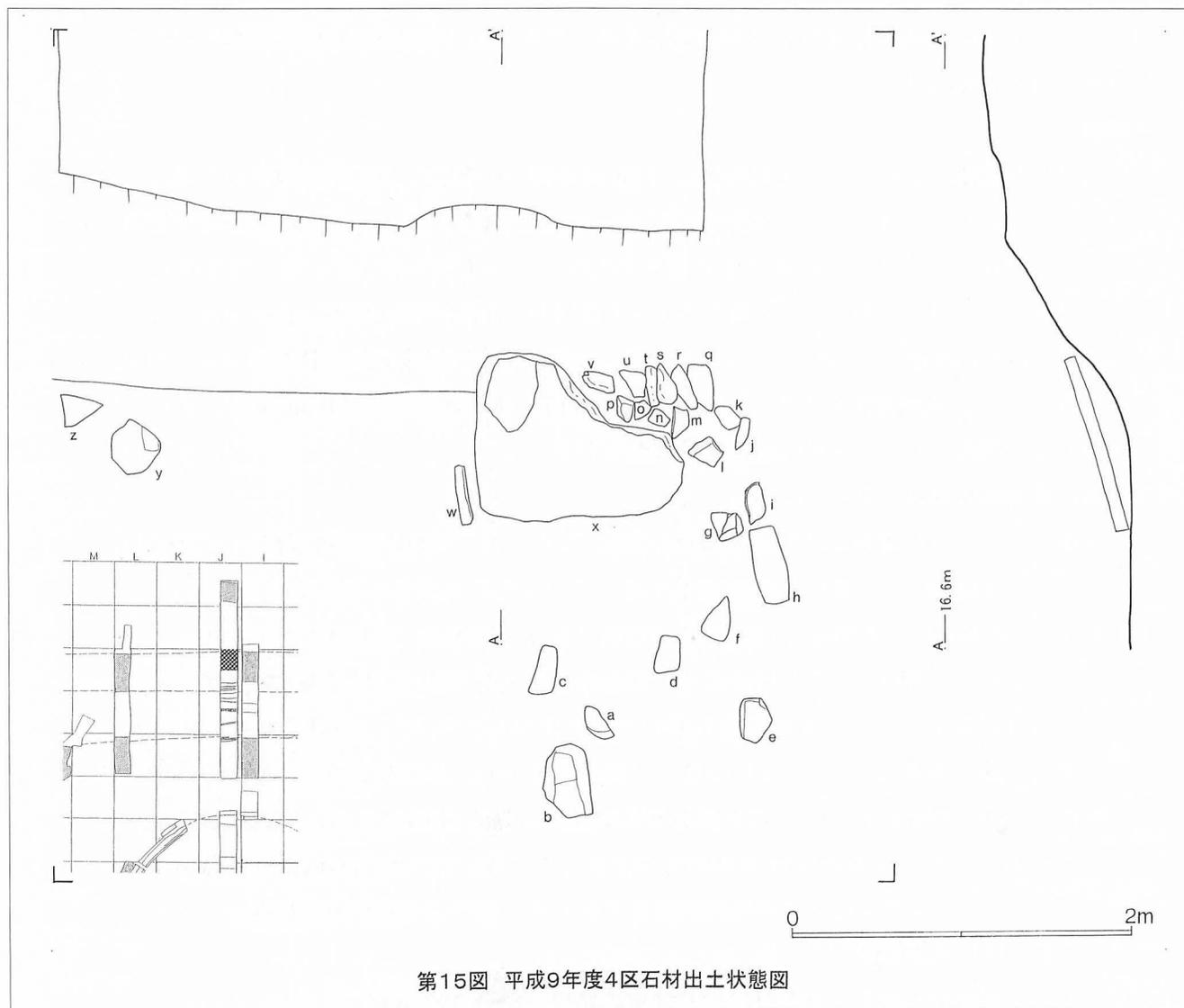
### 外堀部の遺物出土状況（第9・15図）

外堀覆土内からは総重量31.13kgの埴輪片が出土した。とくに外堤から転落した状態で検出された4点は大型の埴輪片で、数片の接合関係を有しているものが多かった。いずれもD1・2類に属す4条凸帯と推定される大型品と3条凸帯のD3類であり、外堤上に配置されていたものであろう。

また、特記すべき遺物として石材がある。外堤の立ち上がり部下場に密着する状態で大型の緑泥石片岩の石材が検出された。平面形は方形の一隅が欠損したもので、長さ1.24m、幅1.0m、厚さ0.1mを測る。推定重量は0.5トンほどになる。斜面に乗りかかる状態であり、運搬中に取り落とした可能性が高いと判断される。この大型石材の周囲には他に27個の小ぶりの石材が散乱していた（第15図参照）。大きさは長辺0.3m前後のものが多く、小型の薄片も見られた。稲荷山古墳から出土した石材については県立自然史博物館副館長で岩石学が専門の本間岳史氏に鑑定して頂いた。種類別に計量し統計表を作製した（第1表）ので掲げておく。

J6グリッド全体から出土した石材は岩石鑑定の結果、黒色片岩が46個、合計14.56kg、緑泥石片岩が34個、合計7.29kg、そして砂岩が5点、合計5.44kg、総重量27.29kgあった。稲荷山古墳には葺石が施設されていないので、未発見の埋葬施設の構築材に用いる予定で運搬中に事故が生じた可能性が示唆される。石材の出土分布図（第16図）を作製して検討した結果、①石材の出土は前方部の周囲には皆無であり、後円部の周囲に限定されること。②種類は片岩が主体で、合計39.94kgとなり、全体の84%を占めること。③分布濃度の極点はJ6グリッドにあり、他に2kgを超えるのは造出し付近のM14グリッドのみ、1kgを超えるのは墳丘上段となるJ11グリッドのみであることが判明した。このことは後円部の周囲から墳丘に向かって石材搬入が行われたという推定を支持するもので、その主要搬入路が後円部主軸線上の4区に重複していたとみることができそうである。放棄したのは湧水によって、石材の回収が困難だったのであろう。

岩石の種類については、重量比の高いものは黒色片岩と緑泥石片岩で、前記した特大の石材を除外した場合でも石材総重量の83.6%を占めている。このほかでは砂岩がやや多く、点紋緑泥石片岩、千枚岩、変はんれい岩、ホルンフェルス変成岩、石灰岩、凝灰岩、石英安山岩はいずれも重量計が0.4kgに満たない。これらは変成岩と堆積岩が主体であり、火山岩の多い利根川水系のものと異なる。荒川水系の露頭で大型石材を算出する長瀬周辺からまとめて運搬された可能性が高い。



### 外堤部

外堀の外側に古墳に伴う堤や溝などの施設が存在するか否かを確認するために、外堀の外側の延長17mを調査した。外堤は肩部に幅0.5mほどの段を有し、その内側にはローム面上には0.1mほどの厚さで盛土の可能性のあるしまり強い、にぶい黄褐色土が乗っており、その延長距離は2.6mあった。上部は削られているので高さは不明である。外堤の外側には古墳に伴う構造物はなく、外堤から12m離れた位置に上幅4.6mの溝が確認された。その方向性と規模から1区で検出された溝の延長部と推測された。両者を結ぶ延長距離は78.4mとなる。

なお、外堀の外側部分全体で0.72kgの埴輪片が出土したが、原位置で確認されたものはない。

	黒色片岩	緑泥石片岩	点紋緑泥石片岩	千枚岩	変はんれい岩	ホルンフェルス変成岩	石灰岩	凝灰岩	砂岩	石英安山岩	重量計
A-15		1(0.31kg)									0.31
B-12	1(0.02kg)					2(0.42kg)					0.44
B-13			1(0.06kg)								0.06
C-6		1(0.17kg)									0.17
C-7		1(0.02kg)									0.02
C-12		1(0.01kg)									0.01
D-4		1(0.01kg)									0.01
D-6	1(0.05kg)	2(0.04kg)									0.09
D-12									1(0.27kg)		0.27
E-6		2(0.02kg)									0.02
E-7	1(0.01kg)	3(0.03kg)									0.04
E-8										1(0.03kg)	0.03
E-12	1(0.01kg)	3(0.12kg)	1(0.03kg)			2(0.02kg)				3(0.14kg)	0.32
F-12	1(0.05kg)	2(0.31kg)									0.36
G-7								1(0.13kg)			0.13
G-12	1(0.04kg)									2(0.09kg)	0.13
J-4		5(0.17kg)									0.17
J-5		1(0.34kg)									0.34
J-6	46(14.56kg)	34(7.29kg)							5(5.44kg)		27.29
J-7	1(0.01kg以下)	3(0.06kg)			1(0.03kg)						0.1
J-8		2(0.08kg)								1(0.07kg)	0.15
J-9		5(0.31kg)							1(0.58kg)		0.89
J-10		4(0.32kg)									0.32
J-11		3(0.99kg)									0.99
K-16		1(0.47kg)									0.47
L-11		1(0.04kg)							1(0.04kg)		0.08
L-13						1(0.3kg)					0.3
L-14		1(0.01kg)									0.01
M-12	1(0.01kg以下)										0.01
M-13	1(0.06kg)	1(0.38kg)									0.44
M-14	1(1.95kg)	1(0.01kg)		1(0.01kg)			1(0.1kg)				2.07
O-7		1(0.01kg)									0.01
注記無し	1(11.2kg)	5(0.36kg)				1(0.01kg以下)				1(0.05kg)	11.62
重量計	27.97	11.88	0.09	0.01	0.03	0.75	0.1	0.13	6.33	0.38	47.67

第1表 石材の種類別重量統計表

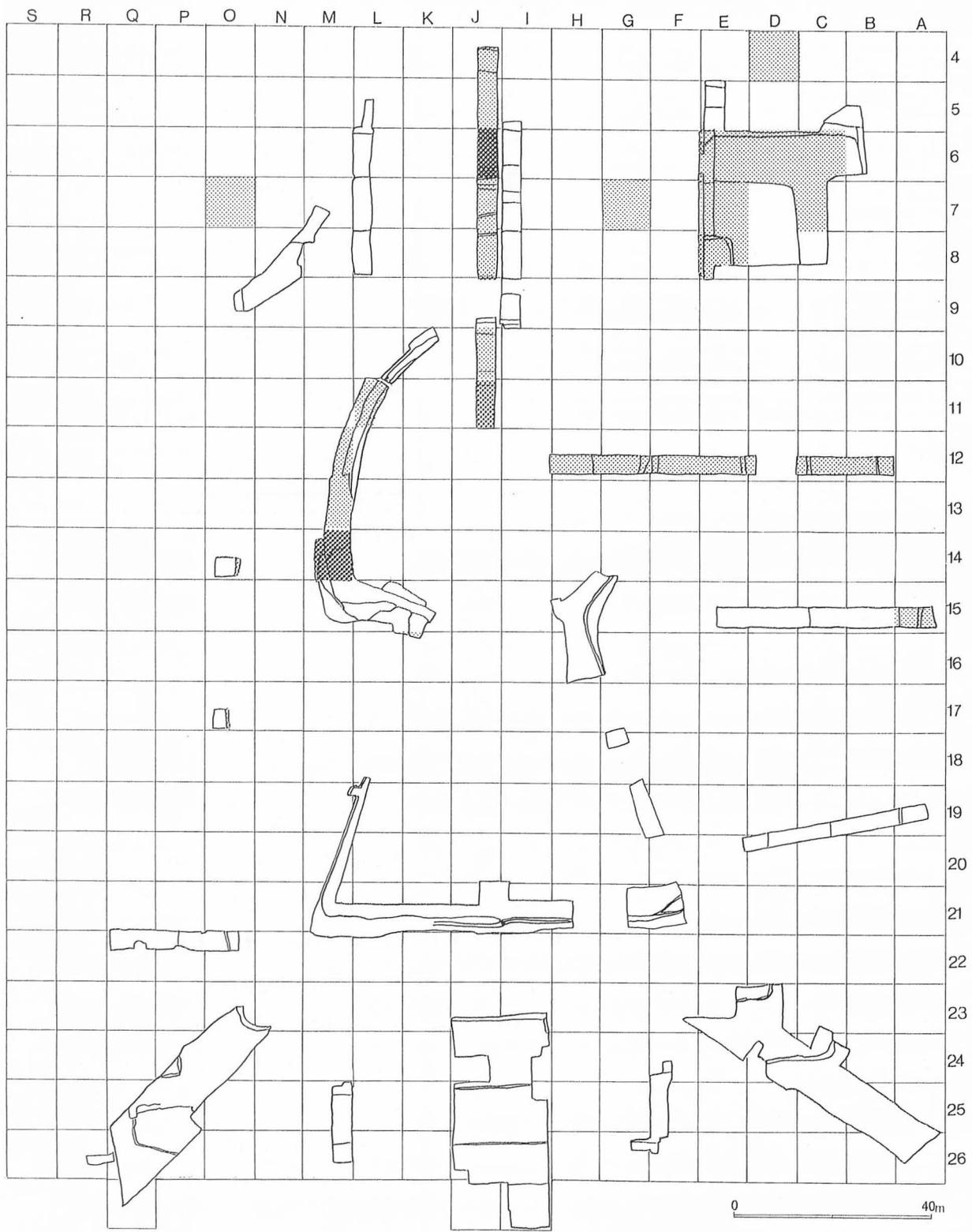
## 5 第5区 (第17・18区)

5区は後円部の左側墳裾部から造り出し部を経てくびれ部に至る調査区である。ここには墳丘と復原した内堀（当時は水堀）とに挟まれて幅5mほどの園路が巡っており、これを通行止めにした上で、堅く締まった砂利敷き舗装面を重機で撤去した後に、掘り下げ調査を行った。説明の便宜上、くびれ部と造り出しに挟まれた部分を②地点、それ以外を①地点とする。

### 後円部墳裾部

後円部の墳裾は①地点の中央部から北端にわたって現存することが確認された。円弧を描いて検出された墳裾外縁の延長距離は41.25mであった。狭い調査範囲内での所見では傾斜面をなしており、墳丘から転落して割れた状態の埴輪片が多数出土した。墳裾付近から出土した比較的大きな破片の出土位置を第17区に図示しておくが、いずれも原位置から検出されたものではない。また、墳裾には幅1.0m前後で、互いに切り合う後世の溝が2本あって、円弧を描いていた。隣接する耕地に雑木の根が入り込むことを避けることを目的として掘られた根切り溝であろう。

墳裾に接する内堀はG-G'断面では堀底が平坦で、標高は16.2mを測る。他の内堀の堀底レベルに比して1m近く高いので、テラス面である可能性も検討したが、造り出し付近でテラスの先端部が検出されなかったことから、堀底と見て誤りないようである。覆土の最下層は暗褐色ロームブロック主体の土層であり、貼り床住居跡のように上面が堅く締まっていた。このことから、第4区内堀と同様に、掘方にロームブロックを厚さ0.1m程敷きならして整地、版築したものと推測された。



凡例  0.5kg以下  約1kg  2kg以上  20kg以上

第16图 稻荷山古墳出土石材分布图

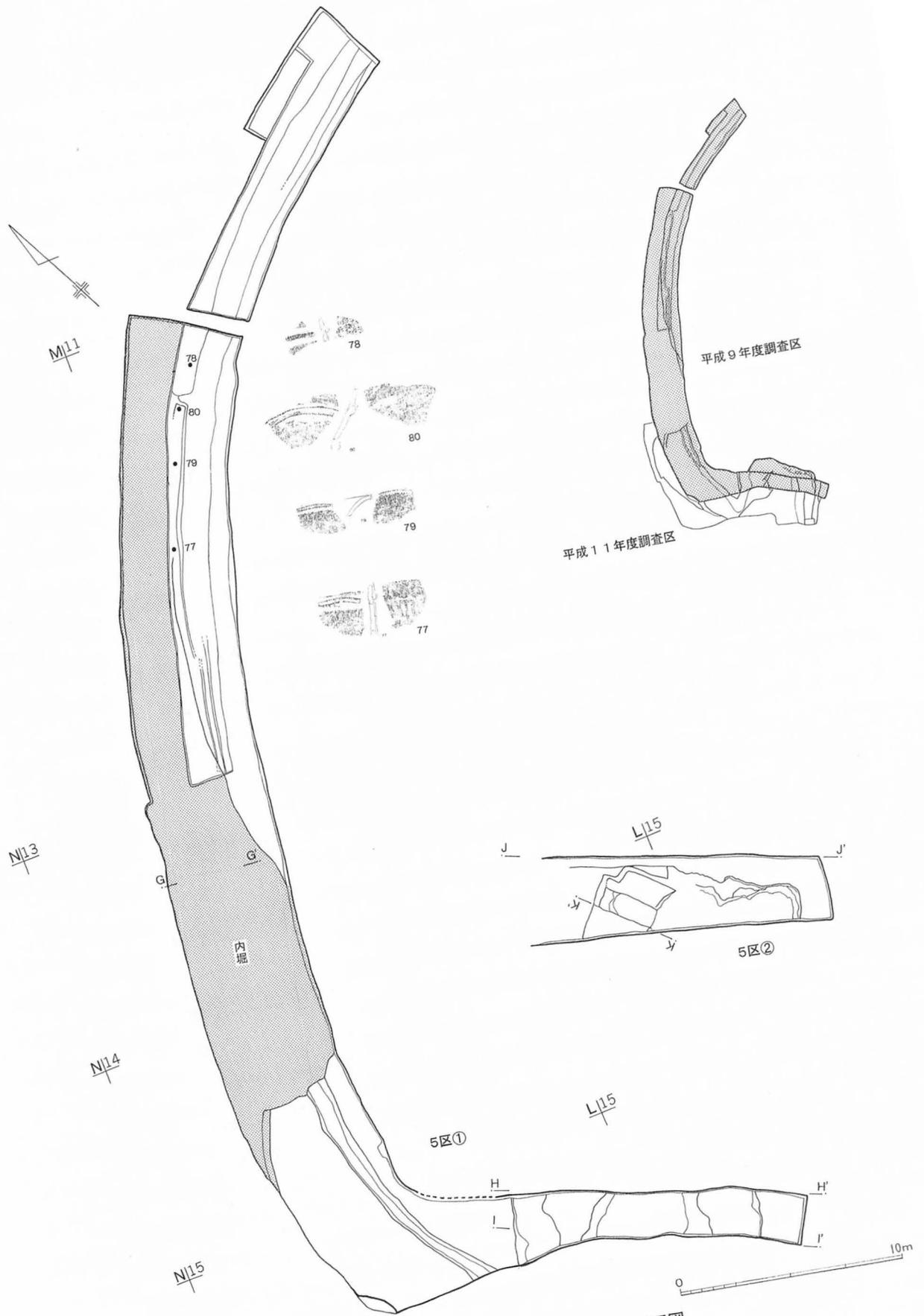
## 後円部墳裾部付近の遺物出土状態（第19図）

後円部の墳裾に接する内堀内で造出し部の北側となる位置では、残存状態の良い埴輪がまとまって出土した。接合関係図を作製して検討した結果、実測個体は10個体で、このうち円筒埴輪が8個体、朝顔形円筒埴輪が1個体、形象埴輪が1個体であった。分類に従って記述すると、北よりの2.4m程の範囲から5条凸帯となるB2類の円筒埴輪（27・28・32）が3個体検出されており、このうち27はほぼ完形に復原できたので、墳丘上部からの転落ではなく、墳裾に設置されていたものである可能性が高いと判断された。また、B2類に混在して6条凸帯と推定されるC1類（29）と3条凸帯のA4類（33）が1個体ずつ検出された。これらのうち、A類の33・B類の27・32は垂直分布では堀底からほとんど浮いていない破片を含んでおり、高いレベルの破片は0.2ないし0.4m浮いた状態であった。古墳築造後、比較的早い段階に崩落した個体であったと推定できる。

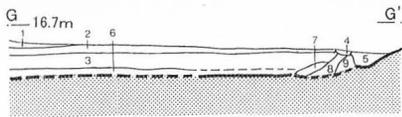
いっぽう、造出しの北側2.8m以内にも埴輪の集中があり、A4類が2個体、5条凸帯と推定されるA3類が1個体、C2類の朝顔形円筒埴輪が1個体、そして巫女の可能性がある人物埴輪胴部がまとまって検出された。これらのうち、巫女は最も墳裾から隔たった位置から出土した。造出しのエレベーションラインB-B'に投影した垂直分布では、巫女が最もレベルが低く、円筒埴輪は墳丘に近いものほど高いレベルに位置しており、A・B・Cの3類が混在している状態にあった。ただしA3類の35は総体に低いレベルに分布していた。これらの原位置は墳丘または造出しの上部と推定して誤りないが、3条凸帯のA4類については造出しに限定して設置されていた可能性を考えてみたい。しかしながら、巫女埴輪は墳頂部から転落した可能性の方が高いであろう。その根拠として頭部や腕などが胴部の付近から検出されなかったこと、造出しの周囲からは他の形象埴輪がほとんど出土していないことを挙げておく。

## 造出し部とくびれ部

造出し部は墳丘から突出する斜面として現存している。今回、限られた範囲ながら、はじめて調査の手が及んだ。調査したのは突出部の中間部で先端部を含んでいない。幅は14.25mを測る。中央部は弧を描きながら南北に走る幅1.0m前後の溝に切り込まれていた。前述の根切り溝に繋がるものと推測される。くびれ部は5区②地点で検出された。ほぼ直角をなして前方部と後円部とが連結されていた。これは後述するように、くびれ部に付加された盛土を除去した掘方部分に相当する。造出しからくびれ部付近にかけて設けた土層断面H-H'の検討では、表面の2層は厚さ1.0mにおよぶ園路路盤層で、礫主体の客土であった。その下に接して浅間A軽石を含む黄灰色土があり、さらに下が黒褐色から暗褐色に漸移する内堀の覆土であった。造出しからの土砂の流入が少ないのに対して、前方部側からは様々な色のロームブロックを主体とする暗褐色土が大量に流入しており、盛土の崩落が早かったことがわかる。堀底は平坦で標高15.64mを測る。造出しは38度の勾配で立ち上がり、肩部には暗褐色土が盛土されていた（少し内側のK-K'土層断面によれば、暗褐色土2層と黒褐色土の合計3層の盛土が確認された）。上面には削平され、浅間A軽石を含む層が乗っている。現存する造出し上面は中央よりに向かって高くなっており、セクションポイント付近では標高16.7mを測る。堀底との比高差は約1.0mとなる。前方部の墳裾は37度の勾配で直線的に立ち上がった後に、幅3.0mの平坦面を持っていた。前方部の墳丘基壇部に相当しよう。外側に向かう4



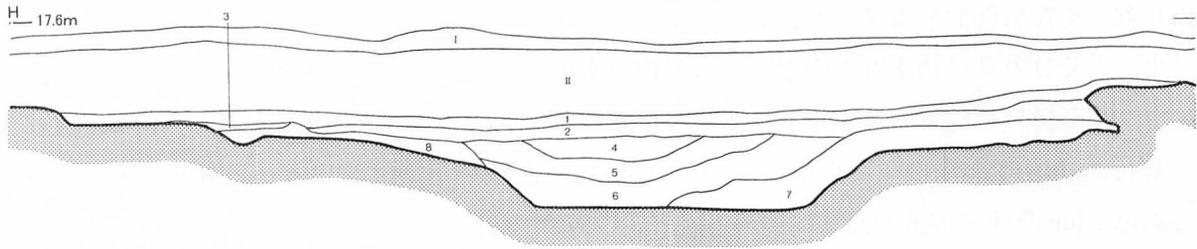
第17図 平成9年度5区平面図



9 G-G'土層説明

- 1 灰褐色土
- 2 黄灰色土
- 3 極暗褐色土
- 4 灰色土
- 5 灰色土
- 6 暗褐色ローム
- 7 褐色土
- 8 黒褐色土

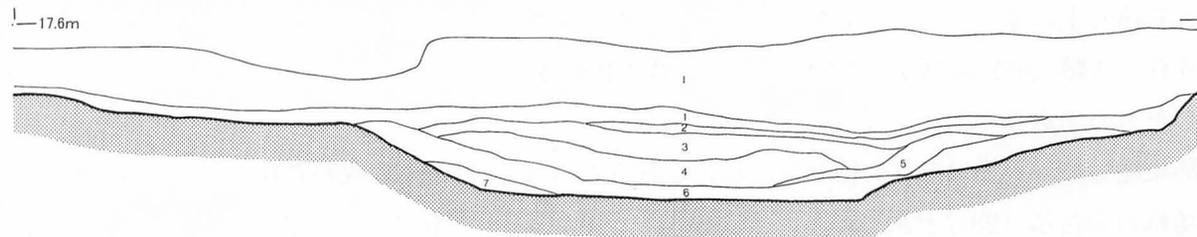
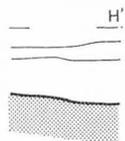
浅間軽石を多量に含む。  
植物遺存体を含む。3層のフラックに入り込む土。  
ロームブロック、黒褐色土を多量に含む。  
5より青い。  
やや青みがかる。  
ロームブロック主体。ブロックが入る。ポロポロと塊とれる。貼り床風上面は土間様になっていた。  
ローム粒子少量、黒褐色粒子を含む。暗褐色土がベース。  
ローム粒子多量、黒褐色粒子を含む。  
黒褐色土、黄褐色ローム粒子を含む。硬質。



9 H-H'土層説明

- I 客土
- II 客土
- 1 黄灰色土
- 2 黄灰色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土

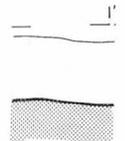
道路工事後に埋まった土。ローム粒子含む褐色土。しまり欠く。  
道路基礎の為の礫層。  
浅間軽石層かに入る。植物遺存体あり。  
層下部に浅間軽石を、上位に黒色粒子を多量に含む。  
しまりが極めて強い。ロームブロック、灰色土のしみ、褐色土粒子が混ざり合う。  
層上位に黒褐色土ブロックを含む。またローム粒子を中量含む。  
4に似るがしまりは弱い。ポソポソで粒子粗い。ローム粒子を多量に含む。  
7層ほどブロックは含まない。  
様々な色のロームブロック主体。ポロポロしていてしまり欠く。



9 I-I'土層説明

- I 客土
- 1 オリーブ灰色土~黄灰色土
- 2 灰色土
- 3 黒褐色土
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土

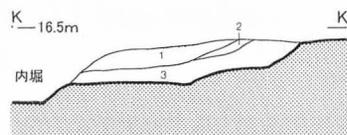
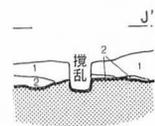
道路基礎の為の礫層。  
浅間軽石火山灰を中量、ローム粒子を少量、黒色粒子を微量に含む。  
火山灰を部分的に含む。ローム粒子を少量、黒色粒子を微量に含む。  
火山灰は含まない。ローム粒子を中量含む。  
火山灰は含まない。ローム粒子を少量、炭化物を微量に含む。  
火山灰は含まない。ローム粒子を中量、黒色粒子を少量含む。  
火山灰は含まない。ローム粒子を中量、黒色粒子を微量に含む。  
ブロック土の層。しまり弱。各ロームブロック混ざる。



9 J-J'土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土

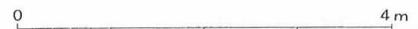
火山灰全く入らない。ローム粒子を中量含む。しまる。  
橙色土を中量、暗褐色土を少量含む。しまりやや弱。



9 K-K'土層説明

- 1 褐色土
- 2 褐色土
- 3 黒褐色土

ロームブロック、同粒子がラミナ状に入る。きわめて硬質。  
ローム粒子を多量に含む。しまり欠く。  
ロームブロック、BBブロック主体。間隔があり、しまり欠く。



第18図 平成9年度土層断面図(4)

度の緩傾斜面をなしており、中央部の標高は16.3mを測る。原位置に留まる埴輪列や埴輪の設置痕はなかった。その内側に墳丘が立ち上がるが、崩落していて保存状態は良くなかった。

ところで、この土層断面より少し外側に設けた土層断面I-I'においては内堀の覆土下層となる厚さ0.7mの3層分では火山灰を確認できなかった。

#### 造出し部・くびれ部間の遺物出土状態（第20図）

造出しとくびれ部に挟まれた内堀内には遺物が密集していた。とくに須恵器が注目された。坏身(3)は造出し付け根付近の墳丘上で検出された破片と内堀内出土の破片が接合することが確認された。脚付短頸壺は内堀の底から0.25ないし0.7m浮いた状態で横倒しになって検出された。また、その蓋は1.0m西側で堀底から0.7m浮いた状態で検出された。これらは1と2が完形、3が50%と残存率が高いので、墳頂部から転落した可能性はほとんどなく、造出しの基部に置かれていたものが、滑り落ちたとみて誤りないであろう。このほか土師器片もあり、位置を×で表示しておいた。

いっぽう、埴輪ではA4類の小型朝顔形円筒埴輪の頸部(26)と円筒部(25)が内堀の底から0.5ないし0.8m浮いた状態で出土している。両者は恐らく同一個体である。25の1破片は造出しの付け根付近の墳丘上から出土していて、これが内堀出土の破片群と接合関係を有しているので、原位置は造出し上にあつて、その埴輪列に属していた可能性が大きい。円筒埴輪の破片ではB種ヨコハケを伴うA類(95)のほか、A類・B類の破片が内堀から検出されている。これらは墳丘上から転落したものであろう。

形象埴輪では人物の二又の被り物と推定されるもの(3)が内堀の底から0.1m浮いた状態で、形象埴輪の器台部(28)と馬形埴輪の脚部(27)が0.7m浮いた状態で検出された。また、27の1破片は造出しの付け根付近の墳丘上から出土している。これらは人物や馬形埴輪のごく一部にすぎない部分破片であり、他の部位が発見されていないことから、造出し上よりも墳頂部から転落した可能性の方が高いように思われた。

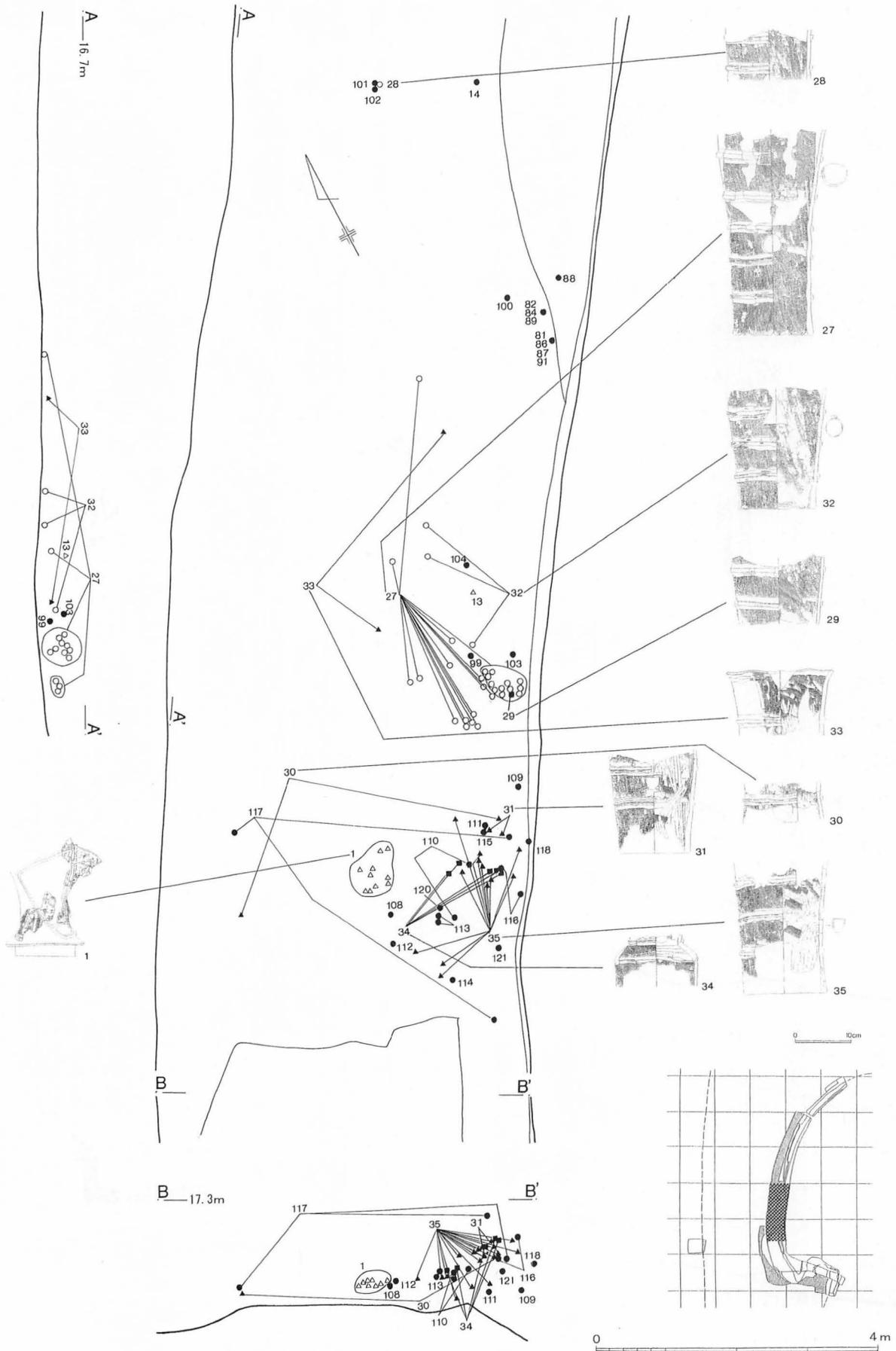
## 第2節 平成10年度の調査

### 1 第1区（第21・22図）

1区は右側のくびれ部を中心とする調査区で、昭和48年度に実施した第2次調査で一度調査をおこなっている。『埼玉稲荷山古墳』報告書には「表土を除くと基盤ローム面が認められ、内濠の立ち上がりが検出された。前方部と後円部の連結部は、きつい角度をもたず緩やかに結ぶ。」また「トレンチは湧水のため内濠底面まで掘り下げること困難をきわめ、第2トレンチで一部濠底まで掘り下げられたにとどまった。基盤ローム面から濠底までの深さは約1.4mである。」と報告されている。しかし、当時の測量方法が平板測量であり、今回の目的である復原工事の設計図に用いる場合に一定の誤差が生じると判断して、保存整備委員会は全面掘り下げ調査を行うことに決した。

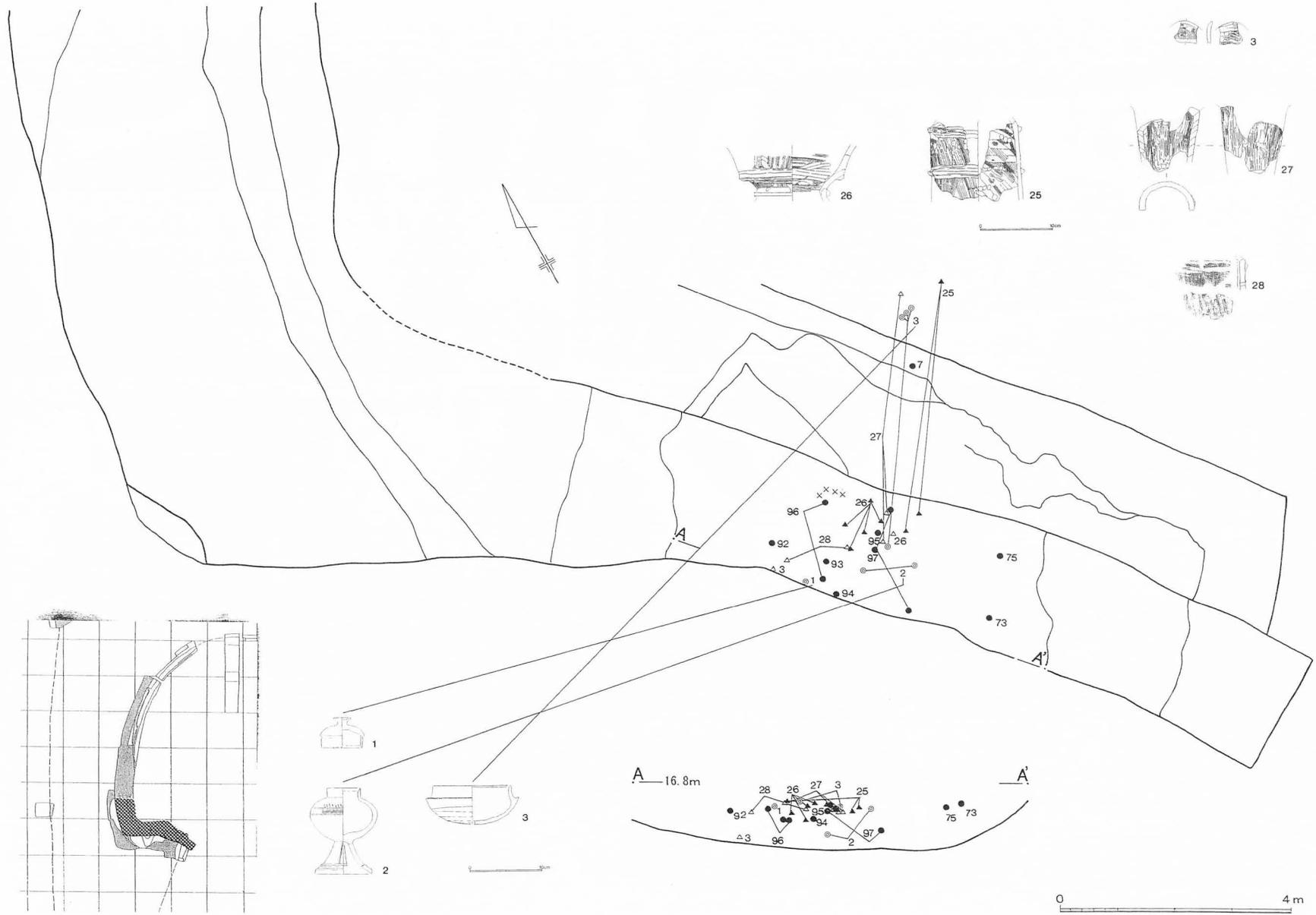
#### 墳丘部

調査の結果、旧報告書に記載されているように緩やかなカーブを描くくびれ部が検出された。しかし、精査の結果、カーブを描く部分はロームを主体とした盛土整形部分であつて、その内側に当初の掘方プランが明瞭に検出された。それは前方部から直線的に伸びていて、後円部の円弧と直接



第19図 平成9年度5区①遺物接合関係図

第20图 平成9年度5区遺物接合関係図



結合するもので、結合部は97度をなしてした。なお、調査区は昭和12年の土採りで削平を受けた部分であり、墳丘はすでに失われていた。したがって、内側のテラス状を呈する部分は墳丘の基壇部そのものではない。

調査区北端部には墳丘盛土の断面が露出する唯一の場所があった。A-A'断面図によれば、標高16.88mのローム基盤層の上に、暗黒褐色土が2層乗っており、これが旧表土層とみられる。上面の標高は17.16mであり、平成9年度第2区で確認された旧表土上面の標高17.24mと近い。この上部には1層ごとに色調の異なる全7層の盛土層があり、いずれも堅く叩き占められていた。

くびれ部の掘り方はC-C'土層断面では底面が平坦で、標高16.28mを測り、53度の勾配で直線的に立ち上がっていた。盛土整形土は3層から成り、掘方の下場から斜めに押しつける状態で黒褐色土、ロームブロックを主体とする黄茶褐色土、同じくロームブロックを主体とする黄褐色土の順で盛土と叩き締めが同時に行われていたことが確認できた。整形面は崩落が認められたが、復原される勾配は35度前後となろう。

### 内堀部

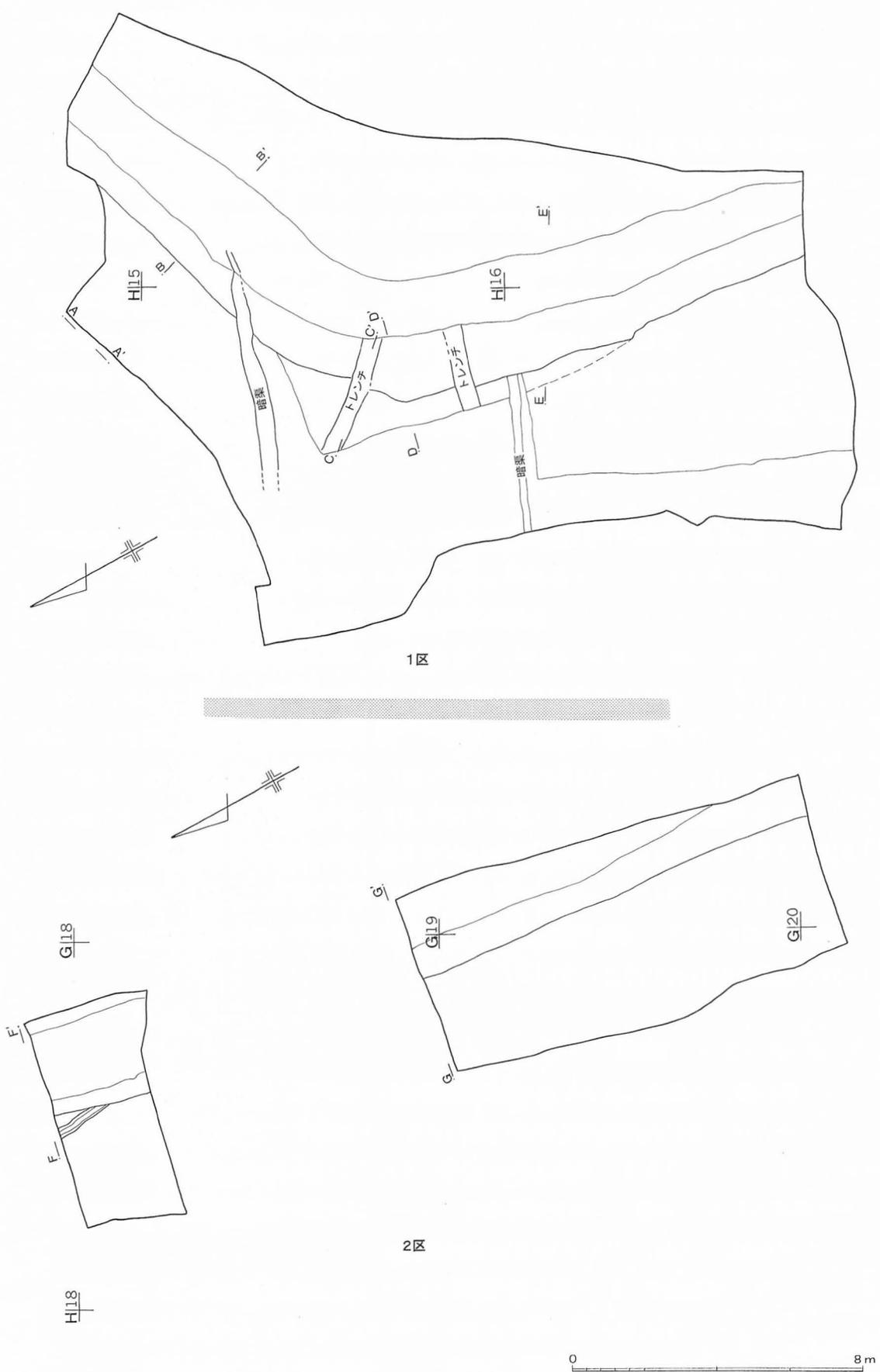
くびれ部から6.4m前方部側の地点で、墳丘の立ち上がり部から内堀にわたる土層断面図E-E'を作製した。内堀の覆土の約半分を占める上層は昭和48年度の発掘調査埋戻し土であり、湧水によって掘り下げができなかったという旧報告書の状況を物語っていた。堀底は立ち上がり部が最も深く、標高15.46mを測り、外側に向かって上り勾配となっていた。立ち上がり部はくびれ部に曲線を造成する目的で付加された盛土整形土であり、25度の勾配となっているが、土層ラインが斜行しているため、実際の勾配は30度ほどになる。盛土整形土は7層に分層された。黒褐色土とロームブロックを主体とした土を交互に積み上げており、水平積みを行った後に、表面付近では斜位に塗りつけて叩き締めを行っている。掘方の立ち上がり部は直線的ではなく、下半部が緩やかで上部が急激に立ち上がっていた。堀底の覆土はすべて墳丘側から流入した状態で斜行して堆積していた。ローム土を多量に含むことから、墳丘の崩落土と判断できる。内堀は一度調査済みであるために、遺物の出土は少なく、埴輪の合計重量は3.46kgにすぎなかった。特記事項として、2層中から長径0.24mの扁平な石材が出土している。

## 2 第2区 (第21・22図)

2区は前方部右側の中間部に設定した2箇所の調査区から成る。北側を①地点、南側を②地点とする。くびれ部と前方部の右側隅角を結ぶ内堀の立ち上がり部ラインが直線をなすかどうかを確認する目的で設定したものである。墳丘は昭和12年の土採りで完全に失われている。

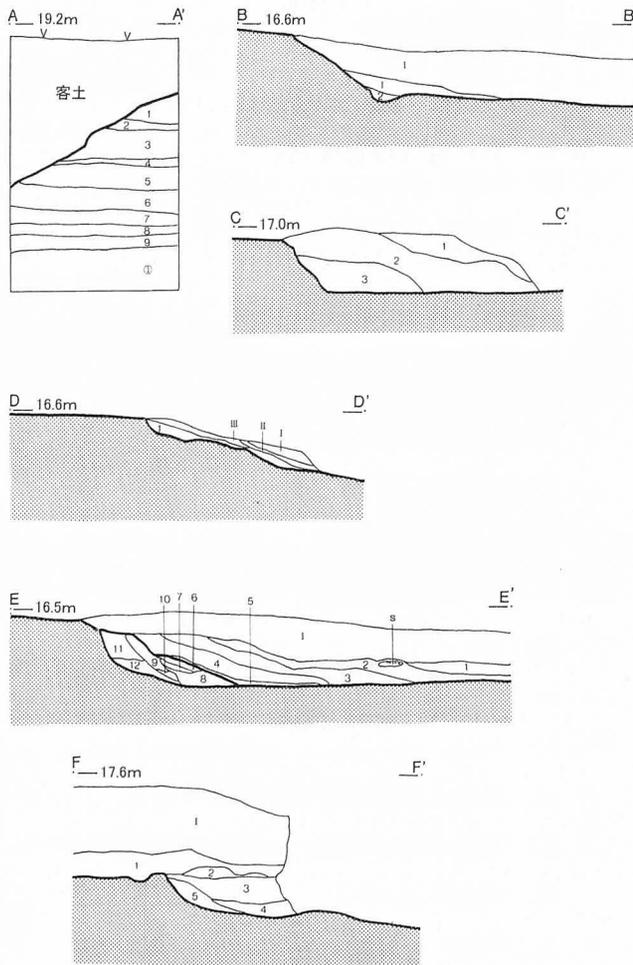
掘り下げ調査の結果、内堀の立ち上がり部ラインがくびれ部の延長線上に直線的に検出された。①地点での延長距離は2.64m、②地点では11.44mを測る。

①地点に設けた土層断面F-F'では公園整備に伴う厚さ0.7mの造成土の下には昭和12年の前方部削平以降に設けられた水田耕作層(厚さ0.3m)が存在していた。この下には内堀の立ち上がり部が残存していた。立ち上がり方は直線的ではなく、下部が緩やかで上部が急激に立ち上がっていた。覆土はロームブロックを多量に含む墳丘の崩落土が最初に流入し、次に茶褐色土が水平堆積し



第21図 平成10年度1・2区平面図

平成10年度稲荷山古墳土層断面図



10 A-A' 土層説明

- 1 暗褐色土 白色微粒子を少量、炭化粒子を僅かに含む。しまり極めて強。
- 2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり極めて強。
- 3 にぶい褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり極めて強。
- 4 褐色土 ロームブロックを多量、同粒子を少量、白色微粒子を僅かに含む。しまり極めて強。
- 5 灰褐色土 茶褐色粒子、ローム粒子を少量含む。しまり強。
- 6 褐色土 白色微粒子を多く含む。しまり強。
- 7 にぶい赤褐色土 白色微粒子を多量に含む。ローム粒子を少量含む。
- 8 暗黒褐色土 白色微粒子を少量含む。しまり強。
- 9 暗黒褐色土 白色微粒子を少量、赤褐色粒子を僅かに含む。しまり強。
- ⑩ 黄褐色土 ローム

10 B-B' 土層説明

- I 客土 昭和48年度調査埋戻し土。暗灰褐色の粘土。
- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量、同ブロックを少量含む。粘性あり、緻密。
- 2 暗黒灰色粘土 ローム粒子を少量含む。粘性強。やわらかい。

10 C-C' 土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロック、BBブロックを主体とし、粘性少なく堅緻。この上面が扇形面の面。
- 2 黄茶褐色土 ロームブロック、ローム粒子を多量、BBブロックを少量含む。ローム粒子、黒色土を僅かに含む。粘性弱。しまり強。
- 3 黒褐色土 ローム粒子を少量、同ブロックを僅かに含む。黒色土を少量含む。粘性弱。しまり強。

10 D-D' 土層説明

- I 客土 昭和48年度調査埋戻し土。暗茶褐色を呈する。
- II 客土 昭和48年度調査埋戻し土。黄褐色土を呈する。
- III 客土 昭和48年度調査埋戻し土。黒褐色土を呈する。
- 1 茶褐色土 ローム粒子、同ブロックを多量に含む。粘性弱。しまり強。

10 E-E' 土層説明

- I 客土 昭和48年度調査埋戻し土。暗灰褐色の粘土。
- 1 暗黄灰色土 黒色土を少量含む。粘性強。やわらかい。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロックをまばらに含み、同粒子を多量に含む。粘性なく堅緻。
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量、同ブロックを僅かに含む。粘性なく堅緻。
- 4 暗茶褐色土 基本的に3に同じだが、ローム土が層状に堆積する。
- 5 灰褐色土 ロームブロックを僅かに含む。粘性強。やわらかい。
- 6 黄褐色土 ローム土を主体とし、黒色土粒子を少量含む。この層の上面が整形した堀の床面となっている。堅緻。
- 7 暗茶褐色土 茶褐色土にローム粒子を多量に含む。粘性なく堅緻。
- 8 黄褐色土 ロームブロック(黄褐色ローム)とブラックバンドロームを主体に、黒褐色土を若干含む。しまり強。整形の為に埋戻した土と思われこの上面が堀底面となる。
- 9 黒褐色土 ロームブロック、同粒子を少量含む。粘性弱。堅緻。
- 10 黒褐色土 9層を主体とし、ローム粒子を多量に含む。
- 11 黄茶褐色土 ロームブロック、ローム粒子を多量、BBブロックを少量含む。黒色土を僅かに含む。粘性弱。しまり強。
- 12 黒褐色土 ローム粒子を少量、同ブロックを僅かに含む。黒色土を少量含む。僅かに粘性がありよくしまる。

10 F-F' 土層説明

- I 客土
- 1 暗茶褐色土 水田耕作層(昭和13以降)。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性弱。しまり強、緻密。
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量に含む。やや粘性があり、緻密でよくしまる。
- 4 暗黄褐色土 茶褐色土(3層)を主体にロームブロックを多量に含む。やや粘性があり、よくしまる。
- 5 黄褐色土 4層を基本にロームブロックを多量に含む。やや粘性があり、よくしまる。

10 G-G' 土層説明

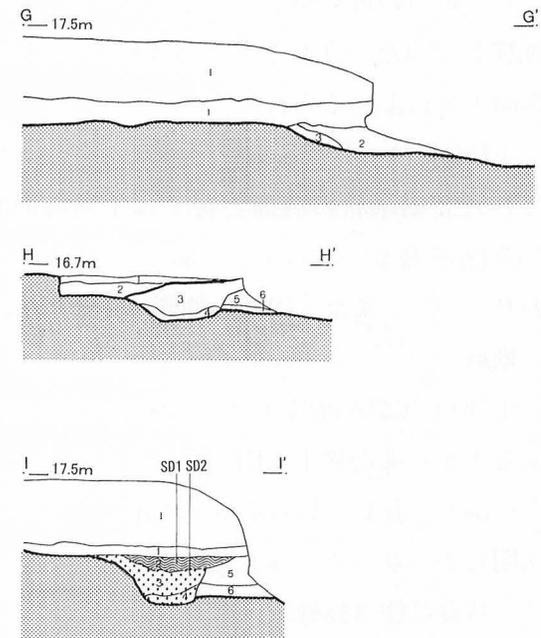
- I 客土 昭和51年の公園整備による客土。
- 1 灰褐色粘土 天明の火山灰を多く含む。大半が赤褐色化し床土となる。昭和13年以降の水田層と思われる。
- 2 黄褐色土 ロームブロック、茶褐色ブロックを多量に含む。しまり強、緻密。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子、茶褐色粒子を多量に含む。しまり強、緻密。

10 H-H' 土層説明

- 1 暗青灰色土 ローム粒子を少量、浅間軽石を多量に含む。粘性なく堅緻。
- 2 暗青灰色土 基本的に1と同じで、ロームブロックを少量含む。
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量に含み、浅間軽石を若干含む。粘性弱。堅緻。
- 4 暗茶褐色土 ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり欠く。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性があり堅緻。堀覆土。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを主体に茶褐色土を少量含む。粘性弱、堅緻。堀掘り方覆土。

10 I-I' 土層説明

- I 客土
- 1 暗青灰色土 浅間軽石を含む水田層。
- 2 暗青灰色土 ローム粒子を少量、浅間軽石を多量に含む。粘性なく堅緻。SD-1
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量に含み、浅間軽石を若干含む。粘性弱、堅緻。SD-2
- 4 暗茶褐色土 ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり欠く。SD-2
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性があり堅緻。堀覆土。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを主体に茶褐色土を少量含む。粘性弱、堅緻。堀掘り方覆土。



第22図 平成10年度土層断面図(1)

た状態を示していた。堀底のレベルは16.16mを測る。なお、内堀の残存幅はわずか1.4mであり、外側は復原した堀によって破壊されていた。

②地点に設けた土層断面G-G'でも上層は①地点と同様であった。この下には内堀の立ち上がり部下場から内堀の底部がわずかに残存していた。立ち上がり方は現存する範囲では緩やかであった。覆土はロームブロックを多量に含む墳丘の崩落土が最初に流入した状態を示していた。堀底のレベルは16.16mを測り、①地点と一致していた。内堀の残存幅は1.8mであり、外側は復原した堀によって破壊されていた。

### 3 第3区（第23・24図）

3区は前方部前端部から左側面部と両隅角部を確認するために設定した調査区である。右側隅角部の調査区を②地点、それ以外を①地点と区別する。

#### ②地点

②地点では隅角部が昭和48年度の調査でいったん確認されていたが、今回の調査では確認できなかった。昭和51年度の内堀復原工事の際に消失したとみられる。隅角の内側の前方部墳丘削平面を切り込む状態で2条の溝状遺構が検出された。このうちSD2は前方部前面となる内堀の立ち上がり部を破壊して切り込んでおり、溝の方向も前方部前端線に沿っていた。このことから少なくとも前方部の残存していた昭和12年以前の溝となる。これに対してSD1はSD2の東端より4.0m内側から湾曲しながら西側に進み、調査区の西端ではSD2の覆土上層を切り込んでいることが土層断面で確認できた。このSD1も前方部の土採り後に開墾された水田によって削平されていた。

土層断面H-H'ではSD2に内堀の立ち上がり部が切り込まれ、わずかに堀底部分の覆土が残存していた。底面は緩斜面をなし、ロームブロックを主体とする黄褐色土が堅く締まった状態で検出され、掘方の埋め戻し土と推定された。上面の標高は16.22mを測る。この直上には暗黄褐色土が堆積していた。立ち上がり部はSD2と完全に重複していて、失われていた。また、内堀の外側は復原工事によって失われていた。

土層断面I-I'でもSD2に内堀の立ち上がり部が切り込まれ、わずかに堀底部分の覆土が残存していた。貼床状の底面と覆土は土層断面H-H'と共通していた。底面は平坦で上面の標高は16.30mを測る。立ち上がり部は下幅0.52m・現存する深さ0.5mのSD2と完全に重複していて、失われていた。また、内堀の外側は復原工事によって失われていた。

#### ①地点

①地点では昭和51年度に造成した整地層を重機で取り除いた上で、前方部前面と左側面の内堀立ち上がり部の検出を図った。その結果、復原した内堀の立ち上がり部より2mほど内側に立ち上がり部が残存している箇所と水田として開墾されてしまった箇所とがまだら状に分布していることが明らかとなった。また、前方部前端の立ち上がり部に重複して溝（SD2・3）が掘り込まれており、残存状態は良好とはいえなかった。

前方部左側面となる①地点北端ではJ-J'土層断面で浅間A軽石を含む土層（水田の可能性が高い）の下に内堀とその立ち上がり部が2.68mの幅で保存されていた。覆土にはロームブロックを多

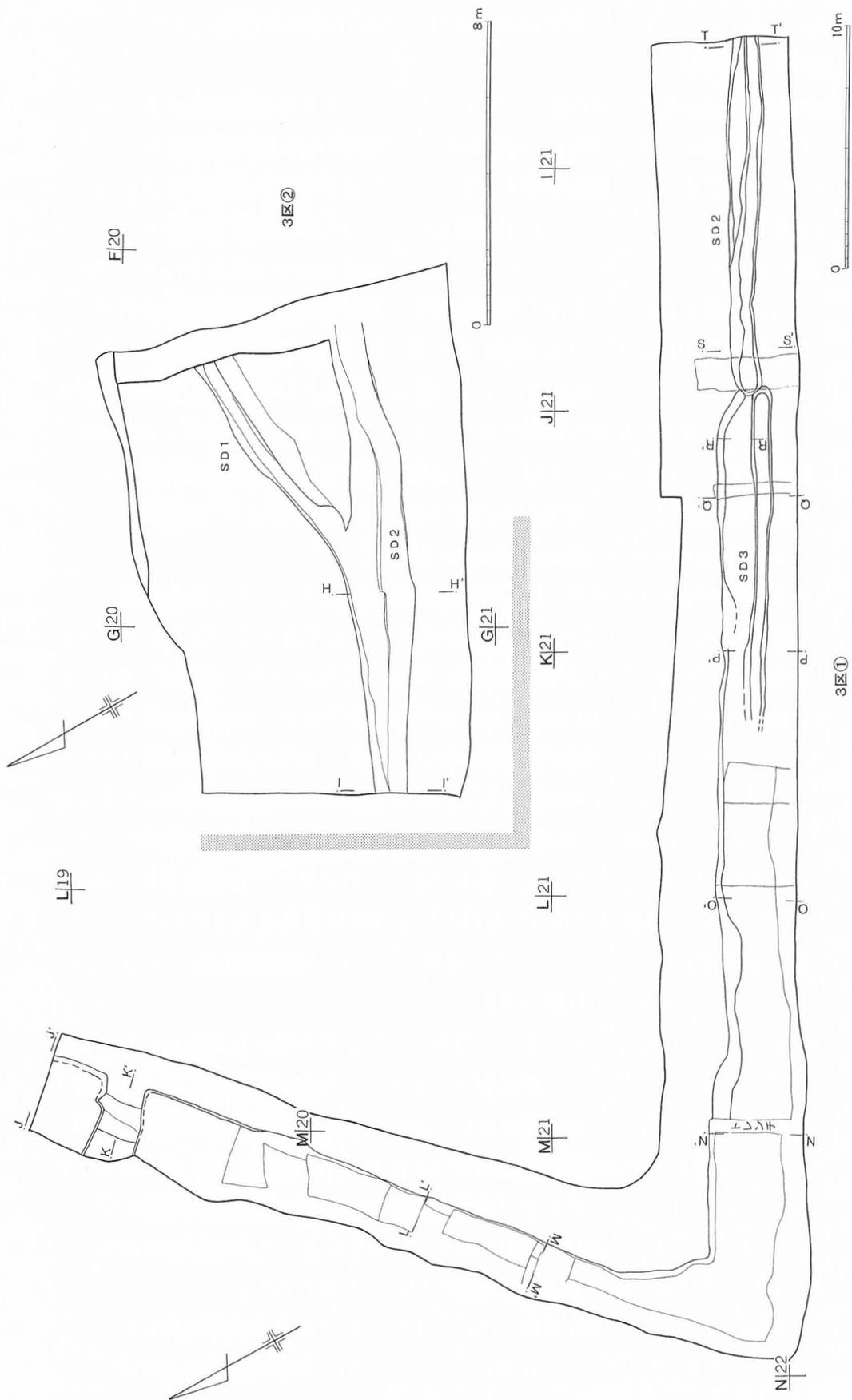
量に含み、墳丘崩落土とみられた。堀底はほぼ平坦で標高16.08mを図る。立ち上がり部は57度の急勾配で直線的に立ち上がっていた。

J-J' 土層断面から2.5m前方には内堀の立ち上がりラインから外側に突出する土橋状の掘り残しが残存していた。幅1.75m、長さ1.63mの規模を有し、先端部は24度の斜面を成していた。古墳築造時の作業用スロープであった可能性が考えられる。この突出部から隅角部に至る間の内堀部分にはかつて水田が営まれていたことがL-L' 土層断面とM-M' 土層断面で確認された。両地点とも水田の畦が内堀の立ち上がり部と一致しており、深さも堀底とほぼ一致していて、内堀の覆土は残されていなかった。遺物がないので水田の時期を特定できないが、内堀の痕跡が残存していた時期に開墾されたものと推測される。この水田跡は前方部の形に添って調査区東端まで存在していたことが、N-N' からT-T' に至る土層断面によって確認される。N-N' とO-O' 土層断面においては浅間A軽石を多量に含み、緻密な暗青灰色土であることが判明しており、天明3年以前に開墾されていた可能性が考えられた。この水田の下には墳丘崩壊土とみられる土に覆われた内堀の底面と立ち上がり部が保存されていた。堀底は外勾配を持っており、O-O' 土層断面においては、立ち上がり部から2.8m離れた最深部の標高は15.90mを測る。

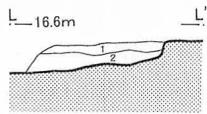
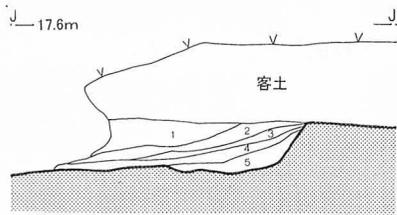
前方部前線の両隅角を結ぶ中点付近には2本の溝の起点があった。そこから左側にはSD3が、右側にはSD2が内堀の立ち上がり部ラインをかすめるようにして走っていた。P-P' 土層断面においてはSD3はかろうじて内堀の立ち上がり部を切り込んでいなかった。SD3は下幅0.56m、中位には肩を持ち幅0.8mを測り、再び壁面の立ち上がる断面形状であり、箱葉研に類する。現存する深さは0.4mであった。また、覆土は緻密な暗青灰色土であり、その上位にはA軽石を含む水田層が乗っていた。したがって、SD3は近世中期より古いことになろう。内堀底はやはり外勾配を持っており、立ち上がり部から3.2m離れた最深部の標高は15.82mを測る。また、内堀の立ち上がり部はここでは階段状を成して立ち上がっていた。覆土にはロームブロックを多量に含む墳丘崩落土の流入が認められた。Q-Q' 土層断面においてもおおむね同様な状況を示していたが、立ち上がり部は56度の急勾配で直線的に立ち上がっていた。東隣のR-R' 土層断面においてはSD3の下部から近世陶器が出土しており、前述の年代観の傍証となった。

S-S' 土層断面においてはSD2がかろうじて内堀の立ち上がり部からそれていて、内堀の底部と立ち上がり部が保存されていた。SD2は断面形がV字形で、現存する深さは0.16mを測る。覆土は暗茶褐色土で緻密であった。上部にはA軽石を含む水田土層が乗っていた。内堀は底部が外勾配で、立ち上がり部から2.2m離れた最深部の標高は15.74mを測る。覆土としてローム粒子を多量に含む初期の墳丘崩落土が流入していた。立ち上がり部は高低差がわずかであり、勾配の測定は正確を期せない。調査区東端のT-T' 土層断面においては、内堀立ち上がり部をSD2が破壊しており、その下部の土層も灰色を帯びる土壌で水田層の可能性が高いと見られた。

以上のことを総括すると、前方部の周囲には近世中期以前の水田や水路が営まれていて、内堀の破壊時期の古いことが判明した。また、内堀の立ち上がり部は現存する部分と破壊されている部分とがあるので、現存部を選定してそれらを結んだ線を推定線とするしかないことも認識された。前方部の左隅角も若干水田によって浸食されている可能性が考えられる。

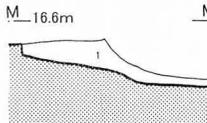
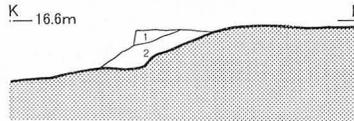


第23图 平成10年度3区平面图



10 J-J'土層説明

- 1 茶褐色土 ローム粒子、黒色粒子を少量含む。白色微粒子(浅間軽石)を全体に含む。粘性なし。しまり強。
- 2 赤褐色土 1層を基本にロームブロックを多量に含む。粘性なし。しまり強。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを主体に茶褐色土をまばらに含む。粘性なし。しまり強。
- 4 灰褐色土 ロームブロック、灰色粘土ブロックを多量に含む。粘性弱、軟質。
- 5 茶褐色土 ブラックバンドブロックを主体に、灰白色土を少量含む。粘性弱、軟質。

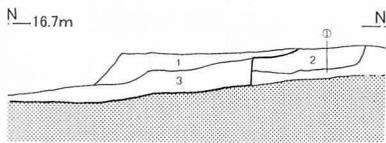


10 K-K'土層説明

- 1 茶褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性なし。しまり強。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロックを少量、同粒子を僅かに含む。粘性なし。しまり強。

10 L-L'土層説明

- 1 暗青灰色土 水田耕作土。
- 2 灰褐色土 ロームブロック多量、同粒子少量含む。青灰色土(耕作土)をまばらに含む。粘性弱、しまり強。

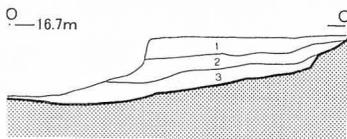


10 M-M'土層説明

- 1 灰褐色土 ロームブロック多量、同粒子少量含む。青灰色土(耕作土)をまばらに含む。粘性弱、しまり強。

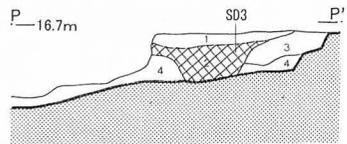
10 N-N'土層説明

- 1 暗青灰色土 白色粒子(浅間軽石)を多量に含む。粘性弱、緻密。水田耕作土。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子、ブラックバンド粒子を多量に含む粘性弱、しまり強。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性弱、しまり強。
- ① ブラックバンドローム。



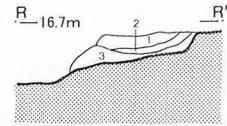
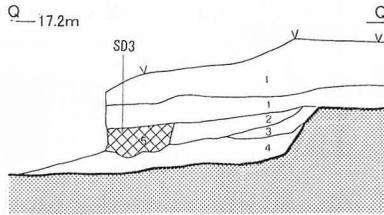
10 O-O'土層説明

- 1 暗青灰色土 水田耕作土。白色粒子(浅間軽石)を多量に含む。粘性弱、緻密。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子、ブラックバンド粒子を多量に含む。粘性弱、堅くしまる。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、同ブロックを少量含む。粘性弱、堅くしまる。



10 P-P'土層説明

- 1 暗青灰色土 水田耕作土。白色粒子(浅間軽石)を多量に含む。粘性弱、緻密。
- 2 暗青灰色土 1層を基本にローム粒子を若干含む。粘性弱、緻密。SD-3覆土。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子、ブラックバンド粒子を多量に含む。粘性弱、しまり強。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性弱、しまり強。

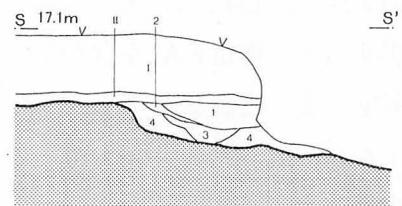


10 Q-Q'土層説明

- I 客土 (昭和51年整備事業か)
- 1 暗茶褐色土 浅間軽石を多量に含む。(昭和13年以前水田層、耕作土)
- 2 暗茶褐色土 ロームブロック、浅間軽石を少量含む。(昭和13年以前水田層、耕作土)
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子を多量に含む。粘性なく堅くしまる。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック、同粒子を多量に含む。粘性弱、堅くしまる。
- 5 暗青灰色土 SD-3(根切溝か)水田耕作土を主体とし、ローム粒子を少量含む。

10 R-R'土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性なく堅く緻密。
- 2 黄灰色土 ロームブロックを基本に、灰褐色ブロックを多量に含む。粘性弱、堅く緻密。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色ブロックを基本に、ブラックバンドブロックを少量含む。粘性なく、堅く緻密。  
※覆土中から近世陶器が出土することから、堀の掘り方でなく耕作によるものである可能性が高い。

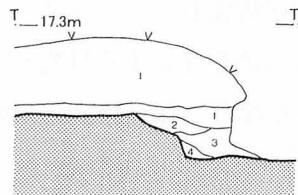


10 S-S'土層説明

- I 客土
- II 客土 (昭和51年整備事業か)
- 1 暗茶褐色土 ロームブロックを少量含む。浅間軽石を少量含む。(昭和13年以前水田層、耕作土)
- 2 茶褐色土 3層を基本とし、ローム粒子を少量、白色微粒子を僅かに含む。粘性弱、しまり強。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性弱、緻密。SD-2覆土。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量、同少量含む。粘性なし。しまり強。

10 T-T'土層説明

- I 客土
- 1 暗青灰色土 水田耕作土。浅間軽石を含む。
- 2 暗赤褐色土 ローム粒子を少量含む、暗青灰色土をまばらに含む。茶褐色土を多量に含む。粘性弱、緻密。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒子を少量含む。粘性弱、しまり強。
- 4 暗灰褐色土 基本的に3に同じだが、赤褐色ブロックを少量含む。



第24図 平成10年度土層断面図(2)

なお、出土遺物として埴輪片が①地点で合計63.42kg、②地点で3.80kg出土した。調査面積に比して量が少なかったのは、内堀覆土の残存が悪かったためである。

### 3節 平成11年度の調査

#### 1 第1区 (第25・26図)

1区は前方部右隅角に対応する中堤と外堀の隅角部の検出を目的として設定した。調査区の幅は8.75m、長さは53.5mで、隅角部付近では拡張を行った。掘り下げ調査の結果、内堀外側隅角部、中堤外側隅角部と外堀が検出された。

#### 内堀

ほぼ直角に屈曲する隅角部が検出された。A-A'土層断面によれば、公園造成土の下には旧水路を挟む両側に水田耕作土層があり、その下部に内堀の覆土が残存していた。堀底はほぼ平坦で、標高は16.2mを測る。立ち上がり部は基盤層のブラックバンドを切り込んで、緩やかな勾配で立ち上がっていた。上場の標高は16.60mである。覆土は中堤側から斜めに地山崩壊土の黄褐色土が流れ込み、次に暗褐色土、さらに黒色土が堆積して腐食土化していった過程が窺われた。その上位の暗褐色土層(3層)中には白色粘土ブロックを含んでおり、鑑定を経てはいないが、これがF.A.に該当する可能性が高いと考えられた。この3層は中堤よりの部分がかかなり埋まった段階で、流入しており、下部のレベルは最も高い位置で16.76m、中堤から離れた位置では16.40m前後で、堀底からは0.3ないし0.7m浮いている。なお、内堀の底面を掘り抜く昭和48年度の第2次調査26トレンチの痕跡が残されていた。

#### 内堀部の遺物出土状況 (第27図)

内堀内の遺物分布は中堤から1.4ないし2.4m離れて内堀の隅角付近にまとまっていた。43が5条凸帯の円筒埴輪B2類であり、胴部の主要部分が残存していた。また44はB類の底部、139もB類の破片で、134と137はA4類の破片でB種ヨコハケを伴っていた。垂直分布を土層断面A-A'に投影すると、推定F.A.を含む3層に137が、その下位の4層に134が、さらに下位の5層に44と139が対応する。投影なので若干の誤差はあろうけれども、円筒埴輪E類とB類とがF.A.降下以前に中堤上から直近の内堀内に転倒・流入したとみてよいであろう。43はF.A.降下後の流入となる。

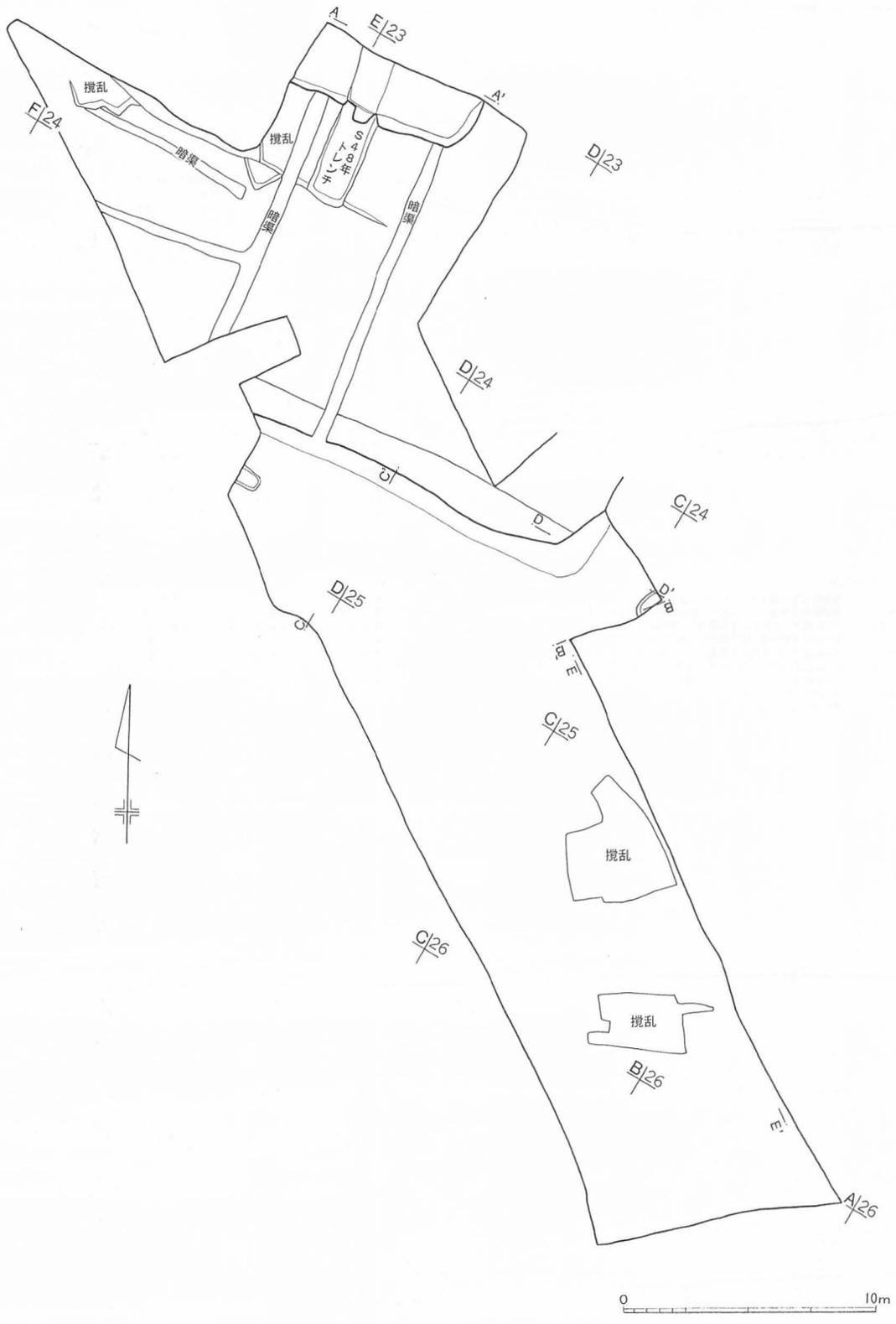
#### 中堤

中堤は内外ともほぼ直角に屈曲する状態で検出された。上幅は12.5m、下幅は13.5mを測る。上面に水田が営まれ、削平されているため、円筒埴輪列やその設置痕跡は検出されなかった。また、水田の水はけを良くする目的で設置されたと思われる暗渠が縦横に設置されており、攪乱も2箇所で見つかるなど、保存状態は良好とはいえなかった。

#### 外堀

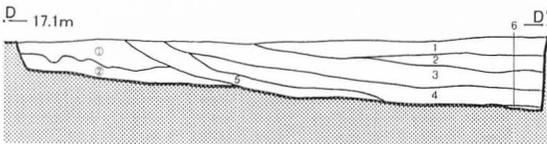
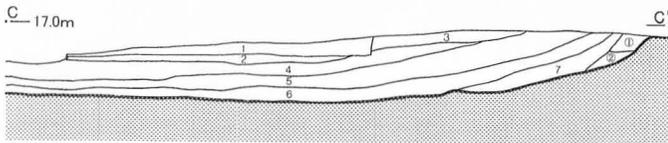
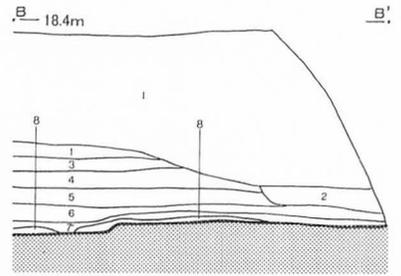
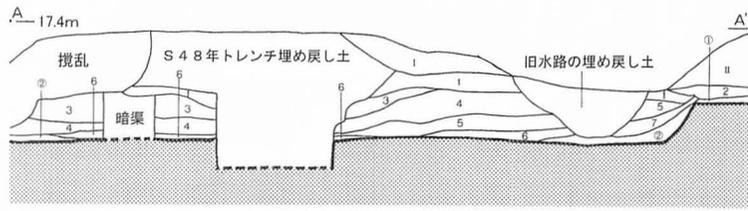
中堤から5m以内の部分では残存が良かったが、その外側には水田が切り込んでおり、外側の立ちあがり部は残存していなかった。現在この部分には厚さ1.6m以上の公園造成土が盛られている。

中堤から外堀にわたる土層断面C-C'では堀底の延長4.8mと立ちあがり部が残存していた。立ちあがり部は上部が46度の勾配で直線的に立ちあがるが、下部は8度の緩い勾配が水平距離で



第25図 平成11年度1区平面図

平成11年度稲荷山古墳土層断面図



11 A-A'土層説明

- I 客土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。黒色土。(芝生植え込み部分)
- II 客土 浅間軽石、酸化鉄粒、煤、ガラを多量に含む。灰褐色シルト。(公園盛土)
- 1 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 2 灰褐色シルト 酸化鉄粒子を多量、浅間軽石を少量含む。(現代の水田耕作土)
- 3 暗褐色シルト 白色粘土ブロック(FAか)、ローム粒子を少量含む。粘性あり。
- 4 黒色シルト ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒子を少量含む。粘性強。
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒子を少量含む。粘性あり。
- 6 淡褐色シルト 黄褐色ブロック細砂(火山灰を含む)を多量、灰白色粘土を少量含む。粘性強。
- 7 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロック、白色粒子を少量含む。粘性弱。(地山崩落土)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム
- ② 暗褐色土 ブラックバンド

11 B-B'土層説明

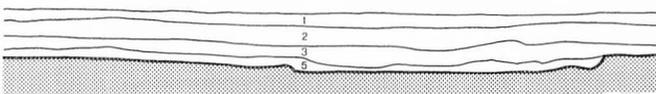
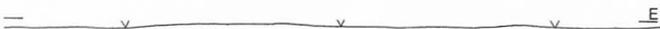
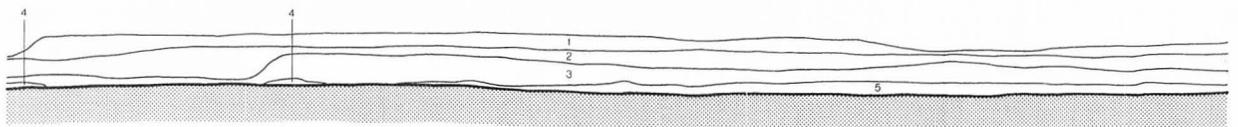
- I 客土 公園造成のために盛ったガラの層。
- 1 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子を少量含む。(耕作土)
- 2 黄褐色シルト ロームブロック、ハードブロック主体。(盛地土か)
- 3 褐色シルト ローム粒子、白色粒子を少量含む。粘性弱。
- 4 褐色シルト ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。
- 6 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A'4層と似る)
- 7 淡褐色シルト 黄褐色ブロック、灰白色粘土ブロックを少量含む。粘性強(A-A'6層と同一層)
- 8 淡褐色シルト ローム粒子、同ブロックを多量に含む。

11 C-C'土層説明

- 1 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 2 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物、鉄分斑を少量含む。(水田耕作土)
- 3 褐色シルト ローム粒子、白色粒子を少量含む。粘性あり。
- 4 褐色シルト ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。
- 6 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A'4層と似る)
- 7 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを多量含む。(地山崩落土)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム
- ② 暗褐色土 ブラックバンド

11 D-D'土層説明

- 1 褐色シルト ローム粒子、白色粒子を少量含む。粘性あり。
- 2 褐色シルト ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。
- 3 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性強。
- 4 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A'4層と似る)
- 5 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを多量含む。(地山崩落土)
- 6 淡褐色シルト 黄褐色ブロックを多量、灰白色粘土ブロックを少量含む。粘性強。(A-A'6層と似る)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム
- ② 暗褐色土 ブラックバンド



11 E-E'土層説明

- 1 茶褐色土 ローム粒子を若干含む。粘性なく緻密。
- 2 黄褐色土 ローム土を主体に茶褐色土を少量含む。粘性なし。しまり強。
- 3 暗灰褐色土 白色粒子(浅間軽石か)を多量に含む。酸化鉄粒を含む。粘性小。堅く緻密。水田耕作土。
- 4 黒褐色土 黄褐色ブロックと黒褐色ブロックで構成される。黒褐色土ブロックは外堀覆土と思われる。粘性があり堅くしまる。
- 5 暗褐色土 ロームブロック、暗灰褐色土を少量含む。粘性あり。緻密でよくしまる。

0 4 m

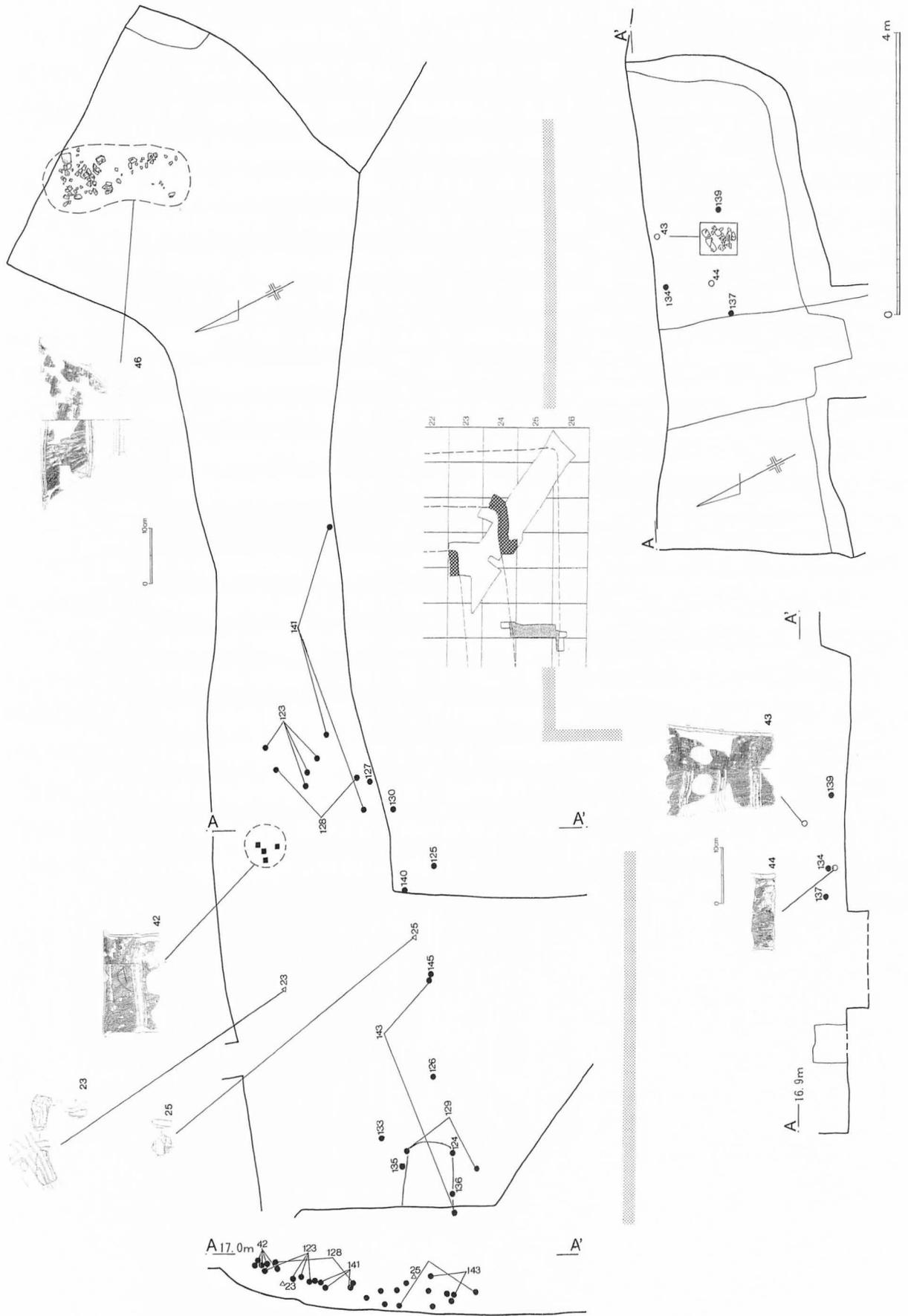
第26図 平成11年度土層断面図(1)

2.5m続いてから堀底面に至っている。底面の標高はこの部分が最も低く、16.20mを測るが、再び外に向かって次第に浅くなっている。覆土は最初に地山崩壊土であるロームブロックを多量に含む黄褐色土が中堤から流れ込んだ後に、黒色土と暗褐色土（5層）が形成され、後者には白色粒子が多量に含まれていた。F.A.であろう。5層の下部は水平な底面から0.2m内外の位置にあった。この上部にはさらに褐色土が堆積していた。上部には2枚の水田耕作層が重複した状態で切り込んでいたが、下層の水田耕作土層中には浅間A軽石を多量に含んでおり、天明3年以前の開墾であろう。このことは10年度3区での所見と一致するもので、内堀と外堀は水田化した時期が意外に古く、その段階では内堀と外堀はそれぞれ窪地を成していたとみられよう。

土層断面B-BとD-D'においてもほぼ同様の所見がえられた。また、土層断面B-Bの第5層、土層断面D-D'の第3層は土層断面C-C'の第5層と共通する暗褐色土層で、ともに白色粒子を多量に含んでいた。内堀の土層断面A-A'の第3層に対比できるものであり、内堀では窪地状を成していたために溜まった水の中にF.A.が水性の堆積をなし、外堀では窪地を成していなかったために、時間をかけて白色粒子が2次堆積し、層中に散在した可能性を考えてみたい。

#### 外堀部の遺物出土状況（第27図）

外堀内の遺物分布は中堤の隅角付近にB1類の朝顔形円筒埴輪口縁部がそっくり（割れて散乱していたが）出土したほかは、隅角から7.2m左側の中位堤立ち上がり部で6条凸帯の円筒埴輪と推定されるC1類の口縁部42が出土した。他はいずれも破片資料で中堤から2.8m以内に散在していた。A4類でB種ヨコハケを伴う133・135・136、D1類の141、D2類の128、D3類の123などがある。また、形象埴輪として23の馬形埴輪頭部破片、25の胸繫破片がある。垂直分布を土層断面C-C'に投影すると、推定F.A.を2次堆積的に包含する暗褐色土層（5層）およびその下層の黒色土（6層）にほとんどの埴輪が対応する。投影距離の遠いものは誤差が想定されるので、厳密なことはいえないが、各種の埴輪がF.A.の2次的な堆積時前後にまとまって中堤上から直近の外堀内に転倒・流入したとみてよいであろう。なお、この2次堆積の進行した時間幅はかなり長期にわたると見られる。



第27図 平成11年度1区遺物接合関係図

## 2 第2区 (第28・29図)

2区は前方部前面の主軸線上に当たる中堤と外堀の検出を目的として設定した。調査区の幅は19.0m、長さは42.8mで、立木などを避けて幅を減じた箇所もあった。掘り下げ調査の結果、水田の開墾によって著しく削平されていることが判明し、かろうじて外堀を把握することができた。

### 内堀

調査区右端のI-I'土層断面によると、中堤上面が水田の開墾によって削平されており、内堀にも及んでいたが、内堀の立ち上がり部から3mの範囲が浅く残存していた。立ち上がり部の下部は延長1.8mの緩斜面をなし、上部では35度に勾配を強めていた。堀底の標高は16.13mを測る。覆土は中堤盛土の崩落土ロームブロックを多量に含む黄褐色土が立ち上がり部に三角堆積した後に、黒色土が水平堆積し、さらにローム粒子と白色粒子(推定F.A.)を多量に含む暗褐色土となるが、その上面を波状に水田耕作層が破壊している。浅間A軽石を多量に含む灰褐色シルトで、炭化物や酸化鉄粒子を少量含んでいる。天明3年以前にこの部分の開田がなされていたと考えられる。

いっぽう、3.6m左側に設けたG-G'土層断面では中堤の肩部付近から内堀にかけて一段深い水田が開墾されていて、ハードローム面まで削平されていた。このために内堀の立ち上がり部は残存していなかった。内堀部はすでに水堀の復原がなされていて、覆土の残存する部分が限られていたために遺物の出土は僅少であった。

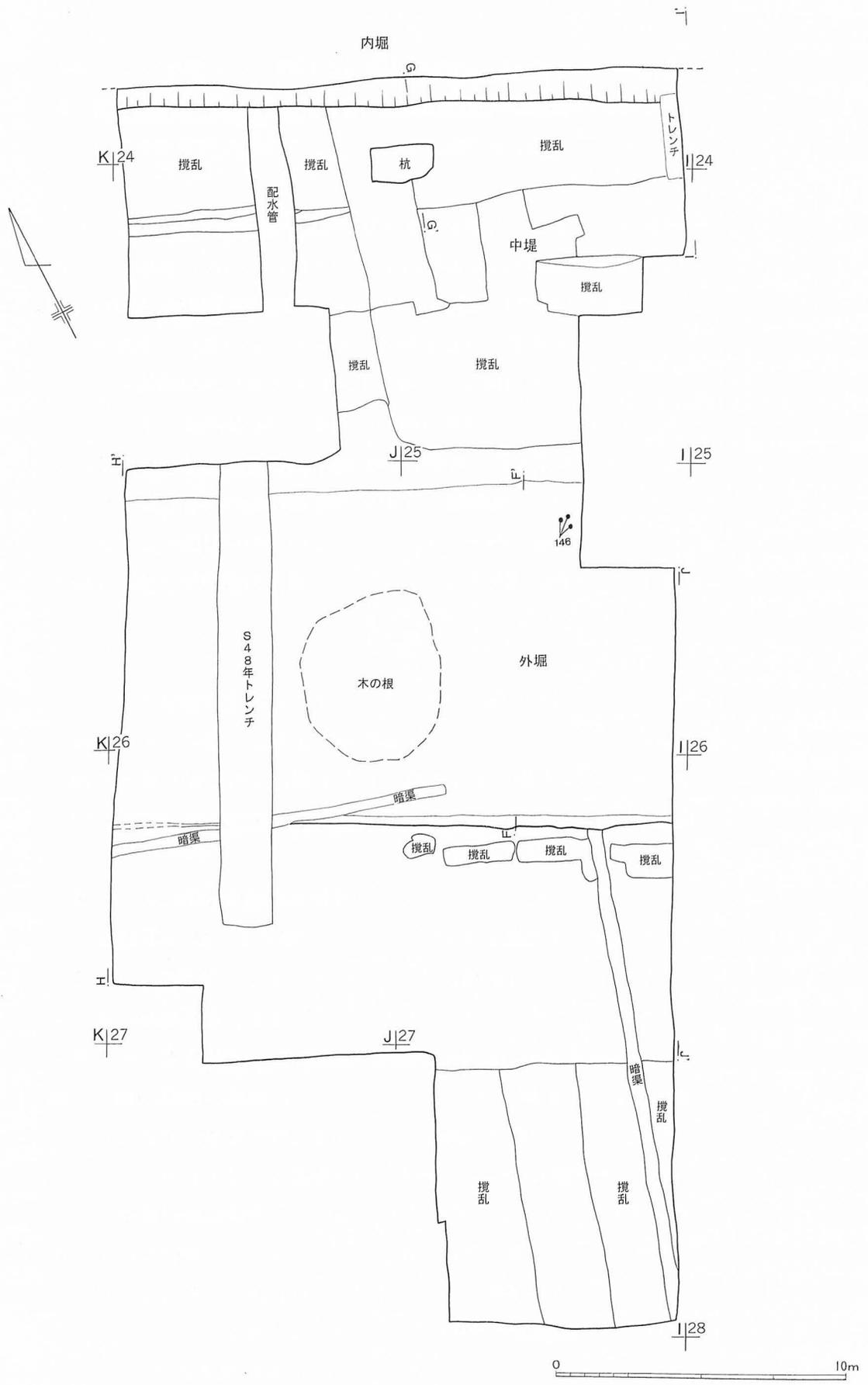
### 中堤

中堤の上面は水田開墾によって大規模に削平されており、さらに複数の攪乱が重なり合っていた。このため通しの土層断面は設けなかったが、I-I'土層断面によると、削平された状態の中堤上面の標高は16.42m前後である。また、中堤の幅は復原された水堀の立ち上がり部と外堀の立ち上がり部との間隔で下場が13.8m、上場が11.6mを測る。中堤は延長距離で19.2mが確認された。

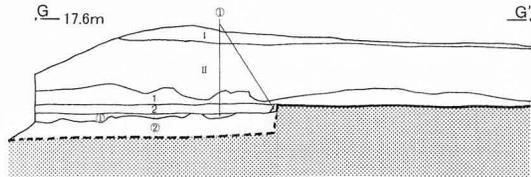
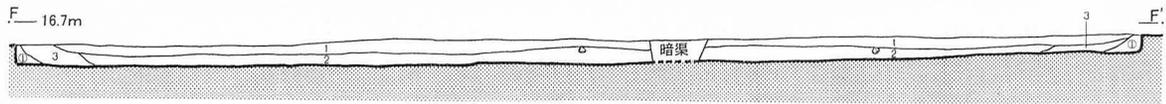
### 外堀

上部に水田の開墾が及んでいたが、かろうじて浅く残る外堀を調査区全面において検出することができた。調査区の両端と中央部に土層断面を設定したが、左端のH-H'土層断面によれば、外堀は中堤よりの立ち上がり部に水田による破壊が及んでいた。しかし、中堤は0.15mほど高いので、現状がほぼ本来の立ち上がり部と一致すると見て誤りないようである。堀底は中心部が深く凹レンズ状の断面形を持っていた。堀底最深部の標高は16.14mを測る。外側の立ち上がり部はわずかに残るブラックバンドの地山によって把握することができた。その結果、外堀の幅は下幅が11.3m、上幅が11.0mであることが確認された。覆土は両立ち上がり部に堤の崩落土であるロームブロックを多量に含む黄褐色土が薄く三角堆積した後に、粘性の強い黒色土、さらにローム粒子と白色粒子(推定F.A.)を多量に含む暗褐色土となるが、その上面を波状に水田耕作層が破壊しているのは内堀と同じ状況であった。浅間A軽石を多量に含む灰褐色シルトであり、天明3年以前に開田された水田が内堀から外堀に及んでいたことが判明した。水田跡は2枚存在し、その上は厚い公園造成盛土となるが、調査区右端のJ-J'土層断面ではその厚さは0.8mほどある。

F-F'土層断面では覆土は浅かったものの、両立ち上がり部が残されていた。その下幅は11.28mを測り、ブラックバンド層を切り込んでいた。外堤推定部も広い面積を調査したが、水田



第28図 平成11年度2区平面図

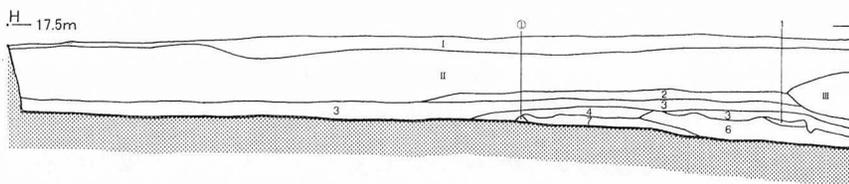


11 F-F' 土層説明

- 1 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。
- 2 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A' 4層と似る)
- 3 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。(地山崩落土)
- ① 暗褐色土 ブラックバンド

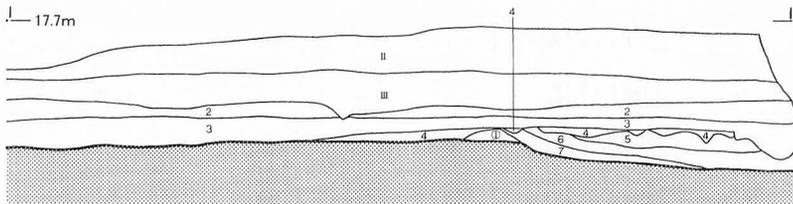
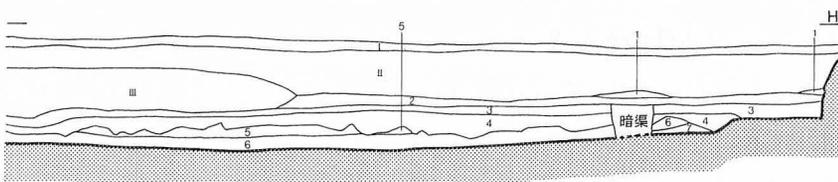
11 G-G' 土層説明

- I 黒色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。(芝生植え込み部分)
- II 灰褐色シルト 浅間軽石、酸化鉄粒、礫、ガラを多量に含む。(公園盛土)
- 1 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 2 暗褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム
- ② 暗褐色土 ブラックバンド



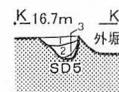
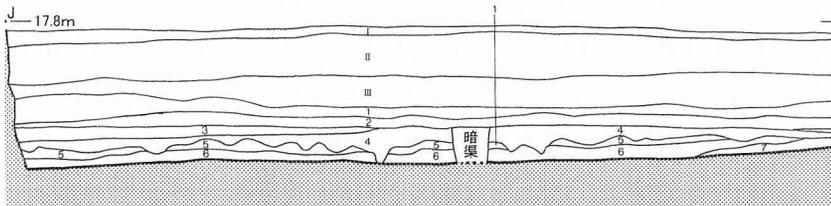
11 H-H' 土層説明

- I 客土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。黒色土。(芝生植え込み部分)
- II 客土 浅間軽石、酸化鉄粒、礫、ガラを多量に含む。灰褐色シルト。(公園盛土)
- III 客土 礫を大量に含む。しまりあり。黄褐色シルト。(旧道部分)
- 1 灰黒色シルト 浅間軽石、ローム粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 2 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 3 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロック、浅間軽石を多量に含む。(水田整地土)
- 4 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性弱。
- 6 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A' 4層と似る)
- 7 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。粘性強。(地山崩落土)
- ① 暗褐色土 ブラックバンド



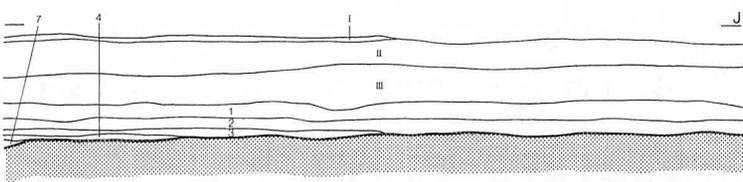
11 I-I'、11 J-J' 土層説明

- I 客土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。黒色土。(芝生植え込み部分)
- II 客土 ローム粒子、ロームブロックを主体とする。黄褐色土。(公園盛土)
- III 客土 浅間軽石、酸化鉄粒、礫、ガラを多量に含む。灰褐色シルト。(公園盛土)
- 1 灰黒色シルト 浅間軽石、ローム粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 2 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 3 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロック、浅間軽石を多量に含む。(水田整地土)
- 4 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。
- 6 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強(A-A' 4層と似る)
- 7 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを多量含む。(地山崩落土)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム



11 K-K' 土層説明

- 1 褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色シルト ロームを主体とする。(地山崩落土)



第29図 平成11年度土層断面図(2)

の床面によって完全に削平されていて、盛土などの施設は確認することができなかった。

なお、外堀内からは埴輪の小破片が一定量出土したが、完形に復原できるようなものはなかった。開墾によって失われた結果であろう。拓影図146の4条凸帯と推定される円筒埴輪（D2類）は比較的残存率の多い埴輪である。

### 3 第3区（第29～31図）

3区は前方部左隅角に対応する中堤と外堀の隅角部の検出を目的として設定した。調査区の幅は10.0m、一部13.75mで長さは47.5mである。昭和48年度の第2次調査でいったん調査が行われた部分と重複する部分がある。掘り下げ調査の結果、中堤、外堀隅角部、それに外部と中堤を繋ぐ土橋状の掘り残しが検出された。

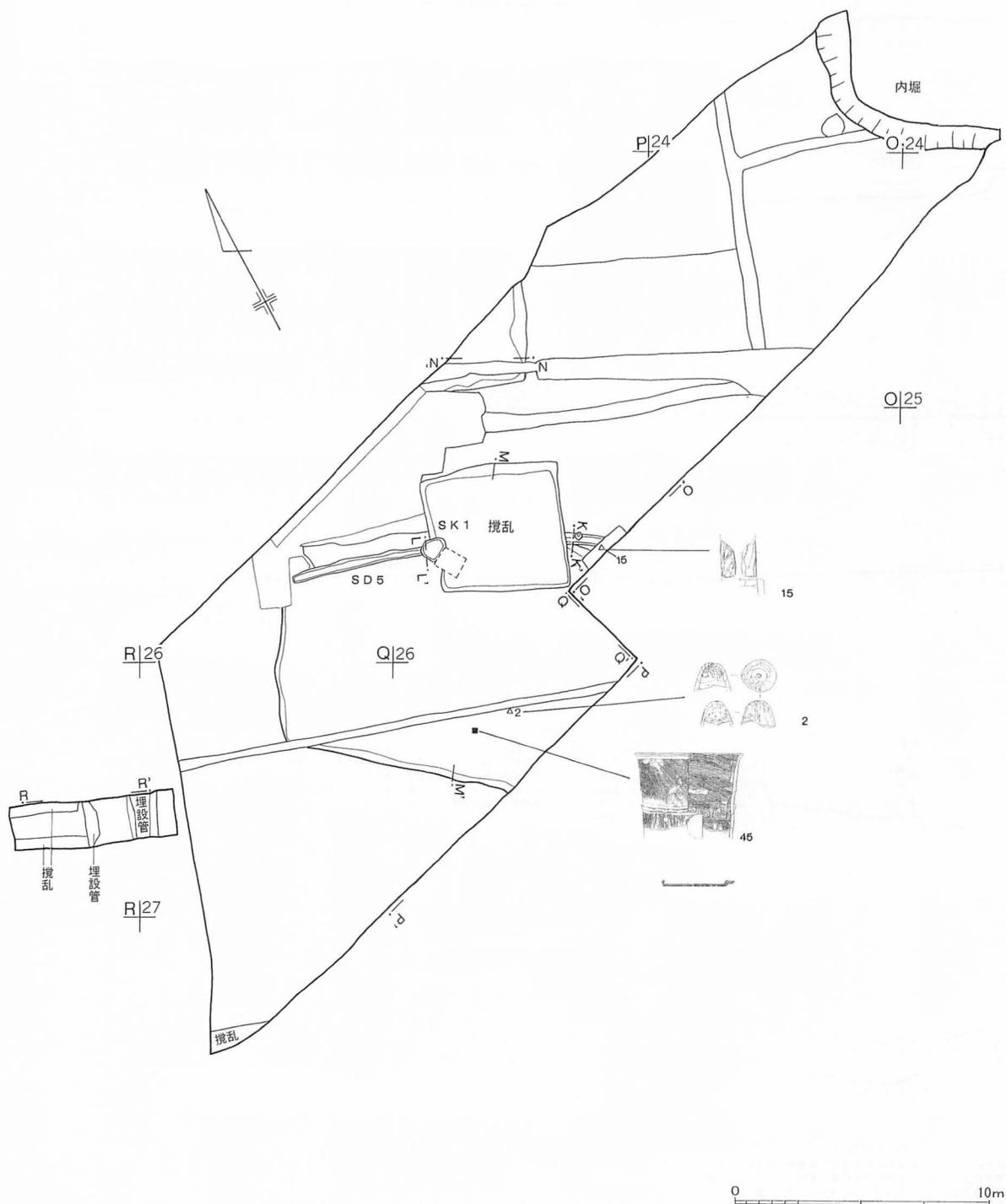
#### 外堀と土橋

外堀は土橋状の掘り残しによって二分されていた。北側では中堤と土橋に接して外堀の一部が検出された。N-N'土層断面では中堤側において60度の急勾配で立ちあがっており、上場の標高は16.68mを測る。堀底は中心部に向かって深くなっており、最深部の標高は16.24mを測る。覆土は最初に中堤からの崩落土である7層、次に粘性の強い黒色土である6層、そしてローム粒子と白色粒子（推定F.A.）を多量に含む暗褐色土という層序であり、2区内・外堀と共通していた。上部は中堤にまたがる水平な攪乱によって削平されていた。

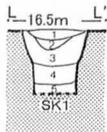
調査区の西端では外堀の隅角部が検出された。隅角は直角ではなく、外堀の左辺と下辺は101度をなしていた。しかし全体測量図に重ねてみると、このままの角度で開くわけではなく、隅切りの目的で角度を緩やかにしたものである。隅角から約9m右側に隔たったP-P'土層断面によれば、外堀の底面は凹レンズ状の断面形を持ち、中心部の標高は16.3mを測る。外側の立ちあがり部は堀底から続く緩やかなものであった。上部はより強い勾配であったと推定されるが、外堤部分が大規模に削平されたために失われたのであろう。覆土の層序はN-N'土層断面と共通し、下部の5・6・7層の上に4層の一部が残存していた。この4層と5層は水田開墾によって削平されていた。水田耕作層は3層に分層でき、下層の灰褐色シルトには浅間A軽石を多量に包含していた。天明3年以前の開墾と推定される。この水田最下層の床は外堤部上に伸びており、外堤の上部も大規模に削平を受けていたため、盛土などの遺構は残存していなかった。削平された外堤部の最高標高は16.7mである。

いっぽう、調査区の南辺中程に設けたO-O'土層断面では外堀と土橋との境界部がかるうじて検出された。前記した水田の開墾によって破壊が及んでいたが、わずかに残ったブラックバンド地山層と三角堆積する7層との境界線が立ちあがり部であり、斜めに立ちあがっていた。土橋は上部にブラックバンド層が部分的に残存し、その標高は16.7mである。外堀の底面は16.46mであり、両者の比高差はわずかに0.24mである。もちろん土橋の上面が水田開墾によって削平された結果である。土橋は南側の立ちあがり部がほとんど残存していなかったため、正確な形状は不明とせざるをえないが、幅は6.5mほどあって中堤と外堀の外部を結んでいたことはまちがいない。また、土橋の南側立ちあがり部は中堤の外縁の延長線とほぼ一致することになる。

なお、外堀の土橋側立ち上がり部に接して幅0.8mの溝SD5が切り込んでいた。上部は水田開墾層によって破壊されている。SD5は東西方向に延長12.5mが検出された。西側にはその末端部がある。また、SD5の中間部に重なる状態で井戸が掘られていた。当初土坑とみてSK1としたが、調査の結果、井戸と判明した。平面形は不整形円形で長径1.0mを測る。約0.8m掘り下げた段階で湧水が

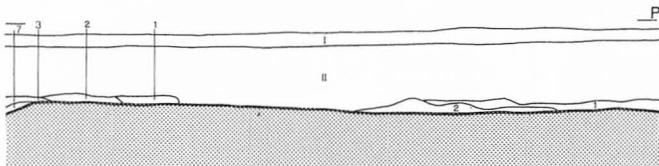
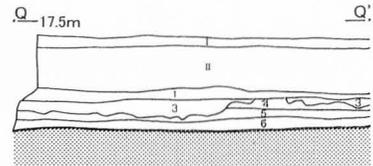
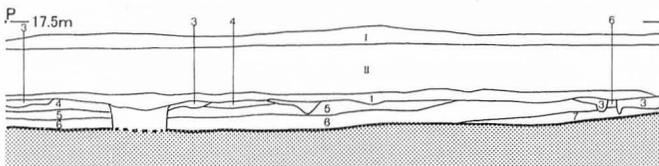
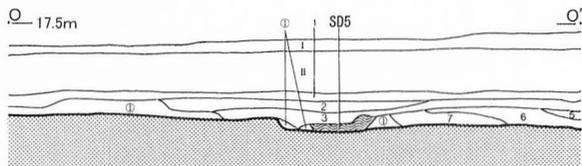
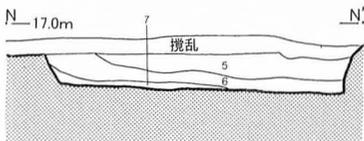
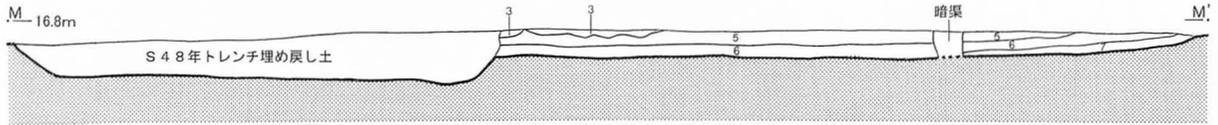


第30図 平成11年度3区平面図



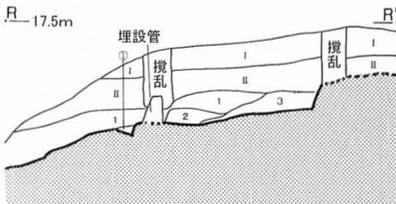
11 L-L' 土層説明

- 1 褐色シルト ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
- 4 黄褐色シルト ロームブロックを多量に含む。
- 5 灰褐色粘土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強、しまりは弱。湧水が著しく床面検出を断念、井戸跡で時期不明。SD-5を切る。



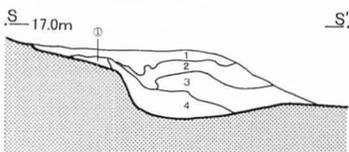
11 M-M', 11 N-N', 11 O-O', 11 P-P', 11 Q-Q' 土層説明

- I 客土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。黒色土。(芝生植え込み部分)
- II 客土 浅間軽石、酸化鉄粒、礫、ガラを多量に含む。灰褐色シルト。(公園盛土)
- 1 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 2 暗褐色シルト ローム粒子、ロームブロック、浅間軽石を多量に含む。(水田整地土)
- 3 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 4 褐色シルト ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。
- 5 暗褐色シルト ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。
- 6 黒色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。
- 7 黄褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを多量含む。(地山崩落土)
- ① 暗褐色土 ブラックバンド



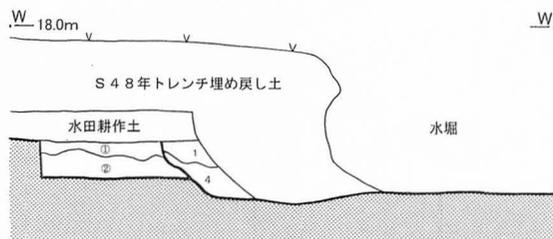
11 R-R' 土層説明

- I 客土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。黒色土。(芝生植え込み部分)
- II 客土 浅間軽石、酸化鉄粒子、礫、ガラを多量に含む。灰褐色シルト。(公園盛土)
- 1 灰色シルト 浅間軽石、酸化鉄粒子を多量に含む。(水田床土)
- 2 黒褐色シルト ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
- 3 灰褐色シルト 浅間軽石、酸化鉄粒子を多量に含む。(水田床土)
- ① 暗黄褐色土 ハードローム



11 S-S', 11 W-W' 土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロックを主体に茶褐色土を含む。粘性強、しまり強。
- 2 茶褐色土 ロームブロックを多量に含む。BBブロックを少量含む。粘性弱、しまり強。
- 3 暗茶褐色土 ローム、BBブロックを多量に含む。粘性あり、しまり強。
- 4 黒褐色土 BBブロックを多量、ロームブロックを少量含む。粘性弱、しまり強。1~4層には遺物は含まれない。掘り方埋め戻し土である。
- ① 黄褐色土 ローム
- ② 黒褐色土 ブラックバンド



第31図 平成11年度土層断面図(3)

著しくなり、調査を終えた。SD5を切っているが、遺物を伴わず時期は不明である。

### 丸墓山古墳周堀との重複の有無

丸墓山古墳の周堀は稲荷山古墳外堀の隅角部と最も接近しているため、その周堀外側立ち上がり部の位置を確認する目的でサブトレンチを設けて調査を行った。丸墓山古墳周堀の外側の立ち上がり部上場は水田の開墾によって削られていたが、ローム土の地山が23度の一定勾配で下がっているため、その上部にある水平面との交点を天端と把握した。そこから稲荷山古墳の外堀隅角部までの直距離は8.75mを測る。稲荷山古墳と丸墓山古墳の両者に外堤盛土が存在したとすれば、その幅の和はこれを下回るものであったことになろう。

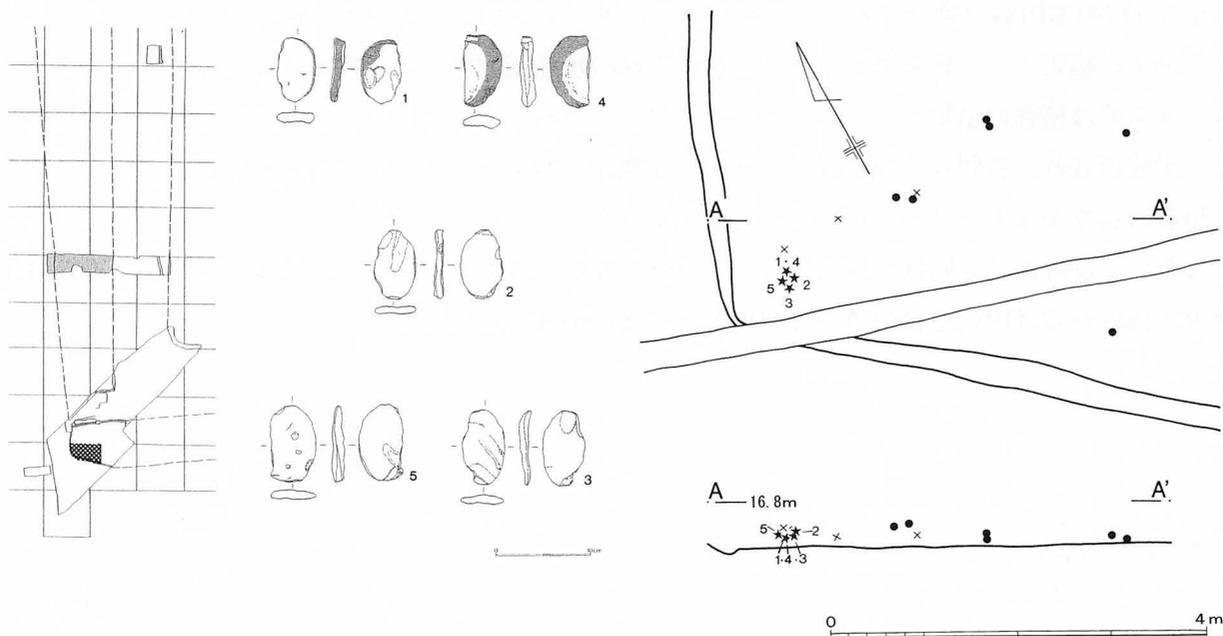
### 外堀部の遺物出土状況（第30・32図）

土橋から南側となる外堀内からは埴輪の小破片が一定量出土したが、完形に復原できるようなものはなかった。45の5条凸帯と推定される円筒埴輪（C2類）は比較的残存率の多い埴輪である。出土位置から外堤に置かれていたものであろう。また、形象埴輪片として2の人物埴輪頭部、15の家形埴輪壁体部が出土した。

いっぽう、外堀の隅角から0.8m以内の場所では餅形土製品が土師器の小破片とともにまとまって出土した。土製品は5枚が剥離して出土したが、後にこれらは接合することが判明した。土師器は復原できなかつたが、土製品を載せていた高坏だった可能性がある。堀底から0.15mほど浮いて出土した。外堤隅角部上に置いたものが風雨や土砂の崩壊に伴って流入した可能性が考えられる。

## 4 第4区（第31・33・34図）

4区は造出し先端部とくびれ部付近の追加調査を行った。湛水している復原内堀の水を4吋ポンプで排水してながら調査を実施した。



第32図 平成11年度3区遺物出土位置図

## 造出し部

造出し先端部は溝や水田などの後世の遺構によって上面が破壊されていたが、下部が残存していたので、およその形状を把握することができた。先端部の下場は弧状を呈し、両隅角とも丸みを帯びていた。幅は16.8mを測る。その立体構造を把握するために3本のベルトを設定し、土層断面図を作製した。最も北側のS-S'土層断面によれば、造出しはローム土の地山を掘削して18度の斜面とし、下場を切り落とし、浅い窪みを掘削して、そこに盛土整形を行っていた。盛土層は4層からなり、ロームブロックまたはブラックバンドブロックを主体とし、いずれも強く叩き締められていた。この盛土整形は掘方の下場から外側に1.88m続いており、基部は斜面上にすり付けられていた。上面はほぼ平坦で、最高所の標高は16.79mを測る。造出しの盛土整形は南側のW-W'土層断面でも認められたが、先端部が後世の攪乱によって多少削られていた。また中間部に設定したT-T'土層断面では先端部は削平されて5枚の水田層が乗り、その下に大小2本の水路が埋め立てられた状態で発見された。このうち、上から2番目の水田層には浅間A軽石を多量に含んでいた。墳丘周囲の開発がかなり遡ることを示している。U-U'土層断面においてもほぼ同様で、水路は断面形U字形で、上幅1.6m、深さ0.6mであった。この水路の内側には墳丘崩落土の淡褐色土に覆われた造出し先端部付近が確認された。

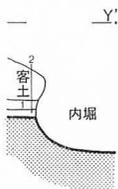
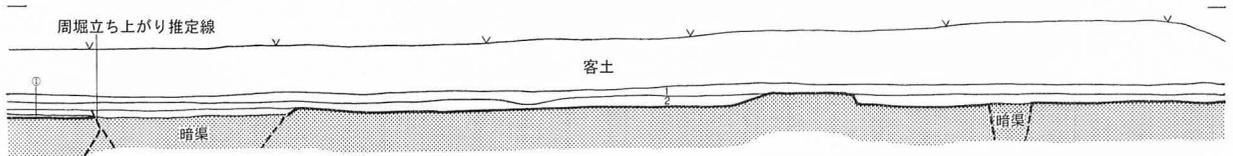
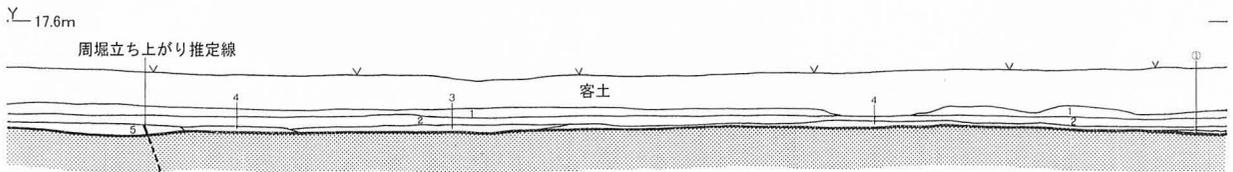
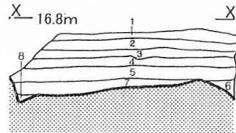
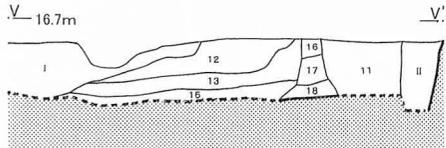
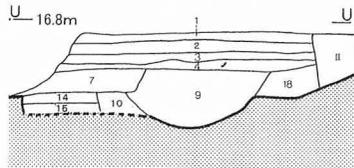
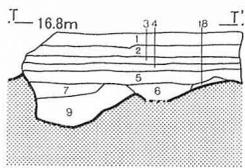
## くびれ部

くびれ部付近は昭和48年に実施された第2次調査時に第3トレンチが設けられた場所で、プライマリーな土層は少ししか残されていなかった。V-V'土層断面では内堀底部が水田の開墾によって削平され、3層からなる水田跡が確認された。しかし、水田層に接する墳丘よりには、わずかに堀底とその上に堆積した3層の覆土が残存していた。堀底の標高は15.9mを測る。この部分のさらに内側には堀底に達する水路を埋め戻し痕があったが、円筒埴輪片を多量に含んでいた。

いっぽう、くびれ部から少し前よりの前方部墳丘テラス状部分に設定したX-X'土層断面では、水平な5枚の水田層が乗っており、その下部には埋め立てられた水路跡が検出された。このことから、削平の結果テラス状を呈してはいるが、当初の墳丘基壇部そのものとは認めることができなかった。上面は精査の結果、ロームブロックとブラックバンドブロックを主体とする盛土整形であることが確認され、右側のくびれ部と同様に、左側くびれ部においても、直線的な掘方に付加した盛土整形の緩やかなカーブが存在することがわかった。

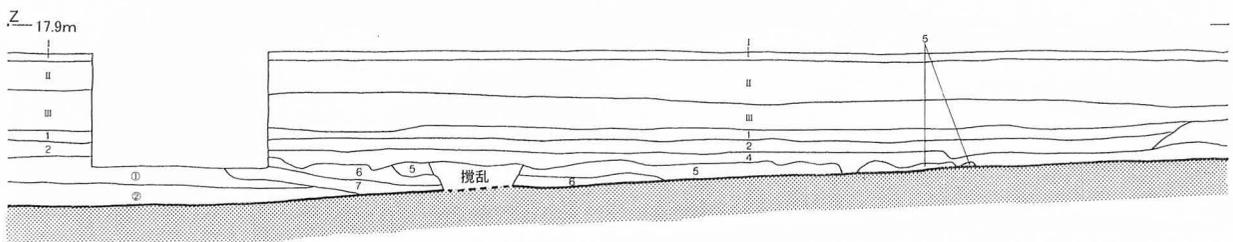
また、くびれ部でも同様に掘方に付加して盛土整形が行われていることが確認できた。くびれ部付近の内堀からは円筒埴輪のほか須恵器坏・甕の破片が出土した。





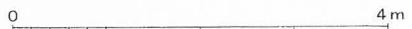
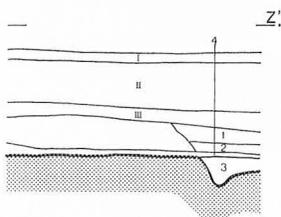
11 Y-Y' 土層説明

- 1 灰褐色土 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 2 暗灰褐色土 浅間軽石を多量に含む。酸化鉄粒子を多量に含む床層。(水田耕作土)
- 3 暗黄灰褐色土 浅間軽石を多量、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 4 暗褐色土 外堀覆土。ローム粒子を多量に含む。粘性なく堅く緻密。
- 5 暗黄褐色土 外堀覆土。ローム粒子を多量に含む。粘性なく緻密。
- ① 暗褐色土 ブラックバンド



11 Z-Z' 土層説明

- 1 黒色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む。(芝生植えこみ部分)
- II 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロックを主体とする。(公園盛土)
- III 灰褐色シルト 浅間軽石、酸化鉄粒子、礫、ガラを多量に含む。(公園盛土)
- 1 灰黒色シルト 浅間軽石、ローム粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 2 灰色シルト 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 3 灰色シルト 覆土に磁器を含む。
- 4 灰褐色シルト 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子を少量、灰白色粒子を僅かに含む。粘性なく緻密。外堀覆土。
- 6 黒褐色土 ローム粒子を僅かに含む。粘性弱。緻密。
- 7 暗黄褐色土 茶褐色土を主体に、ローム粒子を多量に含む。緻密。
- ① 暗黄褐色土 ハードローム
- ② 暗褐色土 ブラックバンド



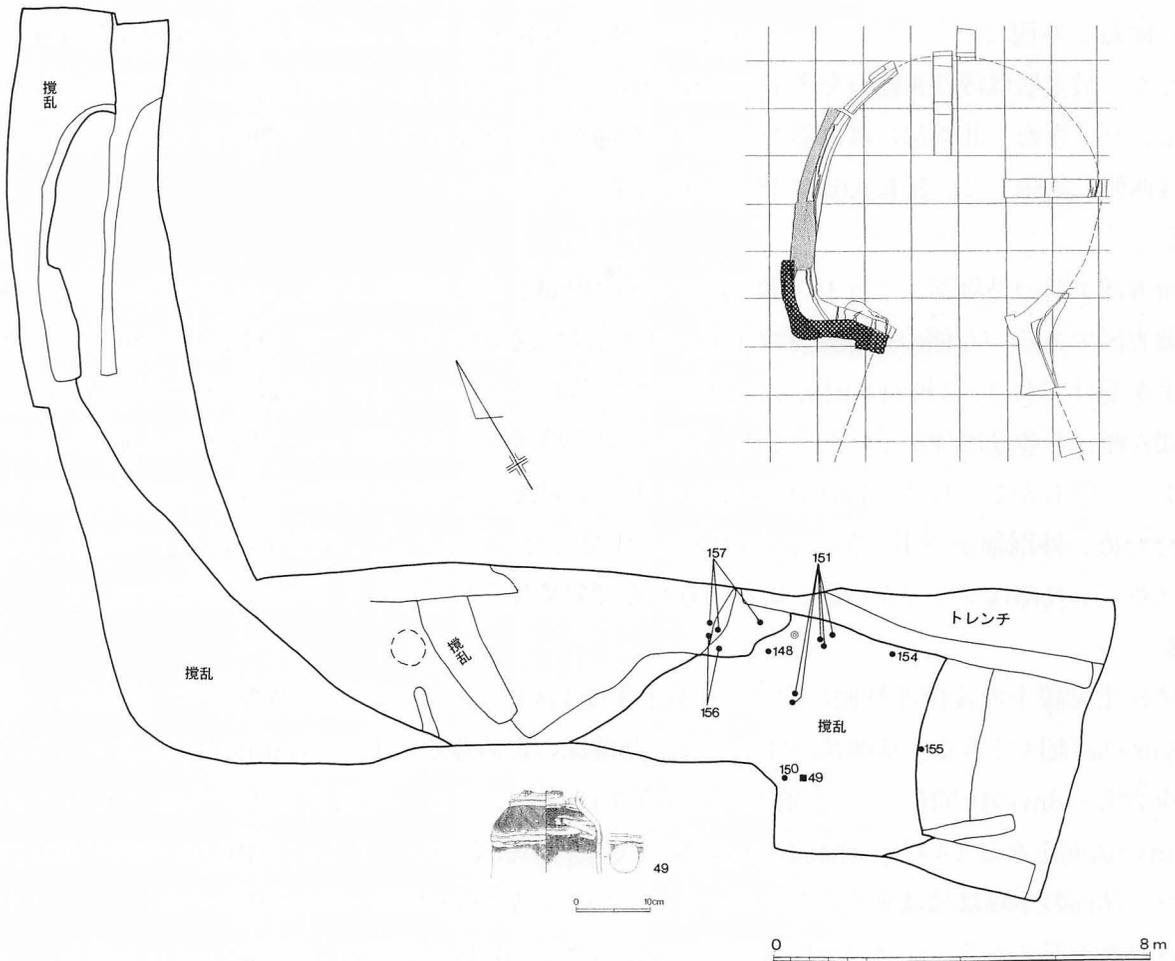
11 T-T', 11 U-U', 11 V-V', 11 X-X' 土層説明

- I 客土 昭和48年度トレンチ埋め戻し土。
- II 客土 平成9年度トレンチ埋め戻し土。
- 1 淡灰褐色シルト 浅間軽石を少量、鉄分斑を多量に含む。(水田耕作土)
- 2 灰褐色シルト 下層に浅間軽石を多量、鉄分斑を多量に含む。(水田耕作土)
- 3 灰色シルト 鉄分斑を多量、浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)
- 4 褐色土 ローム粒子、同ブロックを多量に含む。(水田盛地土)
- 5 灰色シルト 酸化鉄粒子を多量、ロームブロックを少量含む。(水田耕作土)
- 6 灰褐色シルト 酸化鉄粒子を少量含む。(水路の埋土)
- 7 灰褐色シルト 酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 8 灰褐色シルト 酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 9 淡灰褐色土 酸化鉄粒子、ロームブロックを少量含む。(水路の埋め戻し土か)
- 10 灰褐色シルト 酸化鉄粒子、ロームブロックを少量含む。(水路の埋め戻し土か)
- 11 淡灰色シルト ローム粒子を少量含む。(水路の埋め戻し土か)上層に内堀覆土の褐色土が混じる。円筒埋輪片を多量に含む。
- 12 淡灰色シルト ローム粒子、同ブロックを多量に含む。(水田耕作土)
- 13 灰色シルト 浅間軽石、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 14 灰色シルト 酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)
- 15 灰黒色シルト 酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土)くびれ部周辺では大形の円筒埋輪片が多量に出土。
- 16 黒褐色土 ローム粒子、白色粒子を多量に含む。(内堀覆土)
- 17 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。(内堀覆土)
- 18 淡褐色土 ローム粒子、同ブロックを多量に含む。(内堀覆土、墳丘、地山崩落土)

第34図 平成11年度土層断面図(4)

### くびれ部付近の遺物出土状態（第35図）

造出しの南側でくびれ部から少し離れた内堀内からはまとまった量の遺物が出土した。昭和48年度の調査で掘り残した覆土中からの出土であった。残存率が高く実測図を作製できたものは49のC2類朝顔形円筒埴輪肩部だけであったが、破片資料ではA3または4類の148、B類の151、C類の154、C類朝顔の156・157などがある。これらのうち157と158は造出しから転落したものである。なお、須恵器の破片も少量出土している。



第35図 平成11年度4区遺物接合関係図

#### 4 第5区から10区でのプラン確認調査（第33～34・36～37図）

5区から9区はおもに調査区の間隔が広い部分に追加して設けた補足調査のトレンチで、プラン確認調査のみを行った。また、8区と10区は平成9年度の調査区に隣接して設置して遺構の面的な広がりを確認した。その結果、それぞれのトレンチで予想通りに遺構のプランが確認できた。

#### 5区

前方部外堀左側隅角部の奥40mの地点に外堀から中堤にまたがる状態で設置した幅3.8m、長さ26.2mの調査区である。標高16.4mラインまで削平を受けており、3枚の水田層と公園造成土に覆

われていた。このうち最下層の水田耕作層には浅間A軽石を多量に含んでいた。また、中堤上には畦道と推定される掘り残しと暗渠があった。確認面の精査によって、ローム面の中堤と外堤に挟まれた状態で暗褐色の外堀覆土が確認された。その幅は12.44mあった。

#### 6区

前方部手前の外堀部で平成11年度1区と2区の間となる位置に設定した。幅3.7m、長さ15.8mの調査区で、両端部に拡張を行った。左側の壁際を断ち割ったところ、ハードローム層とブラックバンド層を掘り込んだ外側の立ち上がり部と堀底部分が延長8.0mの区間で残存していた。堀底は3度の傾斜で外側に下がっており、最深部の標高は16.14mを測る。覆土は下から3層分が残存していたが、最上層は浅間A軽石を多量に含む水田によって削平され、中堤側の立ち上がり部も破壊されていた。また、北端部には磁器の破片を含む溝が掘り込まれていた。外側の立ち上がり部に関しては西側に拡張して、延長5.6mの区間を検出することができた。

#### 7区

前方部手前の外堀部で平成11年度2区と3区の間となる位置に設定した。幅4.0m、長さ16.0mの調査区である。左側の壁際にサブトレンチを設けて掘り下げたところ、標高16.46mラインまで削平を受けており、3枚の水田層と公園造成土に覆われていた。このうち最下層の水田耕作層には浅間A軽石を多量に含んでいた。また、南側には道路敷のために幅3.2m、深さ0.24m陥没した部分があった。しかし、厚さ0.1m前後の覆土を伴って堀底が残存する部分が両立ち上がり部付近にあったため、外堀幅が下場で9.04mの規模を有することをかろうじて確認することができた。また、両立ち上がり部はブラックバンド層を切り込んで斜めに立ち上がっていることが確認できた。

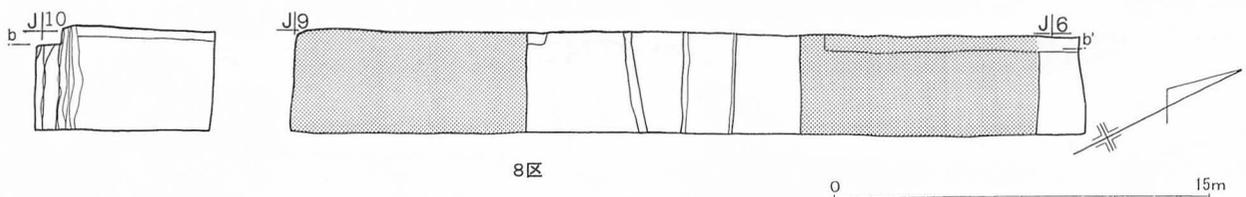
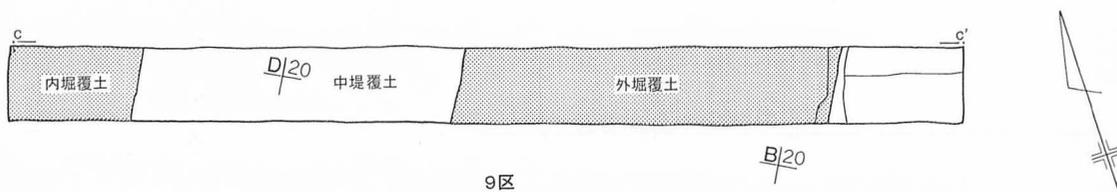
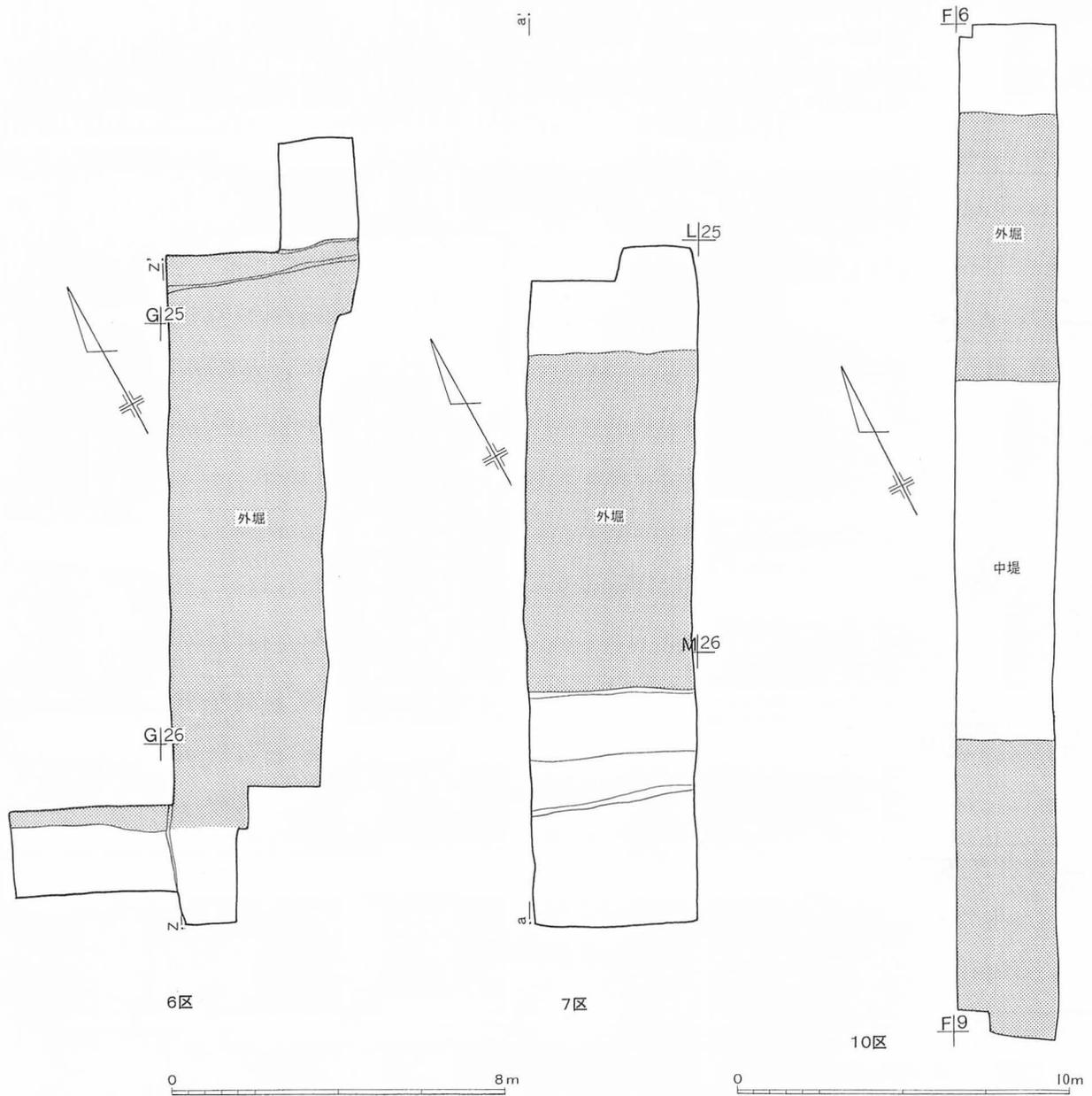
#### 8区

墳丘主軸線上の後円部外側に設けた平成9年度4区に隣接して設けた調査区で、幅4.5m、長さ41.7mの調査区である。基準杭の保存と作業路確保のため途中の1箇所は掘削を行わなかった。墳裾を含む6.8mの区間について掘り下げ調査を行ったところ、墳裾は28度の勾配で立ち上がり、1.1mの法面をなしていた。標高16.5mの位置で傾斜が緩くなり、そこには幅0.4mの溝が掘られていた。法面の下場はほぼ垂直に裁ち落とされていた。昭和48年度の第2次調査で第1トレンチが設定された場所であるが、その痕跡は明瞭でなかった。内堀底は平坦で、標高は15.7mを測る。

外側の調査区では内堀から外堀までを通してプラン確認調査を行った。土層断面b-b'によると、内堀から中堤にかけて標高16.3mラインまで削平されていて、上部には2面の耕作土層が乗っていた。下の耕作土中には浅間A軽石を含んでいた。また、中堤から外堀部分では削平が浅く、耕作土層は1面であった。精査の結果、黄褐色のローム面が露出する中堤と外堤に対して内堀と外堀の覆土は暗茶褐色を呈し、埴輪片を包含していたので、容易に識別ができた。内堀の上場確認幅はセクションポイントからの計測で18.64m、中堤の幅は10.6m、外堀幅は8.0mを測り、内堀も8.8mの区間が確認された。なお、中堤と外堤に盛土は確認されなかった。削平によるものである。

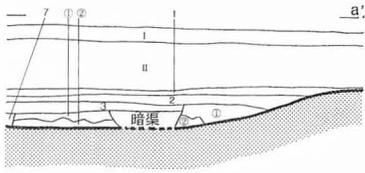
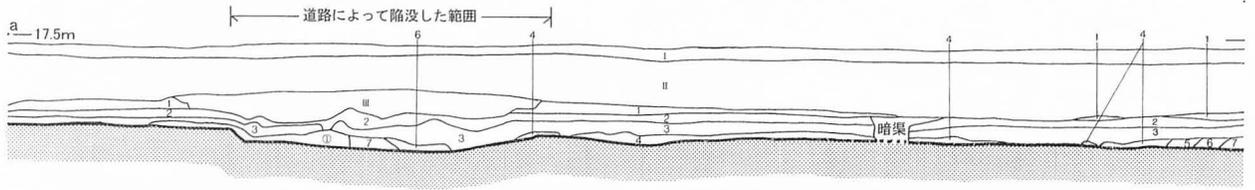
#### 9区

前方部外堀右側隅角部の奥62mの地点に外堀から内堀にまたがる状態でやや斜行して設置した幅3.0m、長さ30.0mの調査区である。精査の結果この部分には公園造成は及んでいないので、厚



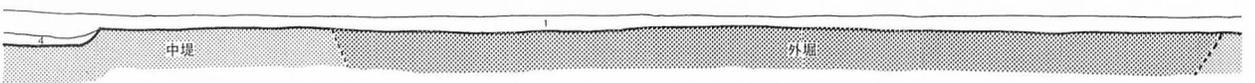
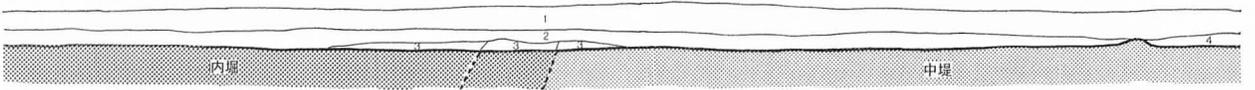
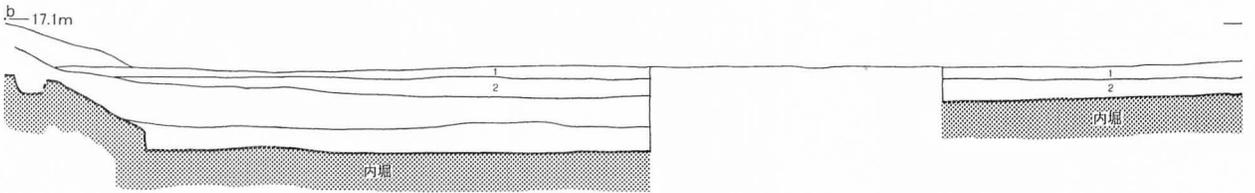
※アミはプラン確認のみ実施した部分

第36図 平成11年度6~10区平面図



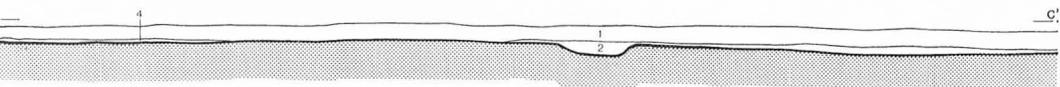
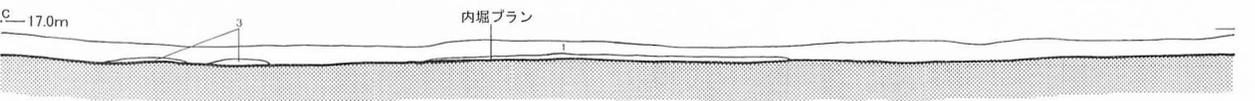
11 a-a' 土層説明

- |            |  |
|------------|--|
| 1 黒色土      | ローム粒子、ロームブロックを少量含む。(芝生植え込み部分)          |
| II 灰褐色シルト  | 浅間軽石、酸化鉄粒子、礫、ガラスを多量に含む。(公園盛土)          |
| III 黄褐色シルト | 礫を多量に含む。しまりあり。(旧道部分)                   |
| 1 灰色シルト    | 浅間軽石を少量含む。(水田耕作土)                      |
| 2 暗褐色シルト   | ローム粒子、ロームブロック、浅間軽石を多量に含む。(水田整地土か)      |
| 3 灰褐色シルト   | 浅間軽石を多量、ローム粒子、炭化物粒子、酸化鉄粒子を少量含む。(水田耕作土) |
| 4 褐色シルト    | ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。                    |
| 5 暗褐色シルト   | ローム粒子、白色粒子を多量に含む。粘性あり。                 |
| 6 黒色シルト    | ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性強。(A-A' 4層と似る)    |
| 7 黄褐色シルト   | ローム粒子、ロームブロックを多量含む。(地山崩落土)             |
| ① 暗褐色土     | ブラックバンド                                |
| ② 暗茶褐色土    | ブラックバンド                                |



11 b-b' 土層説明

- |         |   |
|---------|---|
| 1 耕作土   |   |
| 2 耕作土   | 下面に浅間軽石が堆積。                               |
| 3 暗茶褐色土 | ローム粒子、白色粒子を僅かに、茶褐色粒子を多量に含む。粘性弱、堅微。植籾片を含む。 |
| 4 黄灰色土  | ローム粒子を多量に含む。浅間軽石と上層の耕作土ブロックを含む。           |



11 c-c' 土層説明

- |          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| 1 灰褐色シルト | ローム粒子、浅間軽石を少量含む。(現代の水田耕作土)       |
| 2 褐色シルト  | ローム粒子、同ブロックを多量、浅間軽石を微量に含む。(整地土か) |
| 3 暗褐色シルト | 白色粘土ブロック(FAc)、ローム粒子を少量含む。粘性あり。   |
| 4 褐色シルト  | ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。              |



第37図 平成11年度土層断面図(5)

さ0.2m内外の水田耕作土を削除するとすぐに確認面（標高16.6m）となった。中堤の確認幅は12.76m、外堀の確認幅は15.0mであった。

## 10区

後円部中堤隅角に設けた平成9年度1区の左側に隣接して設けた調査区で、幅4.5m、長さ41.7mの調査区である。標高16.4mラインまで削平を受けており、3枚の水田層と公園造成土に覆われていた。このうち最下層の水田耕作層には浅間A軽石を多量に含んでいた。また、中堤上には畦道と推定される掘り残しと暗渠があった。確認面の精査によって、ローム面の中堤と外堤に挟まれた状態で暗褐色の外堀覆土が確認された。その幅は12.44mあった。

### 水堀の水抜きに伴う左側内堀・中堤境界部の遺物取り上げ（第38図）

発掘調査期間中の水中ポンプ稼働期間中に現状を確認したところ、左側中堤の中間部52mの区間においては、内堀の立ち上がり部に倒れ込んだ状態で円筒埴輪が露出していたので、清掃したところ、5個体の円筒埴輪が検出された。これらは出土状態から中堤上の内堀側円筒埴輪列に属していたことが明らかで、直近の内堀立ち上がり部に張り付くようにして出土した。内堀が埋没する際に、最初に中堤表面の崩落に伴って堆積した三角堆積中に包含されており、稲荷山古墳の中では最も早くに転落した埴輪群である。内訳はA1類が2個体（51・53）、A1ないしA2類が1個体（48）、A3類が2個体（47・50）で、すべてA類に属していた。このことから中堤内堀側には6条凸帯で大型の円筒埴輪と5条凸帯で中型の円筒埴輪とが混用されて埴輪列を形成していたと見て誤りない。

また、立ち上がり部より少し内側となるN16グリッドからはC1類で完形の朝顔形埴輪38、A3類の39、A4類の36が、隣接するN17グリッドからはA2類の37、A1ないし2類の40と41が出土した。これらも残存率の高さと出土位置から、中堤上より流入した可能性が高い。

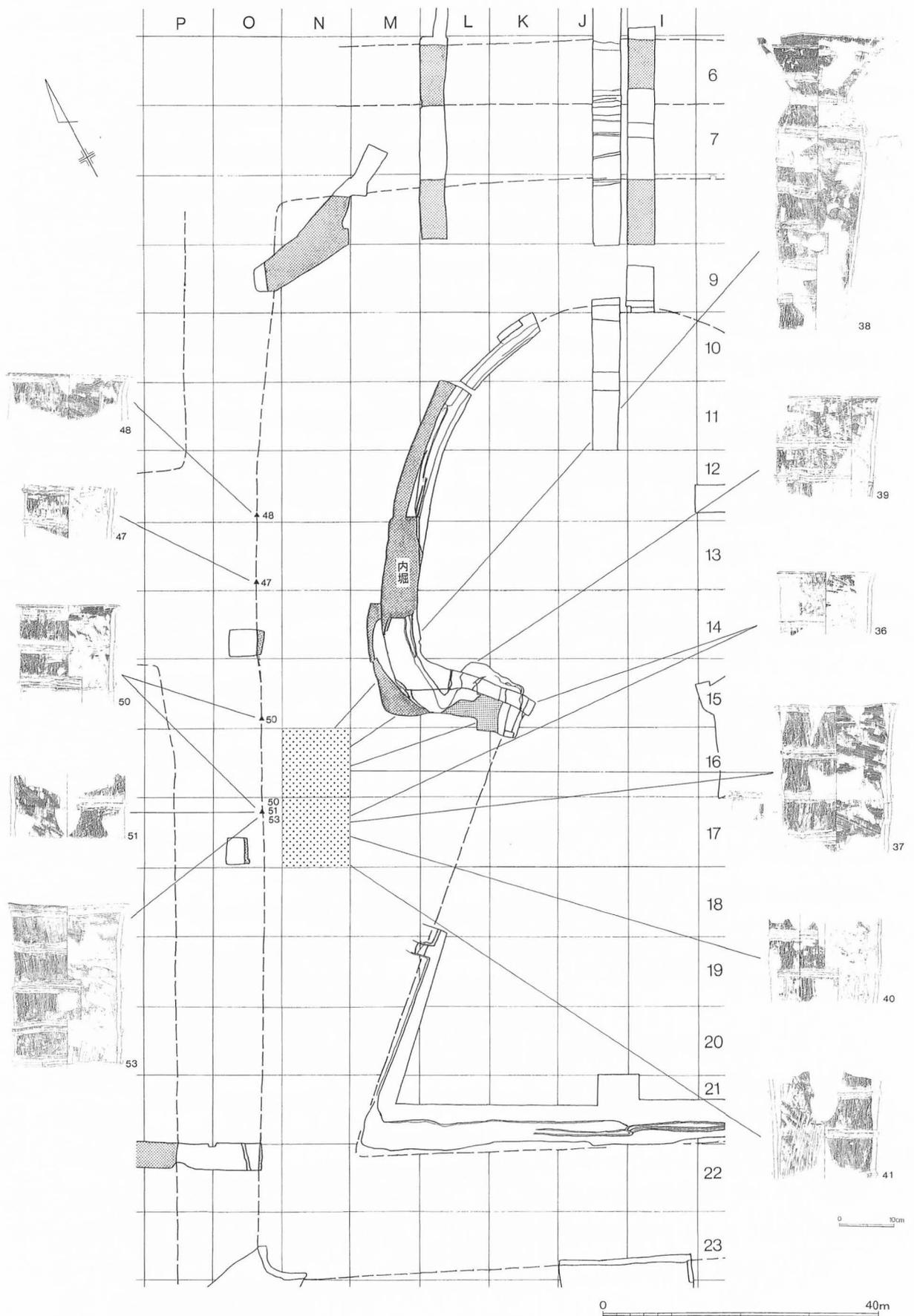
このほかの破片資料では、O16グリッドからA2類、O17グリッドからA類、N16グリッドからA2類、O19グリッドからA類の朝顔形円筒埴輪が採集された。このほか表面採集No.2～6と注記された破片はいずれもA1・2・3・4類に属している。いずれも堀底付近にあったため、水堀の復原から難を逃れた埴輪ばかりである。こうした状況を総合すると、西側中堤上の内堀側埴輪列は当初A類に属す円筒埴輪だけで構成されていたことと、かなり早い時期に内堀内に転落したことを推定できる。例外的なC1類朝顔形埴輪は後で追加された可能性がある。

## 第4節 平成13年度の調査

平成11年度までの調査において内堀の範囲が確定していない場所があることから、文化庁と協議の上、文化財保護課が主体となり、県費単独で試掘調査を実施した。調査期間は平成14年2月26日から3月7日、調査面積は281㎡であった。内堀左奥隅角付近には調査区を2箇所設けて、プラン確認を行った。水田耕作等によって遺構確認面の状態はよくなかったが、2区において幅8.7mの外堀を確認した。くびれ部に対応する中堤内堀側に設けた3・4区では立ち上がり部を検出できた。それぞれの調査区から円筒埴輪片が少量出土した。遺構覆土の掘り下げは行っていない。

注

- 1 行田市教育委員会の中島洋一・埼玉県埋蔵文化調査事業団の剣持和夫両氏からご教示を受けた。
- 2 層状の堆積が認められるわけではなく、まばらに降下した灰が風雨によって徐々に土層中に包含された状態であるので、この層位はF.A.降下以後に時間をかけて形成された層としてとらえる必要がある。



第38図 平成11年度西側内堀・中堤遺物出土位置図